

Title	<2>学内連携
Author(s)	
Citation	京都大学高等教育叢書 (2015), 34: 15-111
Issue Date	2015-03-17
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/197301">http://hdl.handle.net/2433/197301</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## II. 学内連携

## II-1. FD 研究検討委員会

### 1. FD 研究検討委員会の概要

FD 研究検討委員会は、FD に関わる大学設置基準の改正（2008 年度）に先立ち、2006 年 12 月に発足した。本委員会の設置は、高等教育研究開発推進センターが 2006 年 7 月に、学部をもつ 10 の研究科を対象として、FD や教育改善に関わる活動状況やそれに対する支援の要望等についてヒアリング調査を実施したことがきっかけとなっている。そこでは、各研究科がそれぞれ実質的な教育改善活動に取り組んでおり、それらの取組に関する情報をお互いに共有することが有用であり、また、その場を通して、本学としてそれらの取組を組織化することが重要であるとの認識が共有された。従って、本委員会は、FD 活動を各研究科に対してトップダウンで強要することはせずに、FD に関わる情報収集・共有の場と位置づけることが望ましいとされ、そのことから、「FD 研究検討」という委員会名が付けられたものである。また、各部局が FD を実施する際に何らかの支援を必要とする場合、あるいは、研究科横断的な FD 活動などのニーズが生じた際などに、高等教育研究開発推進センターが適宜支えていく体制をとっている。

委員会の当面の課題としては、当初、1) 各部局で実施されている FD 活動に関連する情報の集約、2) 他大学（外国の大学を含む）等で実施されている FD 活動等の情報提供、3) 公開研究会、勉強会等の開催、4) 各部局が企画する FD 活動への全学的支援体制の組織化、5) FD 関連情報のホームページ化、6) 「大学院生のための教育実践講座（プレ FD）」の開催、7) 本委員会の自己点検・評価の実施、以上 7 項目が取り上げられ、これらの課題を実行するため、ワーキンググループ（以下、WG）を発足させ各種課題に取り組んできた。WG は、FD 研究検討委員会委員と高等教育研究開発推進センターのスタッフで構成される少人数のグループから成り、情報の収集と提供、とりわけ、ホームページの維持管理をミッションとする第 1WG、および、部局の FD 活動や部局横断型 FD 活動の支援をミッションとする第 2WG の二つで構成された。なお、2014 年度より、委員長は飯吉透高等教育研究開発推進センター長・教授が選任されている。また、委員会の活動全般は、学務部教務企画課によって所掌されている。

### 2. FD 研究検討委員会の 2014 年度の活動概要

FD 研究検討委員会の活動は、二つの WG を中心とした活動の他、委員会としての活動の三つのレベルで活動が行われてきている。

第 1WG では、FD 研究検討委員会のホームページを開設 (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>) し、委員会の活動に関わる資料や記録、また、各部局の FD や教育改善関係の資料等を収集し、それらはホームページ上で参照・共有することができる。

第 2WG では、高等教育研究開発推進センターとの共催、協力の形をとりながら、プレ FD、公開授業・検討会、部局 FD 活動支援、『京都大学の FD』の刊行などを行っている。

委員会全体では、2010 年度より開始された、新任教員教育セミナー、FD 研究検討委員自身を対象とする勉強会などが行われている。

2014 年度に関しては、以下のような活動が行われている。

## ① 第1WGの活動

### ◇ホームページの充実

FD 研究検討委員会主催、あるいは、部局等との共催の FD 活動が、ホームページに公開され、情報共有が図られている。ホームページ (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>) に掲げられている項目は、「委員会について（委員会概要、委員長挨拶、規程、活動日誌）」、「委員会の活動（主催、共催・協賛）」、「勉強会（勉強会、授業評価ワークショップ）」、「教育・学習実態調査（自学自習等実態調査）」、「リソース（委員会刊行物、部局の FD、教員の取り組み、全学の教育改善、部局の FD リソース、おすすめ授業）」となっている。

「委員会の活動」のサイトには、FD 研究検討委員会主催、あるいは、共催・協賛などの活動（ブレ FD、新任教員教育セミナー、公開授業・検討会、勉強会など）の案内と実施記録が掲載されている。また、「自学自習等実態調査」のサイトには、2011 年度自学自習等実態調査の報告書が <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/resource/2013jigaku.pdf> に掲載されている。「リソース」のサイトには、FD 研究検討委員会の勉強会などで持ち寄られた各部局で行われている授業評価アンケートが、<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post04.php> にアーカイブされている。

「おすすめ授業（<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/recommend/list.php>）」においては、京都大学 OCW（Open Course Ware）（<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>）から、おすすめ授業の紹介を開始した。OCW では、これまでに 2,000 もの講義ビデオが蓄積されており、アクティブラーニング型授業や英語での授業など、授業デザインや教室内で実際に教える際に役立つ講義ビデオを紹介したものである。

## ② 第2WGの活動

### ◇大学院生のための教育実践講座（第9回）

2014 年 8 月 5 日（火）10:00～18:30 に、京都大学百周年時計台記念館 2 階の国際交流ホール、および、会議室を利用して実施された。参加者数は、Basic コース 31 名（内、修了証授与 29 名）、Advanced コース 15 名（内、修了証授与 14 名）名の計 46 名が参加し、参加院生には、総長の修了証が授与されている。詳しくは、II-3. を参照されたい。

### ◇文学研究科プレ FD プロジェクト

文学研究科において、オーバードクター（OD）を対象とした、リレー講義、公開授業・検討会が行われている。本年度も、昨年度に引き続き、哲学基礎文化学系ゼミナール（木曜 2 限）、基礎現代文化学系ゼミナール（木曜 5 限）、行動・環境文化学系ゼミナール（木曜 5 限）で、前期、後期に行われている。リレー講義担当講師は相互に参観し、自分の授業実施も含めて、上記ゼミナールの公開授業および 20 分程度の授業検討会に 8 回以上参加すること、および、2015 年 2 月 19 日（木）13:00～18:30 に行われる事後研修会に参加することを前提として、総長の修了証が授与される。詳しくは、II-2. を参照されたい。

### ◇工学部教育シンポジウム

工学部教育シンポジウムが 2014 年 11 月 28 日（金）16:30～20:00、京都大学桂キャンパスの桂ホールにて行われた。第 10 回目となる今回は、伊藤紳三郎工学部長の開会挨拶の後、十一元三医学研究科教授より、「精神医学における発達障害の歴史と大学における現状について」話題提供があり、続いて、酒井博之高等教育研究開発推進センター准教授より「ICT 利用による授業改善と教育のオープン化について」の話題提供があった。

次に、工学部から 3 名の教員による、授業内容の紹介や学生個々の理解度を向上させる工夫、授業中に学生を引き付けておくための取り組み等の紹介があり、木村健二工学研究科教授（新工学教育実施専門委員会委員長）より、キャップ制導入による学生の履修登録・単位取得状況



の変化に関する分析結果、また過去5年間の授業アンケート結果の分析等について報告があった。予定時間ぎりぎりまで質疑応答が行われ、実り多いシンポジウムとなった。

#### ◇『京都大学のFD2013』の発刊

京都大学のFD活動の情報共有のため、また、アカウントビリティを示す資料の一つとして、ニューズレター『京大のFD2013』を2014年3月に発刊した。

### ③ 委員会全体の活動

#### ◇新任教員教育セミナー

第5回目となる新任教員教育セミナーが、2014年9月25日（木）13:00～18:30、百周年時計台記念館2階で、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師、蓮行（れんぎょう）氏によるプレワークショップ「学生に届く声ー授業におけるコミュニケーションスキルのためのワークショップー」、ミニ講義、「私の授業（国際高等教育院 人間・環境学研究科教授 高橋由典）」の紹介、グループ討論などのプログラムが実施された。新任教員の参加は午前の部30名、午後の部80名。詳しくは、II-4. を参照されたい。

#### ◇FD研究検討委員会「勉強会」

本年度のFD研究検討委員会の勉強会（通算第11回）は、「コースツリー勉強会」というテーマで、二回にわけて行われた。第一回目は、2014年7月22日（火）13:30～17:00、百周年時計台記念館2階 国際交流ホールにて、第二回目は、2014年10月20日（月）13:30～15:00、総合図書館3階のライブラリーホールにて実施された。

第一回勉強会では、コースツリー作成事例について、松下佳代高等教育研究開発推進センター教授、服部憲児教育学研究科准教授、村上章農学研究科教授より説明があり、その後、コースツリー作成上の課題やカリキュラムの分析についての意見交換を行った。

第二回勉強会では、「コースツリー作成のポイント」について、松下佳代高等教育研究開発推進センター教授による講演が行われ、その後、相談会が行われた。

（飯吉 透）

## II-2. 文学研究科プレ FD プロジェクト

### 1. 文学研究科プレ FD プロジェクトの概要

#### 1-1. 6 年を終えた文学研究科プレ FD プロジェクト

プレ FD とは、これから大学教員（ファカルティ）になろうとする大学院生や OD（オーバードクター）・ポスドクのための職能開発の活動を指す。

京都大学におけるプレ FD 活動については、下記の HP に詳しいが、文学研究科プレ FD プロジェクトはそのうちの一つであり、今年度 6 年目を終えた。

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/>

本プロジェクトの流れは、3 年目の 2011 年度に事前研修会が加わって以降、大きな変化はない（図 1 参照）。本プロジェクトにおいて実施される授業はすべて公開授業とされ、毎回の授業終了後 20 分程度の授業検討会を行う。今年度の講師の担当回数は、2 回～4 回であった。授業の担当、他の講師の授業の参観を行った上での検討会への参加、そして総括の研修会への参加をもって、京都大学総長による修了証が授与される。

なお、文学研究科プレ FD プロジェクトの詳細は、2013 年に刊行された書籍（田口ほか, 2013）も参照されたい。本稿では、今年度のプロジェクトの詳細情報ならびに関係者の声、また、昨年度参加者のアンケート結果の報告に加えて、新たな展開について紹介したい。

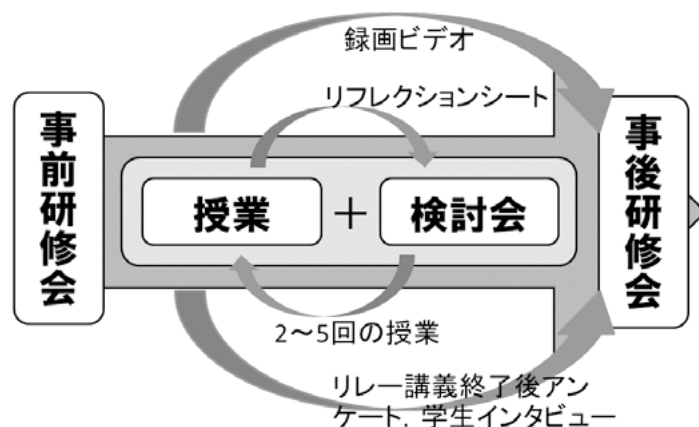


図 1. 文学研究科プレ FD プロジェクトの流れ

これまでの参加者数を表 1 にまとめた。参加者数の累積は、延べ 166 名である。

表1. 文学研究科プレFD参加者数

	2009年度 (前期・後期)	2010年度 (前期・後期)	2011年度 (前期・後期)	2012年度 (前期・後期)	2013年度 (前期・後期)	2014年度予定 (前期・後期)
講師	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ
	25	15	9	10	8	10
	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ
	6	10	9	11	10	9
		行動・環境文化学 系ゼミナールⅠ・Ⅱ	行動・環境文化学 系ゼミナールⅡ	行動・環境文化学 系ゼミナールⅠ・Ⅱ	行動・環境文化学 系ゼミナールⅡ	行動・環境文化学 系ゼミナールⅡ
		11	7	6	6	4
教務補佐員	1	4	3	3	4	3
文学研究科教員	2	6	5	5	6	6

## 1-2. 2014年度文学研究科プレFDプロジェクトスケジュール

### 1-2-1. 前期スケジュール

#### 文学研究科プレFDプロジェクト事前研修会

2014年4月3日 京都大学文学部第6講義室

<プログラム>

#### 第1部 プロジェクトの全体像をつかむ

- ・ 挨拶（文学研究科教授 水谷雅彦）
- ・ プロジェクトの概要説明（文学研究科准教授 伊勢田哲治、高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈）
- ・ 昨年度の授業の様子（高等教育研究開発推進センター特定助教 田中一孝）
- ・ 先輩の声（文学研究科教務補佐員 安井大輔・赤嶺宏介・佐金武）

#### 第2部 授業設計について知る

- ・ 授業のデザインの方法ーワークシートの活用ー（高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代、高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈）

#### 第3部 コースを考える

- ・ グループミーティング

#### 哲学基礎文化学系ゼミナール

2014年4月10日～7月10日 毎週木曜日2時限 10:30～12:00

検討会 12:00～12:20

<授業テーマ>

太田 裕信	哲学の場所ー日本において哲学することを考える
渡邊 一弘	めくるめく懐疑論の世界
満原 健	間文化哲学的視点から見た日本の哲学
杉本 俊介	「倫理」とは何か：倫理学入門
須藤 英幸	アウグスティヌスの「告白」と「三位一体論」ー語り得ない神についての言明
藤田 俊輔	ヤスパースとブーバーの人間存在論 前期のまとめ

#### 基礎現代文化学系ゼミナール

2014年4月10日～7月10日 毎週木曜日5時限 16:30～18:00

検討会 18:00 ～ 18:20

＜授業テーマ＞

川 崙 陽	朝鮮における「皇民化」政策と朝鮮
佐藤 夏樹	アメリカ社会とヒスパニック
坂 堅太	高度成長期の日本文学における労働者表象について
森下 達	戦後日本のポピュラー・カルチャーにおける核エネルギー表象

## 1-2-2. 後期スケジュール

### 行動・環境文化学系ゼミナール

2014 年 10 月 2 日～2015 年 1 月 15 日 毎週木曜日 5 時限 16:30 ～ 18:00

検討会 18:00 ～ 18:20

＜授業テーマ＞

松谷 実のり	移住と労働の社会学
石野 誠也	1. 電気生理学的実験手法 2. 神経細胞の情報符号化と脳部位間ネットワーク
岩崎 純衣	動物の「内省的能力」を探る (1,2) —比較認知研究からのアプローチ
中園 智晶	Brain-Machine-Interface をもちいた脳内情報表現の解析 (1,2) —脳科学でこころは操作出来るか？

### 哲学基礎文化系ゼミナール

2014 年 10 月 2 日～2015 年 1 月 15 日 毎週木曜日 2 時限 10:30 ～ 12:00

検討会 12:00 ～ 12:20

＜授業テーマ＞

太田 和則	プラトンの世界観—「洞窟の比喩」を読む
太田 紘史	道徳心理学入門
根無 一行	現代フランス現象学と宗教
梅野 宏樹	なぜ何も無いのではなく、むしろ何かがあるのか？—「存在の謎」入門
南 翔一朗	近代ヨーロッパにおける理性と信仰 後期のまとめ

### 基礎現代文化学系ゼミナール

2014 年 10 月 2 日～2015 年 1 月 15 日 毎週木曜日 5 時限 16:30 ～ 18:00

検討会 18:00 ～ 18:20

＜授業テーマ＞

大西 勇喜謙	科学的实在論論争入門
岡内 一樹	森林からみる現代社会の歴史
中山 俊	フランスにおける文化遺産の保護
パク ミギョン	妖怪と視覚文化
柿本 真代	児童雑誌と子どもの近代

### 文学研究科プレ FD プロジェクト事後研修会

2015 年 2 月 19 日 (木) 吉田南 1 号館 (予定)

## 2. 2014 年度の文学研究科プレ FD プロジェクトを振り返って

### 2-1. 文学研究科のコーディネーターから

本プロジェクトでは、文学研究科の教員がコーディネーターとして各系が開講する授業の統括を行っている。以下は、2014 年度のコーディネーターによる振り返りである。

#### 統括コーディネーターから

本年度の総括コーディネーターを務めさせていただいたが、前任者同様、ほとんど何も貢献できることはなかった。というのも各系のコーディネーターの先生方や優秀な教務補佐員の皆さんに運営の実質をお任せしており、それで何の問題もなかった、というより極めて円滑な授業運営がなされていたからである。関係する方々に感謝したい。とりわけ教務補佐員の方々に、毎回の講義とその後のディスカッションに関する詳細な報告をメールでお届けいただき、それぞれの講義と議論の質の高さに毎回驚嘆できたことは幸いであった。講義担当者は、おそらく相当時間をかけて講義準備をされたのであろうが、いずれの講義も専任の教員になった将来において毎回の授業にこれほどの質を保つだけの準備をする余裕があるのだろうかといういらぬ心配をいだかせるほどのものであった。プレ FD という京大文学部独自の試みが開始されて 6 年になる。開始時に思想文化学系の系代表として企画に手探りで参画した者としては、講義担当者が次々に自立した大学教員になっているという報を聞くにつけ感慨深いものがある。予算面を始めとして多くの問題が山積していることは事実であるが、あらためて関係各位のご協力をお願いする次第である。

(文学研究科教授 水谷雅彦)

#### 各系のコーディネーターから

##### 行動・環境文化学系

今回初めてプレ FD のコーディネータとして参加しました。以前からプレ FD のことは聞いており、コーディネータや参加したポスドクたちからその経験について話してもらったことはあったのですが、今回実際に参加して非常に新鮮でよい経験をしたと思います。今回 4 人のプレ FD の講義に参加し、6 回の授業を聞いたのですが、どれも実に周到に準備されたよい授業だったと思います。もちろん、若い講師たちの勇み足や、ちょっとした思い込み、経験不足からくる緊張などはあるわけですが、それを補って余りある熱気があり、感動を受けました。授業のあとの講評も楽しい時間でした。それぞれの講師たちが自分の講義に生かそうと鋭いコメントを行うわけですが、自分が学ぶべき部分をほめ、気が付いた問題点を指摘するうち、あっという間に時間が過ぎました。講評を受けた講師は指摘された点を二回目の講義で十分に生かし、他の講師は自分の講義をするときに議論の内容を咀嚼して、準備しており、明らかに講義の質が上がっていました。これにはさまざまな準備の手伝いをし、講評の司会、まとめをしてくれた安田氏の貢献も大きかったかと思います。

講師たちにもコーディネータにも負担にはなりますし、特に教務補佐負担が大きすぎるのが問題かもしれません。が、プレ FD は、それだけのコストを負担すべきよい制度であり、なんとか継続すべきであると思います。

(文学研究科教授 田窪行則)

## 哲学基礎文化学系

小・中・高の教員とは異なり、大学では授業をするための訓練はこれまでほとんどなされてこなかった。私自身も大学院を出たばかりで非常勤講師をしたときは、大変苦勞した記憶がある。このプレ FD プロジェクトでは、講師は授業計画を綿密に立てて講義を実施し、終了後に学生や他の講師から講義の仕方について忌憚のないフィードバックを受ける。これは今後優れた授業をするための技法を身につけるまたとない機会となるだろう。コーディネーターとして参加した私自身、時間の割り振りや黒板の使い方やその他の授業手法について学ぶところが多々あった。また、古代哲学、道徳哲学、宗教哲学、形而上学など、各分野における最先端の内容を初学者にわかりやすく講義しようとする OD たちの情熱に強く触発されもした。講師たちとコーディネーターにとって、このプレ FD がたいへん有意義であることは間違いないだろう。後期は受講生が若干少ないのが残念であったが、みな若い講師たちの学問への情熱を受け取ったことと思われる。プレ FD に参加した講師たちと学生たちの今後が楽しみである。

(文学研究科准教授 児玉聡)

## 基礎現代文化学系

変な話であるが、わたしは昨年まで2年間プレ FD 全体の統括コーディネーターを務めていたが、実は系のコーディネーターは一度もやったことがなかった。今回初めてこれを担当し、授業に毎回出席してフィードバックをするという作業を行うことになった。

現代文化学系は所帯は小さいながらも多様な専修があつまられている。個人的には、顔は知っていても研究の内容は知らなかったというポストドクの方たちの研究内容の一端を知ることができた（しかも、まったく分野違いの方が私の研究と重なる関心を持っていることが分かった）のが今回系コーディネーターを務めての収穫であった。

授業のスタイルも、プレゼン用ソフトを華麗に使いこなす講師から、昔ながらのプリントアウトと板書というスタイルにこだわる講師まで多様だった。これは受講する学生にとっても変化があつてよかったのではないだろうか。授業のやり方に一つの正解というものはないわけで、それぞれにいろいろなやり方を試す中から自分にあったやり方を見つけ、それを伸ばしていつてもらえればと思う。このプレ FD はそうした実験にはうってつけの場であるので、ぜひもっと大胆に活用していつてもらえればと思う。

(文学研究科准教授 伊勢田哲治)

## 2-2. プロジェクト参加者の声

### 2-2-1. プロジェクト全体に対する満足度

本プロジェクトでは、毎年、プロジェクトの事後アンケートを実施している。昨年度に引き続き、ここでは2013年度の事後アンケートの結果を示したい。

2013年度は3つの系から、14名の回答を得た。アンケートの内容は、資料1に示したように、本プロジェクトの3つの柱である「リレー講義を担当すること」「リレー講義後の検討会に参加すること」「事後研修会に参加すること」のそれぞれの満足度を5点満点で示し、その理由を問うものである。表2に示したように、いずれも4点以上と高い満足度であった。

表 2. 2013 年度文学研究科プレ FD プロジェクト事後アンケートの結果

設問	平均
“リレー講義を担当したこと”に対する満足度	4.2
“リレー講義後の検討会に参加したこと”に対する満足度	4.4
“事後研修会”全般に対する満足度	4.1

「リレー講義を担当したこと」に対する満足度5の理由としては、「京大生という学力水準の高い学生を対象に授業ができる機会を得られたのでよかった。」等が、満足度4の理由として「学生の前で長時間授業をする経験は初めてだったので、内容に対して（学生・参観者ともに）予想外に好意的な反応があったことがまず良かった。一方で時間・内容的配分の不備など未熟な点も明らかになったが、全体的に見て良い経験となったように思う。」「他の非常勤先の授業では、先方の指定した内容で講義をしなければならないことが多いが、このリレー講義では、2回という短い時間ではあるものの、自らの研究を話す形式で講義ができたから。」等があげられていた。授業経験を得たこと、しかもその授業を京大生に対して、自分の研究内容で実施できたことが今年度も理由の一つとしてあげられている。

「リレー講義後の検討会に参加したこと」に対する満足度5の理由としては、「自分と同じように講義をしている講師たちから自らの授業についての意見を直接聞くことができ、そのことで自らの授業能力をスキルアップすることができたから。学生からの建前的アンケートではなく、授業後すぐその場で率直な意見を聞けるというのがいいと思います。」「行った授業に関する感想をその直後に得ることが出来、非常に有り難かった。受講生に理解して貰えないならば授業の意味はないわけで、受講生からの声を元に授業内容を組み替えた部分が少なからずあった。また、他の講師からの意見も、自分の不出来な点を教えてくれると共にリレー講義全体と一緒に作っている側面があり、非常に意義深かった。検討会で出される意見は、その回の担当講師だけでなく、そのあとの講師にも影響を与えていたと思う。但し、デザインワークシートと実際の授業との異同を重視してしまう側面があったことは確かであり、授業の柔軟性というものを見落としていたかも知れないとも思う。」等をあげることができる。また、満足度4の理由としては「分野の異なる方の授業を参観することで、自らの教育内容や教授方法を客観的にみることができた。パワーポイントによるスライドが必ずしもベストではない可能性に気づけたのは収穫だった。」「京都大学文学部の学生は比較のおとなしい（それほど対応の難しい注文を講師にぶつけない）ので、授業構成等の問題点がかえって見えにくくなる面があるが、その面を他の参観者の意見を聞くことでカバーできたため。ただし、参観者は実質的には全員文学研究科出身の研究者で、逆に意見がやや堅すぎる（内容面の学術的真偽性などにこだわりすぎ、など）と思われる面もあった。制度上難しいのかもしれないが、学生を検討会に連れてこられれば、よりよいのかもしれない（リフレクションシートで一応学生の意見を拾ってはいるが、学生は学生で講師に対して気を使っているので、正直な意見は出てきにくい面もある）。」「満足しているのは、じぶんの授業にたいして、先生や同輩の意見を聞けたからである。こうしたことはリレー講義以外ではありえないであろう。ただ「非常に」ではなく「まあまあ」であるのは、先生や同輩たちに少なからずの遠慮が見てとれたためである。これも仕方のないことではあるが、多少無礼となろうとも、もっと率直な意見が欲しかった。」等をあげておきたい。検討会によって自分自身の授業を振り返ることができたこと、また他者の授業を検討することで、授業の工夫に多様に接することができたことが今年度もあげられていた。なお、授業デザインワークシートで事前に計画した通りの授業をすることが重要ではないことは、今後も注意

して伝えていく必要がある。また、検討会での指摘に遠慮があることを数人ではあるがあげていた。本当に遠慮があったのか、本人がそのように感じただけで実際は率直な意見であったのかは不明であるが、授業者が、自身の授業へのフィードバックを希望し、かつ重視していることが改めてみてとれる。

「事後研修会への満足度」の満足度5の理由としては、「私自身は、より良い講義を行う方法に興味を持って参加していたが、案外演習などの形式で授業を行ってみたかった、という意見があり、自分もそれに全面的に賛同できると気付いて驚いた。他の講師（既に他大学での授業の経験を有する講師や、他専修の講師を含む）の見方は、私のものと異なりつつも、大きくは同じ方向を向いていた。すると、皆考えることは同じなんだな、と思われ、新米講師の思考様式のようなものがあるのだろうと感じられた。これは、自分達の考えを相対化し、改善を考える上で重要ではないかと思う。」等が、満足度4の理由としては「概して『事後研修』という、単に一方的に話を聞かされる場になることが多々あるが、こちらを積極的に議論に参加させるなど、全体的によく工夫がされた企画であると感じた。」等が挙げられていた。検討会とは異なるレベルで授業を相対化する機会であったことなどが確認できた。

なお、事後研修会については、プログラム内容を細分化してそれぞれに対しても評価を求めている。以下にその結果を示す。

## 2-2-2. 事後研修会に対する満足度

前述したように、事後研修会そのものについての満足度は4.1点であったが、個別のプログラムの得点は、表3に示したように、それよりは低くなっている。

表3. 2013年度文学研究科プレFDプロジェクト事後研修会に対する満足度の結果

設問	平均
「ミニ講義・ミニミニ講義による情報・知識の提供」に対する満足度	4.0
「ワークシートの作成と振り返り」に対する満足度	3.9
「グループ・全体ディスカッション」に対する満足度	3.8

ミニ講義、ミニミニ講義についてはおおむね、満足度が高かったと考えられる。ワークシートについては、今回、「永続的理解」を中心とし、ミニ講義とワークを連動させることを行ったが、下記のように、ある程度、こちらの意図は理解され、効果があったと判断できる。

「授業後の検討会や、ビデオを見ての振り返りワークシートだけではカバーできなかった点を反省することが出来、有意義だった。それらに於いては授業中の立ち居振る舞いや内容にばかり目が行き、授業の構造まで振り返ることは出来ていなかったように思う。実際に授業を組み立てる際には構造に気を配っていたのに、検討会や振り返りワークシートでは見過ごされる結果となり、意識化できていなかった。より高次の視点を供給してくれたという点で、有意義だった。(満足度5)」 「永続的理解を核に持つ知識の構造というデザイン(ミニ講義スライドNo.24)は、非常に重要なことなのですが、講義を聞いていただけだと、そこまで記憶に残らなかったと思います。ワークシートで実際に自身の授業を振り返って書くことで、私自身の忘れ残りにすることができました。いまこのアンケートに回答していて、その点でこの研修自体がよくデザインされていたとあらためて感じました。コピーを作成されていたので、できればほかの人のワークシートについても見せていただければありがたかったです。(満足度4)」

一方で、時間が不十分であったことが多く指摘されていた。全体のプログラムの構成を再考



する余地がある。

グループ・全体ディスカッションについては、「盛りだくさんの内容で、高等教育推進センターの先生方のご発表は教育の専門家としてのマクロ的な視点が勉強になったし、実際に講義を担当した後での担当者どうしのディスカッションは刺激があった。」という意見を満足度の高い参加者の代表とみることができる。満足度3の意見として「講義の内容が、講師たちのおこなった授業の具体的な経験を参照するものであってほしい。」というものがあつた。近年では、センター教員が毎回の検討会に参加するのはほぼ不可能であるため、情報源が教務補佐員からのメーリングリストによる報告のみとなっている。講義内容はある程度定式化してきているが、特に具体例などについては、教務補佐員からの意見を聴取する機会をもうけるなど、教務補佐員の役割が相対的に重要となっていることが再確認された。

### 2-2-3. プロジェクト全体に対する意見・感想

最後に、質問4.「プレFDプロジェクト全体に対するあなたの意見・感想を教えてください。」という設問への回答を列挙しておきたい。来年度は7年目となるが、プロジェクトの継続が重要であると改めて感じた。

---

教育に不慣れな若い人が、短い数コマ分で実践的に授業を行い、それに対してフィードバックももらえる、というのは、やり終えてみればとてもありがたいことだったと思う。内容（自分の研究関連）やコマ数（数コマ分）も適度な負担で、その分授業方法等の教育面に意識を向けることができた。

今後、半期全全ての授業を担当したり、教授内容にも（必修科目のように）制限がついたりして負担が増えた時に、今回のリレー講義をどう活かすか、そのような授業では今回と比べてどのような違いがあるか等について、事後研修で言及してもらえるとありがたい。

---

スタンダードな教育の練習の場としてはとても良い機会だと思います。ただ、教育の型は本来多様であることを教員にも学生にも自覚させ、良い意味で「学生を無視した」個性的なスタイルの教員が生まれる「あそび」を残す必要もあるかと思います。

---

全体的に非常に満足している。私はすでに他大学で数年前から非常勤講師を経験しているが、はじめて経験する前にこうした機会が得られたらよかったと思う。このような機会を提供していただき、準備をしてくださった方々に感謝したいと思う。

---

私にとっては大変貴重かつ有益な機会でした。後進のためにも今後もぜひ継続されることを希望します。

---

講師経験を与えようという試み、その中でよりよい授業を作るための学習機会を提供させようという意図など、大変素晴らしいものであり、文学部以外にもこういった試みが広まってほしいと感じる。

---

私はこのプロジェクトに感謝しており、是非来年以降も継続して貰いたいと思っている。特に、授業後の検討会と授業ビデオの配布は、実際の半期以上の授業では行われていないだけに、教えるのが初めてでない講師にとっても有益なのではないかと思う。しかし、それらを含めたプロジェクトによるフォローは基本的に手厚いものの、このアンケートの中で触れた点で更なる支援が得られれば素晴らしいと思う。則ち、(i) 講義以外の授業の形式も可能であると積極的に知らせる、(ii) 授業は本来柔軟なものであることを忘れず、検討会に於いてデザインワークシートとの異同に大きく拘ることのないようにする、(iii) 教授法に関する講義を事前研修会の時点でより多く提供する、等である。

---

貴重な経験をさせていただきありがとうございます。これからも続いていってほしいと思います。

---

全体的に言ってかなり満足しています。FDの関係者の皆様の尽力の賜物であると思います。なんの不满もありません。

---

私は他の系の授業に参加はしませんでした。いろいろと忙しかったためですが、1, 2回は必ず他の系の先生の授業も参観しなければならないという縛りもあっても良いのかなと思いました。

---

---

ブレ FD プロジェクトを通して最も有益だったのは、授業後の検討会だった。学生の意見や疑問をリフレクシオンシートを通して知り、また講師の立場から改善点を指摘されることで、実際に授業をするための貴重な訓練の場となったと感じる。

---

今後、大学の教員になるための学びの場として（授業等の教育技術を含めて）大変有意義なプロジェクトであると思います。

---

個々人の講師の能力の向上のみならず、この企画が 10 年 20 年続いていったときに、大変興味深いデータが収集できるかもしれないので、その点に期待しています。

---

先にも書いた通り、このプロジェクトへの参加は、貴重な機会であった。それを通して痛感したことは、やはり授業は実際にやってみなければわからず、しかも何度も繰り返し経験しなければ上達しないこともある、ということではあるものの、単に繰り返して行くのではなく、そこに或る一定の方向づけを与えるための意識的な視点を設定するためにはこれ以上ない機会であったと思う。ひとりの教育者の道のりを巨視的に考慮すれば、未来の教育者の誰にとっても、こうした機会を得ることは、得こそあれ、決して損はないと確信する。プロジェクトの今後の継続を望むとともに、今後の展開にもできるかぎり寄与していきたい。

---

既に前年度までに修了書をすでに取得した講師と、初年度となる講師＋企画者・教務補佐員との間に、プロジェクト全体に対する熱意の点で温度差があるかもしれない。

---

### 3. プロジェクトの新たな展開

#### 3-1. プレ FD プロジェクトの評価

プレ FD プログラムは、多くの研究大学において整備されるようになったが、それぞれのプログラムの効果や限界についての検討が十分になされているとはいえない状況である。

文学研究科プレ FD プロジェクトについても、年度ごとの満足度についてはまとめているが、具体的にどのような能力が身についたのか、また、それが実際にファカルティになったときにどのように役立っているのかの検討はまだ始まったばかりである。文学研究科プレ FD プロジェクトの参加者の 5 年間のデータからは、プレ FD によって受講者が悩みを共有し、今後教員として活動することに自信を深めることができたこと、プレ FD が受講者の教育改善の意識を高めたこと、また他校での活動においてもプレ FD での経験を活かそうとする態度の醸成を促したことが明らかとなっている（田中ほか、印刷中）。今後は、修了生の追跡調査を計画し、実施していくことが必要であると考えている。

#### 3-2. コースデザインを中核とした発展的プログラム

文学研究科プレ FD プロジェクトは、実際に教壇に立つ経験を核とした、プレ FD プログラムとしては最も完成度の高いプロジェクトの一つであるといえる。一方で、それがリレー講義であるために、講師が経験できるのは、90 分の授業を複数回デザインすることであった。哲学系の授業において、コンセプトマップを導入して以降、コース全体をどうデザインするかということが、検討会の議題となることはあったが、15 回を単位とする半期のコース全体をデザインするという経験を積むには至っていない。

今年度の新たな試みとして、このコースデザインを中核とした、文学研究科プレ FD 修了生による発展的なプログラムが進行しつつある。ともに、修了生が中心となって新規科目を開設するという試みである。一つは、大学コンソーシアム京都との連携によるものであり、もう一つは、特定の大学からの講師派遣の依頼によるものである。

2つのプログラムともに、実際に授業提供がなされるのは来年度であるが、半期のコースをデザインするにあたっては、90分の授業をデザインするのとはまた異なる知識や能力が必要である。センターとしては、プレFD修了生の雇用機会の拡充とともに、この新たな授業提供に関してどのようなサポートが必要であるのかを検討していきたいと考えている。

#### 引用文献

田口真奈・出口康夫・高等教育研究開発推進センター（2013）『未来の大学教員を育てる—京大文学部・プレFDの挑戦』勁草書房．

田中一孝・畑野快・田口真奈（印刷中）「プレFDを通じた大学教員になるための意識の変化と能力の獲得—京都大学文学研究科プレFDプロジェクトを対象に—」『京都大学高等教育研究』第20号．

（田口 真奈、田中 一孝、松下 佳代）

## II-3. 大学院生のための教育実践講座 2014

### —大学でどう教えるか—

#### 1. はじめに

「大学院生のための教育実践講座」は、大学教員を目指す京都大学の学内者を対象にした講座である。「大学院生のための」と銘打たれてはいるが、大学院生の他にも、ポスドク、研究員、オーバードクターなどの参加も多数ある。大学院生は、将来、研究者としてだけではなく、授業を担当することも求められており、まずは教員として授業を担当するための自覚を促し、現在の大学教育における課題を共有することがこの講座の1つの大きな目的である。

2005年度に第1回が実施されて以来、毎年、年に一度の頻度で開催され、今年度で9度目の実施となる。2006年度までは、高等教育研究開発推進センターが企画、運営していたが、2007年度よりFD研究検討委員会の「主催」となり、本センターは「共催」として、企画、運営の補助を行っている。

日本では、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において「教育研究上の目的に応じて、大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る」とされたことも手伝って、この数年、プレFDを実施する大学が増えてきた。代表的なところでは、京大の他に、名古屋大学、広島大学、東北大学、北海道大学、一橋大学、筑波大学、東京大学などがある。本学においても、文学部のオーバードクター（OD）によるリレー講義をはじめとして、大学院生やODを対象としたプレFD活動が年々充実してきている（<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/about/>）。本講座はそうした本学のプレFD活動の中で、最も長い歴史をもつものである。

#### 2. 企画の目的と実施の背景

本講座では過去の受講生の要望を受け、2008年度より「Basic」と「Advanced」の2つのコースを開講している。Basicコースは、将来、大学で教職につくことを希望する大学院生を対象とし、Advancedコースは、昨年度までに本講座を受講した経験のある大学院生、あるいは非常勤講師などで大学において授業担当経験のある者を対象としている。

Basicコースでは、担当教員によるミニ講義で現在の大学教育がおかれた状況や課題を学び、グループディスカッションなどを通して、自分自身がこれまでに大学の授業を受けてきた経験を振り返りつつ、「大学で教えるということ」がどのような課題を抱えているのかを考える機会を設けた。

Advancedコースでは、2名の参加者による模擬授業とそれについて検討を中心に、具体的に大学の授業を構成する際に生じる課題を共有し解決の手がかりを得るためのディスカッションの時間を多く確保している。

昨年度まではBasicコースとAdvancedコースは、開会と閉会のセッションを除けば完全に異なるプログラムであったが、今年度からは両コース共通のセッションを設け、またプログラム全体の構造化も図った。まず、共通セッションについていえば、ミニ講義は従来Basicコースのみ受講するものであったが、大学教育の最前線を紹介するミニ講義1「大学教育の現在

と未来」は、授業担当経験のある参加者たちにとっても有益であると考え、Advanced コース参加者も一緒に受講することとした。さらに昨年度まで Basic コースのみに設けていたボディワークセッションを、両コース共通のコミュニケーションデザインのセッションに変更し、学生同士のコミュニケーションの促し方や発声法などをより実践的に学べるようにした。またプログラムの構造に関しては、従来の Basic コースではグループディスカッションで参加者同士がまず大学教育の課題や悩みを共有した上で、ミニ講義で解決の示唆を得るという構造になっていたが、それだと議論が発散しやすかった。そこで、今年度からはミニ講義を受講した上で、それを議論の呼び水にしてグループディスカッションに移るという構造にし、議論が深化することを目指した。

### 3. 実施概要

#### 3-1. 実施概要

本講座は、2014 年 8 月 5 日（火）10 時から 18 時 30 分まで、京都大学百周年時計台記念館 2 階において開催された。Basic コースと Advanced コースは平行して行われ、ミニ講義や模擬公開授業、グループ・ディスカッションなどのために、国際交流ホール II・III および小・中会議室を使用した。本講座は事前申込者のみを受け付けており、参加者は、当日に、受付で 2 千円（資料、情報交換会代を含む）を参加費として納めた。当日のプログラムに関連する資料として、本稿末にプログラムが掲載された広報チラシ（資料 1）、講義資料（資料 2）事前アンケート（資料 3, 4）、事後アンケート（資料 5, 6）を掲載している。

#### 3-2. 参加者数とグループ構成

今回実施された本講座への参加者数は、Basic コース 31 名、Advanced コース 15 名の計 46 名であった。参加者の所属研究科および階層（修士課程・博士課程・OD や PD を含む研究員など）ごとに、その内訳の詳細を表 1 に示す。

昨年度の参加者数（68 人）に比べ参加者が減少したが、これは昨年度の人間・環境学研究科の参加者数が例年よりも多かったことによる（昨年度 24 名→今年度 8 名）。本講座を知ったきっかけとしては、指導教員やその他の教員、友人の誘いなどが多数挙げられており、こうしたいわゆる口コミが重要であることがわかる（表 2）。また、例年、研究科を横断するように多くの部局から参加者があるが、今年度も同様の傾向が見られた。（15 部局）。今年度も Basic コース参加者は、修士課程と博士課程の大学院生がほぼ半数ずつとなっており、幅広い学年から参加がある。なお本講座は将来に大学教員になることを目指す大学院生・OD・PDなどを主として対象としているが、今年度は初年次教育で情報リテラシー関係の授業を担当する図書館職員の参加が 3 名あった

本講座では、上記の通り、大学院生同士のディスカッションの場を設けている。理系と文系を意図的に混合することで、分野をこえて討議・交流をできるようなグループ構成を行った。さらに、修士課程と博士課程など、参加者の学年もバランスがとれるように配慮し、Basic コースでは 3 つのグループを編成した。ディスカッションの際には、各グループにセンターの教員が 1 名ずつファシリテーターとして入り、議論の進行に関するコーディネートをを行った。Advanced コースについては、人数が少ないことから、グループ編成は行わずに進め、最後のディスカッション・セッションのみ問題意識にあわせて 2 グループに分かれて行った。Advanced コースのファシリテーターはセンター教員 2 名が担当した。

表 1. 各コースの参加者の内訳

研究科・部局	Basic				Advanced			
	人数	内訳			人数	内訳		
		修士課程	博士課程	OD・PD・研究員・ 研究生・その他		修士課程	博士課程	OD・PD・研究員・ 研究生・その他
文学研究科	6		6		1			1
経済学研究科	1		1		0			
人間・環境学研究科	8	5	3		7		5	2
教育学研究科	1	1			0			
工学研究科	1		1		1			1
情報学研究科	2	1	1		0			
農学研究科	2		2		2		1	1
理学研究科	3	2	1		0			
医学研究科	3	2	1		3		3	
生命科学研究科	0				1	1		
基礎物理学研究所	1	1			0			
地球研究統合研究センター	1			1	0			
数理解析研究所図書掛	1			1	0			
法学研究科図書掛	0				1			1
付属図書館	1			1	0			
計	31	12	16	3	16	1	9	6

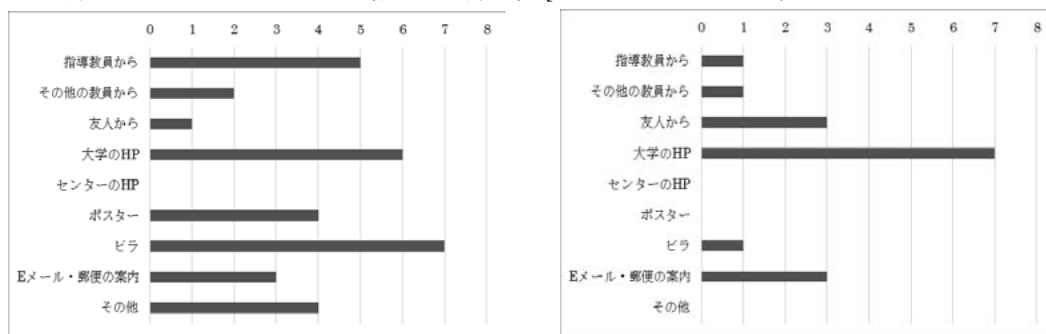
#### 4. 事前アンケートの結果

本講座を実施するにあたり、あらかじめ参加希望者に事前アンケートを実施している。これは、参加を希望する学生がどのような経緯で本講座を知り、どのような動機や期待を抱いているのかといった点を把握すること、およびグループに分かれてディスカッションを行う際のグループ分けの判断材料とすることを目的として行った。質問事項は、基本的に過去の回と共通する内容とした。今年度から、リアルタイム評価システム（REAS）を用い、Web 上でアンケートを行った。

##### 4-1. 本講座を知ったきっかけ

まず、どのようにして本講座を知ったのかを調べるために、「この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）」という質問を行い、表 2 にある 9 項目を選択肢として設けた。表 2 に示した通り、Basic コースにおいてはビラと大学の HP からの誘い、E メール・郵便による案内が、Advanced コースにおいては、その他の教員から誘いが多かった。

表 2. 講座を知ったきっかけ（複数回答可）[ 左 : Basic コース、右 : Advanced コース ]



##### 4-2. 大学での教育経験と教員への志望の度合い

次に、大学での教育経験と教員への志望の度合いを調べるため、問 2 で「大学での教育経

験があるか?」、問3で「大学教員にどの程度なりたいか?」という質問を行った。

問2の「大学での教育経験があるか?」については、Basicコースでは、「なし」が8名、「TA」が18名、「非常勤講師」が3名であった。Advancedコースでは、「なし」が2名、「TA」が11名、「非常勤講師」が4名であった(表3)。以上のように、Basicコース参加者は、教育経験がない者が全体の約半分を占め、また教育経験のある者のほとんどがTAであった。Advancedコース参加者で教育経験がない者は少なかったが、多くはTAの経験のみであった。

問3の「大学教員にどの程度なりたいか?」(5件法、「1:まったく希望していない」から「5:非常に希望している」)については(表4)、Basicコース、Advancedコースともにでは、図書館職員を除いた全員が「非常に希望している」「やや希望している」「どちらとも言えない」のいずれかを回答した。Basicコースの方が「やや希望する」「どちらとも言えない」の割合が高く、Advancedコースに比べて、大学教員になることに迷いを感じる参加者が多いことが示唆されている。

表3. 大学での教育経験(複数回答可) [左: Basicコース、右: Advancedコース]

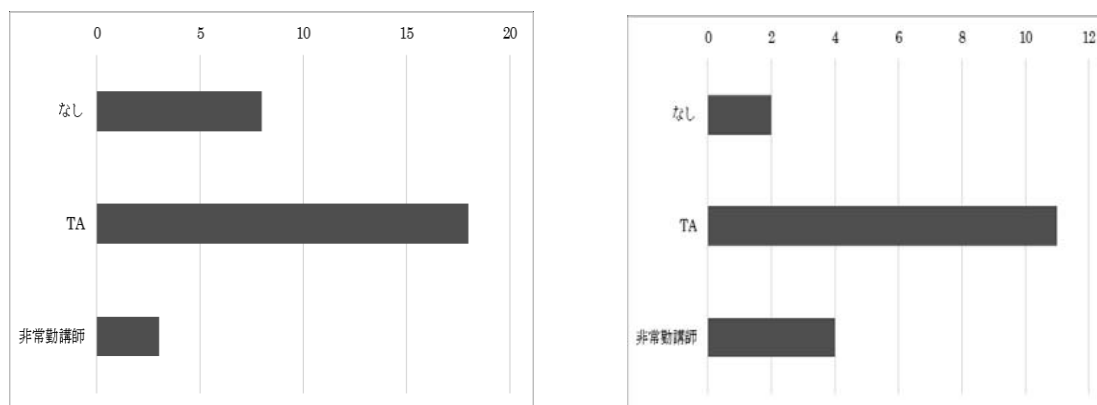
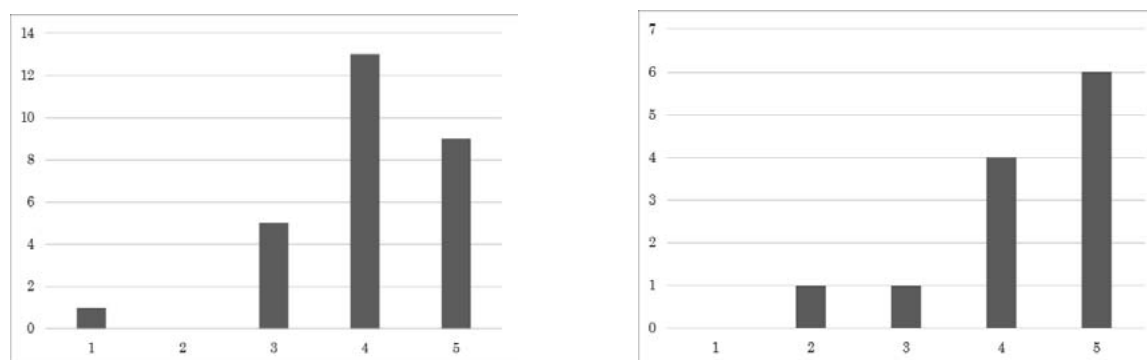


表4. 大学教員になることを希望するか [左: Basicコース、右: Advancedコース]



#### 4-3. プレFDプログラムの効果検証

本年度より、京都大学における3つのプレFDプログラム「大学院生の実践講座」「文学研究科プレFDプロジェクト」「研究科横断型授業」において、それらの効果検証のための事前・事後アンケートを行っている。これは「文学研究科プレFDプロジェクト」において、参加講

師がどのような態度を醸成し、どのような能力を獲得したかを明らかにした研究（田中・畑野・田口（印刷中））にもとづいている。各プログラムにおける参加者の態度の変化、能力の獲得を、量的に明らかにすることで、修士課程・博士課程・OD・PD など、学生の成長に合わせた段階的・構造的なプレ FD プログラムをデザインすることを目指している。

#### 4-4. 本講座の受講動機

問 5 では、本講座の受講動機を 8 つの質問によって尋ねた。以前は自由記述によって受講動機を尋ねていたが、3 年前からは、それまでの自由記述を元にした質問項目によって尋ねることとした。全ての質問は「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に当てはまる」の 5 件法で尋ねた。表 5 に質問項目と、各コースの質問に対する平均値を示す。

表 5. 各コースの受講動機の平均値

質問項目	Basic コース 平均値	Advanced コース 平均値
大学での教育活動に関心があるから	4.30	4.46
大学で教えるための知識・技術を身につけたいから	4.53	4.53
大学教育について考える機会が欲しかったから	4.30	4.06
実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから	3.23	2.53
他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから	3.23	3.13
他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから	3.30	3.20
他の大学院生と人間関係をつくりたかったから	3.00	3.26
今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから	3.69	3.06

両コースともに、「大学での教育活動に関心があるから」「大学で教えるための知識・技術を身につけたいから」「大学教育について考える機会が欲しかったから」の 3 項目の得点が比較的高い結果となった。一方、「今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから」という項目に対する評価は比較的低く、参加者は個人の関心に基づいた参加ではあるものの、それが自分のキャリアと直接結びつくとは考えていないという傾向があることがうかがえる。今後もいっそう、本講座の受講者が就職の決定したこと、授業において役に立つポイントを得たという情報や、本講座の発行する修了証の効果について、さらに認知度を高めていく必要があるものと考えられる。

#### 4-5. 大学教育の問題点

Basic コースでは問 6、Advanced コースでは問 11 において、自由記述において「あなたが考える大学教育の問題点」を尋ねた。いずれのコースにおいても多様な問題点が提出されたが、記述の多かった項目から挙げていく。Basic コースでは教員の能力や、多様な学生について言及する記述が比較的多く見られた。Advanced コースは、学生と教員の意識の乖離、一方的な授業形態などについての記述が多かった。

##### Basic コース

##### 【教員の能力】

- ・講義が教授の手腕に依存しすぎている。
- ・教員の指導力の偏り。



- ・ひたすら教員が話し続けたり板書したりといった講義にどれほどの意義があるかという点。

#### 【多様な学生】

- ・学生の知識レベルの低下。
- ・立ち位置が明確ではないと考えます。特に、上記質問にもありましたが、教育を行う上でどの水準を対象とするのかが明確ではない点が問題だと考えています。
- ・学生のニーズが多様化し、例えば大学院に進学する者と就職する者では、大学教育に対するモチベーションが大きく異なるため、それにどのように応えていくべきかが、大学教育を担う私たちの大きな課題であると思う。特に、「単位さえ揃えばよい」といった消極的な学習態度に対して、教員はどのように向き合うべきかを議論することも重要であると考えます。また、大学生の交友関係と大学教育との関わりについても、議論すべき点がたくさんある。例えば、勉学に熱心すぎるあまり、毎日図書館に入り浸る生活を送ってしまい、気が付けば学内に友人がおらず、誰とも話さずに一日が終わるという学生が最近よく見受けられると思う。そのこと自体は悪くはないが、このような学生が社会に出てから人間関係に苦労し、職場などで孤立化することはよくあることである。それを防ぐために、教員が授業において学生同士のコミュニケーションの場を提供することも、ひとつの方策であるように思われる。

#### 【教員養成プログラムが確立されていない】

- ・大学での教育方法が確立されていない。
- ・多くの大学教員が、現場での指導経験がないまま、教授法についてもあまり知らないまま教壇に立っている。

#### 【研究と教育の関係】

- ・教育と研究という不可分なものを分けようと試みている点が疑問。どちらかに注力する体制は可能かもしれないが、それにつけても、教員の方々の実務があまりにも多い。

#### 【研究大学とそうでない大学】

- ・京大のように研究者を目指す学生が多い大学と卒業後は就職する学生が多い大学との間には、授業のスタイルに差があり、その差をどのように埋めればよいのかを考えている。卒業後に就職する学生が多い大学では、概括的な知識やいわゆる「役に立つ」知識を教える授業が多い。そのような授業で得る知識も重要ではあるが、学生自身が知的好奇心を持って一つの問題についての思考を深めるという姿勢を育てられていないのではないかと危惧している。そのような学生が卒論やレポートを書く際には、現代は情報を得る手段は多いため調べものをすることはできるが、自分の考えを論理的に組み立てて、自分の見解を主張することができないように見える。また自分自身についても、広い視野を意識はしているが文系の狭い専門で研究しているため、将来大学教育に携わることの難しさを感じている。

#### 【その他】

- ・社会のニーズに合っていない
- ・学生は、社会経験がない状態や大人への成長発達過程で専門分野の勉強をするので、分野や学問への魅力を伝えるのが難しいと感じます。私自身、学問に興味をもったのは卒業して働き始めてからでした。学問が社会でどんなかたちで活用されているのか、また学生自身の体験を通して魅力を感じられるような、伝え方や表現を教員が工夫することが大事なのではないかと思っています。
- ・研究室の閉鎖性。
- ・学生教員両方のモチベーションの低さ。
- ・学科間、特に大人数学科と少人数学科での専門的な教育の充実度の差。ある意味コースのようにまとめられた少人数の学科では、研究室配属以前に講義や授業の形式で実際的な専門に関わる内容を学ぶことが出来るが、大人数学科ではあくまで推奨や個人の意思に任せるという形になっているばかりで、実際の現場における研究に触れる機会は比較して少ないように感じる。同じ学部に属する学科でもその教育内容や教員の取り組み、また教員間の連携などにも大きな差があるように感じ、一口に京都大学における大学教育と語ることは非情に危ういことのように思える。

### Advanced コース

#### 【教員と学生の意識の乖離】

- ・自分が講師として教えてみて、これは特に問題だと感じていることは、教員が受講生に求めるものと、受講生が教員に求めるものと、自分が受講生のとき感じたよりも大きな乖離があること。教員から受講生に求

めることとして、授業の理解、授業中の反応、課題の出来栄などがあるが、いずれも必ずしも満足のいくレベルではない。逆に受講生から教員に求めることとしては、授業の面白さ、どれくらい役に立つかなどがあるが、どれも十分学生を満足させられていないように感じる。自分が受講生のときは、先生方がどう感じていたかはいざしらず、授業は多少面白くなくてもこんなものかと思って聞いていたし、あまり役に立つか立たないか考えずに授業に出ていた。今は授業が面白くないようだと思えてくる、あるいはすぐにスマホをいじくりだす（もちろん全ての非が受講生にあるとは思わない。教員の側にも問題があるだろうし、また学生の気質も変わってきていると思う）。

- ・高校までの授業と大学以降の授業では学生側と教員側ともに、授業に対する心構えが全く違うように思います。高校までのほとんど学生にとって「授業に参加し、聞くことは当たり前」という感覚がありますが、大学生にとって、「単位さえ取れば OK、授業を聞くのはごく一部のまじめな学生のみ」という意識であるような気がします。教員にとっても「授業を真面目に聞くのはごく一部の真面目な学生のみ、しかたがない」と思っていることはないでしょうか。
- ・教員・学生・職員の学びのスキルについてのニーズがかみ合っていない点。学生の主体的な学びを伸ばすためには、ライティング・ディスカッション・文献情報の見方などの、基礎的な学びのスキルを身につけることが不可欠である。だが、学生全員が一律にその機会を享受出来ているかは疑問である。教員は授業の中で基礎的なスキルに時間を割く余裕が無い、あるいは学生がすでに修得済みであると考え問題にしていけないことも多いと考える。職員（図書系）は、図書館での講習会・授業への出張等を行うが、求められる場・人へのレクチャーに限定される。大学教育は、それぞれの立場の自主性を重んじるべきであるが、学びのスキルについては立場を超えて問題意識を共有する場が必要だと考える（理想論ではなく現実的な仕組みが必要）。

#### 【講義・授業方法】

- ・学生参加型の授業が少なく、教員からの一方的授業になりやすい。
- ・ひとつの講義における、受講人数の多さ（マスプロ授業を廃止する必要性）。

#### 【時間の無さ】

- ・完成年度を迎える前であることも関連して、事務的な準備、領域間や臨地実習先との連絡・調整が仕事の大半を占めてしまっており、授業準備、研究にかけられる時間がほとんどないこと。
- ・学生にも教員にも余裕がなくなっていると感じる。ゼミの分属の際に、自身の興味関心よりも就職により有利であることを優先する学生や、幅広い知識や考え方を身につけることより 1 つの専門分野で使える人になることを目指す学生を見かける。目的を持って大学に入ることはよいことではあるが、大学を卒業するときには入る時点では思いもしなかった新たな目標や到達点を持っているというのかもしれないと思う。「モラトリアム」や「自分探し」とは言わないが。

#### 【教員の能力】

- ・オーバーワーク領域間の連携、カリキュラム構成学生の人間力、基本的マナー等教員自身のコミュニケーション力。

#### 【優秀なメンターの不在】

- ・大学教員については、学生を自分の主義で管理したがるか、または逆に放任する先生が少なくないことだと思います。学生相談室でそのような先生にあたると、教員との関係や研究上の悩みを解決する糸口を見つけることが難しくなります。

#### 【国際化】

- ・留学生を多く受け入れ、大学の国際化が進んでいますが、多言語・多文化状況への対応はまだ十分ではないと考えています。

#### 【カリキュラム】

- ・それぞれの学問においてカリキュラムが組織立っていない（授業ナンバリングの必要性）・「半期 15 回授業の徹底」など文科省による無意味な押しつけ。

## 4-6. 研修会当日に議論したいテーマ

Basic コースにおいては問 7、Advanced コースにおいては問 12 にて研修会当日に議論したいテーマについて自由記述にて尋ねた。いずれのコースにおいても学生にディスカッション

を促す方法や、学生を巻き込むためのスキルなど、「講義・授業の方法」を挙げた回答が多かった。また Basic では「大学教員としての生き方」「教育の意義」や「大学の意義」など、将来の人生や、大学の未来に対しての見通しを得たいという切実なテーマを挙げる参加者も多かった。今後グループディスカッションでは、こうした要望を反映したテーマ設定が望まれる。

## Basic コース

### 【講義・授業の方法】

- ・心に響く授業。
- ・有意義な双方向性を持った授業とは可能なのか、そのような講義をするためには何をすることが必要なのかを議論したい。
- ・大学の講義のあり方について。
- ・これまでに受けて印象に残っているグループワーク・演習授業や、効果的なグループワークの組み立て方について、ご意見をお聞きたいです。また、図書館と連携して授業を行うことで、学生の学習・研究支援につながられるのではないかと思います。その可能性についてご意見をお聞きできれば幸いです。
- ・講義において学生が教科・科目特有の考える枠組みを得たり、考える力を伸ばすにはどうしたらよいか。
- ・どうすれば学生も教員もモチベーション高く授業を行うことが出来るか。

### 【教育・指導方法】

- ・自らより（経験を除いた部分で）優れた学生への指導方法。
- ・教養教育について。学生自身の思考力を育てることについて。
- ・私は、実習で今まで学生と携わることがあったが、臨床（病院での実習なので）指導者の方とどこまで、学生自身の情報・カリキュラム・実習内容について相談や話をしておくべきなのか、迷いがいつもあります。というのは、個々での感性や価値観も異なるが、目指す学生目標は同じである。また、学生の疑問に関して正解を伝えるのは簡単だが、どこまで待ってもらった方がよいのか？
- ・大学教育における学生のコミュニケーション能力の育成について議論できればと考えている。

### 【大学教員としての生き方】

- ・大学の教授職は教育職なのか研究職なのか。また他分野、外部との自由な交流、プロジェクトの立ち上げ等はどこまで許されるのか。
- ・貧困格差社会文系博士課程への進学はなぜ一般就職に不利だと思われるのか。

### 【教育の意義】

- ・大学における教育の意義や意味について議論したい。
- ・教育研究とは？教育で重要なことは？

### 【大学の意義】

- ・少子化社会における大学の存在意義

### 【英語での教育】

- ・授業のすべて、あるいは必修科目の一部を英語で行うことへの是非。世界レベルで研究を行う、あるいは世界で活躍できる人材を育てるには、英語での理解、発信能力は必要だが、一方で（多くの学生にとって）母語以外での教育となると、専門について深く理解できない恐れもある。その点についての意見交換。全学共通科目の意義について。自身の経験では、全学共通科目を受講することによって得たものは少なく、その分を専門の勉強に充てたかったという思いがあるが、そのことについての是非。

### 【その他】

- ・東京大学の入試方式の改革について。
- ・大学教育に対する学生のモチベーションの問題。

## Advanced コース

### 【講義・授業の方法】

- ・学生のモチベーションを上げられるような話の切り口や講義の展開等について、職人技のようなお話も伺いながら考えたいと思います。

- ・授業やプレゼンテーションで、人に理解してもらうためにはどのように工夫すればいいかなど。
- ・生徒の習熟度を判断する方法と、それに合わせて授業内容を変える方法。
- ・グループワーク等、学生参加型の授業の効果的な進め方について（学生の主体性を引き出す工夫など）。
- ・パワポなど教育ツールの功罪。

#### 【教育・指導の方法】

- ・今後、それぞれがいかにして自らの教授能力を改善していくか。

#### 【教育の意義】

- ・学生の理解に本当に資する授業とは何なのか。

#### 【その他】

- ・昨年度に参加させていただき、非常に楽しめました。特に議論したいテーマはありませんが、参加を楽しみにしています。
- ・「分野によって状況が大きく異なる」ことを認めた上でなお有意義なFD活動とは。
- ・公募の模擬授業で好印象を与えるには。

### 4-7. Advanced コース準備のための質問

以下は大学教員になることを意思決定し、教育経験者が多いと想定される、Advanced コース参加者のみに対する質問項目である。問6は、模擬公開授業・検討会で授業者となり、模擬授業を行うことは可能であるかを尋ねた。「行うことは可能」は4名、「条件によっては可能」は1名、「行うことは不可能」は8名であった。「行うことは可能」と回答した受講生のうち、文学研究科より1名、工学研究科より1名を選出し、模擬授業を担当してもらった。

### 4-8. 大学以外での教育経験、大学教育への問題意識

問7では、教員免許取得の有無を尋ねた（複数回答可）。「小学校」0名、「中学校」1名、「高等学校」3名、「その他」0名、「なし」10名と、教員免許を持たないものがほとんどであった。

問8では、初等・中等教育での指導経験の有無を尋ねたが（複数回答可）、問7の結果から予想されるように、「小学校であり」0名、「中学校であり」2名、「高等学校であり」4名、「なし」9名と、経験を持たない人が多かった。

問9では、塾・家庭教師などでの指導経験の有無を尋ねた。「あり」が11名、「なし」が2名と、経験者が相対的に多かった。

問10では、学部生時代に受けた授業への満足度を尋ねた。「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの5段階で評定を行った。その結果、「5. 非常に満足している」が0名、「4. まあまあ満足している」が11名、「3. どちらともいえない」が1名、「2. あまり満足していない」が0名、「1. まったく満足していない」が1名という結果で、満足度の平均は3.69であった。

## 5. 事後アンケートの結果

本講座の当日、すべてのプログラムが終了した時点で、事後アンケートを実施した（資料4,5）。参加満足度や各プログラムに対する有意義度および改善すべき点について、評定と自由記述をもとに構成した。質問事項は、基本的に昨年度とほぼ同様にものとした。当日参加者のうち全員から回答が得られた（Basic コース31名、Advanced コース15名）。

### 5-1. 本講座の全体的な満足度

本講座の全体的な満足度について、「本講座の参加満足度は全般的にどのようなものですか」という質問に対し、「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの5段階で評価を行った。Basic コースは平均 4.12（グループ討論：4.16、ミニ講義：4.22、コミュニケーションデザイン：4.1）、Advanced コースは平均 4.66（模擬授業・検討会：4.46、グループ討論：4.53、コミュニケーションデザイン：4.6、ミニ講義：4.6）となり、全体的には本講座に対する高い満足度がうかがえる。

昨年度実施したボディワークに比べると、コミュニケーションデザインの満足度は、Basic ではやや高いという結果となった(4.02→4.10)。また、Basic よりも Advanced の方が、コミュニケーションデザインの評価が高かったが、その原因としては、教育の実践経験のある受講者ほど意義が理解しやすい内容であったこと、その後のディスカッションにおいてファシリテーターによる意味付け・解説が行われたことなどが考えられる。

一方、昨年度に比べて、Basic コースの満足度（前年度 4.57）、とりわけグループ討論（前年度 4.70）、ミニ講義（前年度 4.45）の評価が下がった。今年度は、ディスカッションの内容が深まることをねらって、ミニ講義からグループディスカッションへという順序にしたが、あまり有効には機能しなかった。これについては来年度の検討課題としたい。

### 5-2. 本講座の満足度の理由（自由記述）

本講座に対する満足度の理由に関する理由を自由記述によって尋ねた。以下に理由をカテゴリ分けしたものを評価値とともに掲載する。Basic では参加者相互のディスカッションを通じて、分野の異なった背景からの、多様な意見に接することができたことについて言及する者が多かった。また、1日のワークショップながら、教員になるための意識・態度が養われたことに言及する記述も多かった。他方、プログラムや議論の消化不良を述べる意見もあった。Advanced では Basic 同様、多様な意見を知ったことに対する満足感を述べる参加者が多く、また今年度から Advanced コース受講対象としたミニ講義とコミュニケーションデザインが良かったという意見も見られた。

#### Basic コース

##### 【多様な意見を知った】

- ・5. ディスカッションの時間を多く取っていただいたので、他学部の学生と話すことができ、見識が広がった。
- ・5. 多種多様な大学教育事業に関わる視点を知る事ができ、また個性豊かなたくさんの方々と出会えたからです。
- ・5. グループディスカッションで普段お話しする機会のない他学部の方々と意見交換をすることができ、楽しかったです。参加前から自分なりの考えを色々もっていましたが、その良い点、悪い点を自覚させていただき、非常に助かりました。感謝しています。
- ・5. 他学部の人と話げできた。教育への問題意識をもった。
- ・4. 多様な意見を聞くことができた。
- ・4. 多様な意見を聞け、自分では思いつかない考えにふれられたから。
- ・4. ディスカッションでは、実際に非常勤をされている方が2名もいらっしやったこともあり、多様な意見が出て、非常に有意義な時間でした。そこでは、教員の意欲の問題が盛んに議論されました。ただ、不親切理論の親切度をどこに設定するかや、網・竿・鉾のかけ方は大学の特性、授業の特性、学生の特性など、非常に複雑なファクターがからみあっていて、一筋縄では決定できないと思いました。また、今は、教育への意欲が高い大学院生が実際に大学で採用され、授業をした際、必ず壁にぶちあたってしまうと思うので、先生（教員）の意欲に全てを委ねるのはすごく乱暴だというのは、議論を通じて感じたところです。

- ・4. 自分の研究を学生に伝えたい、という強い熱意を持っておられる方が多く、驚いた。5 にしなかったのは、概念的な議論にはまって、具体的なイメージを持ちづらいところがあったため。
- ・4. 共通する問題について、人と共に話し合うことは重要だと思うから。
- ・4. 確かにまる1日拘束されることには、当初抵抗を感じた。しかし、やはり何より自分が経験したことのない情報を実際に体験した人から直接、議論を介して受けることができたのは非常に有意義に感じた。また、自分自身の未熟な点や経験不足を改めて認識することができ、そういった点でも有意義だった。
- ・4. 参加者の方の様々な意見を聞けたから。
- ・4. 大学で授業するという点について、いろいろな意見を聞いて、改めて考えることができ、充実した時間になりました。大学院生の授業に求めるものや授業に関する意見も聞けて、とても参考になりました。ありがとうございました。
- ・4. ただテクニックを学ぶものではなく、“教育”について「自由」に議論する場が設けられていたから（非常に深い議論が先生方とできて良かったです。）

【教育手法についての議論がなかった】

- ・4. 大学教育を考えるきっかけとして他学生等との意見の交換はあったが、それより深い手法などの議論がなかった。

【教員になるための態度が醸成された】

- ・5. 教員になることについて深く考える機会になった。
- ・5. 大学とは何か、研究者になることへの不安など、指導教員に相談できないものが相談できた。
- ・5. 1日という短い時間で大学教員になるのに何を考えないといけないのか、具体的に考えることが出来て良かったです。
- ・5. 将来への向き合い方に変化が生まれたように思う。議論を交える中で、自分がどのような教師を目指したいのか、明確になったように思える。その中で、自分の具体的な指導法を模索していきたい。
- ・5. いろいろな立場の方のお話が聞けて、自分が大学教員として教えるイメージが湧いてきたから。討論では発言しやすい雰囲気の中で自由に意見交換ができたため。
- ・4. 様々な分野の方々の見解を知ることができて、また、自分自身の研究と将来的な教育者としてのあり方がどのようなものであるべきかということを考えるきっかけとなった。

【消化できなかった、議論が深まらなかった】

- ・4. 時々話の中身ないし私の理解が満足できない点がありました。事前準備不足でした。
- ・3. 新情報もあったが、議論があまり深まらなかった。
- ・2. グループ討論とコミュニケーションデザインの重要性が今一つ理解できなかった。（得るものはあり、今後気づくこともあると思うので、無駄だとは思わないが、現段階での一意見として。）会全体に方向性がなく、議論等、どの方向に進むのか不明瞭だったのが一つであり、逆に大学教員への不安が払がただけにすぎない気もする。講義による情報提供の充実化を望む。

【プログラムの構成】

- ・5. 講座全体のリズムがよく、あまり疲れさせないところなどよかったです。ただし討論の時間がもっとあれば良いかな。時間に追われて、討論の深みが若干足りなかった気がします。
- ・2. 全体討論はあるのか？分野別 session があるべき。大学が企画しているという雰囲気が出すぎ（撮影や、京大 OCW とかの宣伝など・・・）

【コミュニケーションデザインが良かった】

- ・5. 演劇の講習は非常に興味深かったです。
- ・4. 蓮行先生の授業に普通では学べないことがたくさんあったので、非常に有意義でした。

【ミニ講義が良かった】

- ・5. 飯吉先生をはじめ、多くの教員の方々の講演をきかせていただくことができ、新たな視点を沢山提供していただき本当に勉強になりました。ありがとうございました。

【満足した】

- ・4. 講師の話もディスカッションも満足できるものだった。

【その他】

- ・4. 「実際に」教育しないと自分がもつ“信念”を確立することはできないのだろうな、とも思いました。

## Advanced コース

### 【満足した】

5. 事前に持って参加した問題に解決の糸口を見つけることができた。また蓮行先生のセッションは目からウロコであった。

5. 教育について一日学び、議論し、解決の糸ぐちを得ることができました。

4. 色々もりだくさんで、学ぶことがたくさんありました。

### 【多様な意見を知った】

5. 実際に教えている方の意見を聞けて良かった。

4. 講師・参加者全ての方々から様々なお話、意見をきくことができた。

4. 問題点、悩み、問題提起について、実例を情報共有できたことで、授業に臨む心構えが出来たように思います。

### 【様々な知見を得た】

5. 海外を含めた最新の大学授業（動画、インターネットなど）を知ることができて良かった。

教え方にも幅広い手法があり、それをどう取り入れるかが大切であることを学べた。

4. 授業のすすめ方、目的、研究分野毎の差異について、様々な事例を知ることが出来て、大変有益でした。

### 【プログラムの構成】

5. 多様なプログラムで教育について大事なことを改めて学び新しい分野（MOOC）について情報を得ることが出来ました。

5. ワークショップが去年と違う内容だったので良かった

### 【模擬授業が良かった】

5. 模擬授業をさせてもらったが、的確・有益なフィードバックがたくさん得られた。

4. 模擬講義を通して、教授法などについて学びが深まった。以前からの悩みも少しは解決した。

### 【コミュニケーションデザインが良かった】

4. 蓮行さんのワークやその中で伝えて頂いた理論（バイパス論、あみ→さお→もりなど）も参考になった。

### 【大学教員になるための態度が醸成された】

5. 自分が感じていた課題が明確になった上に、他の人と共有できた。さらにはヒントを得られた。特に模擬授業ではとても勉強になった。授業（大学）に今、求められていること、授業をする上でのテクニカルな面、それぞれ一日ずつやってもいいくらいに感じた。

## 5-3. 今後の改善に向けて

来年度の改善を検討するために、「今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい」という質問のもと、自由記述による回答を求めた。

Basic コースではディスカッションをより活発になる工夫をするべきだという意見が多く見られた。具体的には、ディスカッションのテーマが広すぎる（「大学の授業をどう思うか」「大学の授業で教師に求められるもの」）、また教育経験の無い学生だけでディスカッションを行うときの限界についての指摘もあった。これらに対しては、アンケートでも提案されているように、グループごとに異なったディスカッション・テーマを与えること、あるいは、ファシリテーターによるミニ講義などをディスカッションに組み込むことで、改善できるかもしれない、

Advanced コースでは、応募のコツや面接対策プログラムの要望があった。教育実践講座という趣旨からは外れるが、京都大学にこの種のプログラムは存在しないので、何らかの形でサポートをする必要があるかもしれない。

## Basic コース

### 【もっとディスカッションが活発になる工夫をするべき】

・グループ討論2のテーマがかなり幅広いものだったので、1つだけではなく、いくつか討論への切り口となるワードなどを用意していただけると議論がさらに進んだと思う。

・グループ討論の結果を発表する際に、意見が活発になっていなかったように感じました。

- ・グループ討論内で、もう少し活発なファシリテーションが必要と思いました。
- ・グループ分けをもう少し機能的に行うべきだと思います。(例えば文理分ける、学年分けるなど)。Basicの方、3つのGroupに分けるのはいいですが、今の進め方だと、結局同じような結論が出るのではないかと思います。というのも、就職のグループディスカッションのようにミッションが設置され、全体を一つにまとめなければならないので、必然的に異なる意見、まとめにくい意見が消されてしまいます。ところが、そちらの方が面白かったりすることもあります。京大生は空気読め過ぎだから、いい子になってしまいますね。(解決策は分からないが、たとえばGroupごとにテーマを異にするとかできませんか?)
- ・グループ討論で扱うテーマを事前に参加者に考えておいてもらうと討論がよりスムーズになると思う。
- ・大学教員が置かれた状況、外的要因には個々の教員の努力では変えがたいものがあると思います。「あるべき教員」像を議論する前提として、置かれた状況をより明確にできれば良かったと思います。関連して、グループ討論の課題が広すぎるのではないかと(可能なことと不可能なことがある・・・?)と思いました。
- ・議論があくまで学生内のものにとどまり、実際の経験者と言葉を交わす機会が少ないのは、残念に感じた。
- ・グループ討論は有意義ではあったが、さらにすでに実際に教える側にある方の見解を聞ける時間があってほしいと思いました。なぜなら、グループ討論だけでは、まだ学生の立場でしか議論が広がっていかないからです。

#### 【各セッションの時間を伸ばすべき】

- ・もう少し時間をかけてもよい。(お金は払えるので)もう少し議論など時間がほしかった。
- ・コミュニケーションデザインはもう少し時間があればよかった。
- ・もう少しディスカッションの時間が長かったらさらに互いの考え方含め、様々な観点からの情報交換等できたのでは、と思います。

#### 【プログラムの提案】

- ・初任度教員の不安はどのようなものであったか、それをどう克服していったか、もう少し具体的な話や体験談がほしい。
- ・シラバスの書き方など具体的なやり方についても考えたり、教わる時間が欲しかったと思いました。

#### 【複数日開催すべき】

- ・1コマ当たりの時間が短かったような気がする。2日間にするなり、担当人数をへらすなりした方がよいと考える。
- ・2日間くらいに分けて更に深くやりたい。

#### 【開催回数を増やすべき】

- ・日程が合わない人もいると思うので、一年に何度か参加できるような設定をして欲しい。
- ・年2回開催してほしい。1年度でBasicとAdvancedを終えられる。

#### 【広報を充実すべき】

- ・もっとインフォメーションをして広めるべき。
- ・ポスターを大きく作ってください。回す用のビラとは別に。

#### 【休憩回数を増やすべき】

- ・お手洗い休憩の時間をもう少し多くとっていただけると、助かります。(回数)

#### 【正課授業とすべき】

- ・授業として取り入れて欲しい(単位)というのは、もっと多くの学生が教員になるにあたり必要だと感じた。

### Advanced コース

#### 【就職対策を教えて欲しい】

- ・教員に apply する際のコツのようなものも教えていただくと(アドバイスいただく)嬉しい。
- ・就職の面接がどのようなものであるのかなどが知りたい。

#### 【模擬授業について】

- ・模擬授業の依頼、もう少し日にちに余裕をもってご連絡いただけたらありがたかったです。
- ・模擬授業をする意味が、さいしょ分からなかったので、説明してほしいと思いました。

#### 【授業スキルを教えて欲しい】

- ・専任教員が持っている教え方のスキルを教えてほしい。



#### 5-4. 来年度の本講座やオンライン／対面コミュニティへの参加希望

Basic コースの受講生に対して、「来年度、Advanced コースが開講されるならば、参加したいと思いますか」という質問のもとに、「1. まったくそう思わない」から「5. 強くそう思う」までの5段階で評定してもらった。その結果、「5. 強くそう思う」が7名(22.5%)、「4. そう思う」が18名(58.0%)、「3. どちらとも言えない」が5名(16.1%)、「2. あまりそう思わない」1名(3.2%)、「1. まったくそう思わない」は0名(0.0%)で、平均は4.00であった。例年通り多くの参加者がAdvanced コースにも参加したいと考えている。

最後に、今後センターの催しの案内を送付希望するかどうか尋ねたところ、Basic コースは22名(70.9%)、Advanced コースでは15名(100%)が「希望する」と回答した。

## 6. おわりに

本講座は、将来、大学教育に携わることを希望している京都大学の大学院生、ポストドクター(PD)、研修員のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するものである。10回目の今年度の受講生からの評価もおおむね例年通り高いものであったと言える。他方、今年度は、授業のスキルや、大学教員の生の声など、実践的に役立つプログラムを求める声や、ディスカッションに教員の積極的な介入を求める意見が多かった。これは大学院生たちが大学教員になるための厳しさを肌で実感しており、本講座のような研修プログラムに、即効性、効率性、功利性などを求めていることの現れだろう。参加者相互のインタラク션을尊重しながら、このような要望にどう応えていくのか、今後より大きな課題となっていくだろう。また、今年度から Basic コース受講者には、議論の題材としたい大学教育に関連する資料があれば当日に紹介するよう依頼したが、それがグループディスカッションに十分には生かされなかったので、来年度は改善する必要がある。

冒頭でも述べた通り、本講座は「大学院生のための」と銘打ってはいるが、Advanced コースが創設されて以来、大学院生以外からの参加者も多く、参加者の多様化が著しい。また、アンケートを通じて、参加者の大半がセンターの他の活動にも興味を持っていることがわかった。今後は、本センターの積極的な広報活動を通じてそうした声に応え、より持続的に参加者たちのサポートを行っていけるよう、運営側の適切な道筋づくりが重要になると言える。

## 引用文献

田中一孝・畑野快・田口真奈(印刷中)「プレFDを通じた大学教員になるための意識の変化と能力の獲得—京都大学文学研究科プレFDプロジェクトを対象に—」『京都大学高等教育研究』第20号。

(田中 一孝、松下 佳代)

# 大学院生のための 教育実践講座 2014

PFF Workshop for Graduate Students

～大学でどう教えるか～

開 講 日：平成26年8月5日(火)  
場 所：京都大学百周年時計台記念館 2階  
参 加 費：2,000円(昼食・情報交換会費用を含む)

※当日、受付で徴収します。  
なお、キャンセルする場合は、7月31日までにお知らせください。  
それ以降は、参加費を徴収させていただきます。

参 加 人 数：60名程度(Basic: 40名程度、Advanced: 20名程度)  
※申込が多い場合は、先着順になります。

申 込 締 切：平成26年7月10日(木)  
※なお、参加者には追って事前アンケートを送付します。

申 込 方 法：参加申込書をダウンロードし、  
E-mailまたはFAXにてお申し込みください。  
※京都大学HPのトップページ右横にリンクバナーがございます。  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja>

申込・問い合わせ先：京都大学学務部教務企画課教育企画掛

E-mail: [ksui-kkikaku-kyom02@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:ksui-kkikaku-kyom02@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)  
T E L: 075-753-2528 (内線2528)  
F A X: 075-753-2485 (内線2485)

この講座は、将来、大学教育に携わることを希望している本学の大学院生(PD、研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するものです。

今年で第10回となりますが、「大学教育を考える視点が広がった」「院生同士のネットワークができた」と毎回好評を得ています。

Basic(初参加者向け)とAdvanced(本講座参加経験者・大学授業経験者向け)の2コースを設けています。

なお、どちらの講座もプログラムの全てに参加した院生には、総長の修了証が授与され、就職に向けての1ステップになります。

(プログラムの詳細は裏面をご覧ください。)

主催：京都大学FD研究検討委員会  
共催：高等教育研究開発推進センター

# 大学院生のための教育実践講座 2014

～大学でどう教えるか～

## プログラム

### BASIC

- 9:45～ 受付
- 10:00～ 開会式
  - 挨拶  
FD研究検討委員会委員長  
高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
  - 趣旨とプログラムの説明  
高等教育研究開発推進センター准教授 酒井 博之
- 10:20～ セッション1
  - ミニ講義1  
「大学授業の現在と未来」  
高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
- 10:45～ セッション2
  - グループ討論1  
(自己紹介)「大学の授業をどう思うか」
- 11:45～ セッション3
  - ランチと自由討論
- 13:00～ セッション4
  - コミュニケーションデザイン  
「演劇でコミュニケーションデザイン」  
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター  
特任講師 蓮行
- 14:20～ セッション5
  - ミニ講義2  
「大学授業の現場から見たブレFD」  
大阪体育大学講師 吉沢 一也
- 14:45～ 休憩
- 14:55～ セッション6
  - グループ討論2  
「大学の授業で教師に求められるもの」
- 15:55～ グループ討論整理
- 16:30～ セッション7
  - 全体討論  
「大学で教えるために」
- 17:30～ セッション8
  - ラップアップ  
「大学で教えるということ」  
高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈
- 17:55～ 閉会式
  - 挨拶・修了証授与  
京都大学理事 淡路 敏之  
FD研究検討委員会委員長  
高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
- 閉会式終了後～18:30
  - 情報交換会

### ADVANCED

- 9:45～ 受付
- 10:00～ 開会式
  - 挨拶  
FD研究検討委員会委員長  
高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
  - 趣旨とプログラムの説明  
高等教育研究開発推進センター准教授 酒井 博之
- 10:20～ セッション1
  - ミニ講義1  
「大学授業の現在と未来」  
高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
- 10:45～ セッション2
  - 全体討論1  
(自己紹介)「教える側からみた大学授業」
- 11:45～ セッション3
  - ランチと自由討論
- 13:00～ セッション4
  - コミュニケーションデザイン  
「演劇でコミュニケーションデザイン」  
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター  
特任講師 蓮行
- 14:20～ 休憩・準備
- 14:30～ セッション5
  - 模擬公開授業・検討会
- 16:30～ 休憩
- 16:40～ セッション6
  - 全体討論2
- 17:55～ 閉会式
  - 挨拶・修了証授与  
京都大学理事 淡路 敏之  
FD研究検討委員会委員長  
高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
- 閉会式終了後～18:30
  - 情報交換会

#### 留意事項

- 1.当日は動きやすい靴、服装でご参加下さい。
- 2.昼食、情報交換会等の飲食代は参加費から準備します。
- 3.過去の講座の雰囲気は右記のURLで確認いただけます。

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/>

# 大学授業の現在と未来

魚肝油

京都大学 高等教育研究開発推進センター長・教授

大学院生のための教育実践講座 2014年8月5日

1

一人の教育者の情熱と狂気

2

「基礎物理学」



4





## 情熱増幅装置としてのオープンエデュケーション

5

## TEAL (Technology Enable Active Learning)



The Gallery of Teaching and Learning - KEEP Case Studies: Transferring Knowledge and Experience  
John Belcher教授と仲間たちによる授業改革プロジェクト

7

## II-3. 資料2

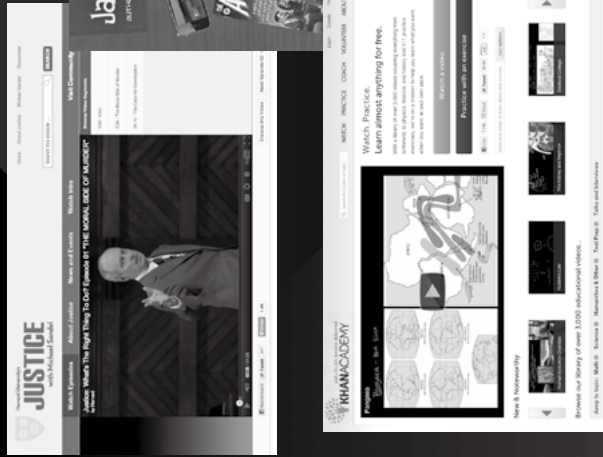
## 複数の学科・学部が協力して教育イノベーションを推進



数学科で開発されたMathletsが、物理学科のTEALでも利用されている。

[Mathlets](#) [Mathlets Snapshot](#)

8



6

## 教育イノベーションは、一日にして成らず！

**The New York Times**

**At MIT, Large Lectures Are Going the Way of the Blackboard**

By Steven Johnson, 1/2/07

When it comes to the future of higher education, MIT is a place where the future is being built, not just dreamed. The university's new OpenCourseWare initiative is a bold experiment in open education, one that could reshape the way we learn.

**Started**

OpenCourseWare was launched in 2002, and has since become a global phenomenon. It is a place where the future is being built, not just dreamed.

**Cambridge, Mass. —** For as long as anyone can remember, the primary problem in the Massachusetts Institute of Technology was how to get the most out of the most brilliant minds. The answer was to get the most out of the most brilliant minds.

**Started**

OpenCourseWare was launched in 2002, and has since become a global phenomenon. It is a place where the future is being built, not just dreamed.

**Cambridge, Mass. —** For as long as anyone can remember, the primary problem in the Massachusetts Institute of Technology was how to get the most out of the most brilliant minds. The answer was to get the most out of the most brilliant minds.

At MIT, Large Lectures Are Going the Way of the Blackboard - NYTimes.com, MIT TechTV - Perspectives of TEAL

9

## MIT OpenCourseWare: 2000以上の講義教材・ビデオを公開

**MIT OpenCourseWare**

MIT OpenCourseWare is a free and open educational resource for faculty, students, and self-learners around the world. OCV supports MIT's commitment to open education, and provides a platform for sharing MIT's vast collection of course materials with the world.

**MIT OpenCourseWare**

MIT OpenCourseWare is a free and open educational resource for faculty, students, and self-learners around the world. OCV supports MIT's commitment to open education, and provides a platform for sharing MIT's vast collection of course materials with the world.

**MIT OpenCourseWare**

MIT OpenCourseWare is a free and open educational resource for faculty, students, and self-learners around the world. OCV supports MIT's commitment to open education, and provides a platform for sharing MIT's vast collection of course materials with the world.

11

**オープンコンテンツ**

拡がり続けるオープンコンテンツの世界  
既に何万ものオープンな教材が利用可能

**NSDL** THE NATIONAL SCIENCE DIGITAL LIBRARY

**universia**

**OOPS** 開放式学習計画 www.oops.jp

**COOL** China Open Resource Library

**JOCW** JOURNAL OF OPEN COURSEWARE

**CLOE** CO-OPERATIVE LEARNING OPEN EDUCATION

**World Lecture Hall**

**SCOUT** Search Courseware Online to University Teachers

**ARIADNE**

**openlearninginitiative**

**MERLOT** Multimedia Educational Resource for Learning and Online Teaching

**MITOPENCOURSEWARE** MITSCHOENET'S INSTITUTE OF TECHNOLOGY

**edna.edu.au**

**connexions** A Digital Library for Engineering Education

**Lola Exchange** Learning Resources, Learning, for 2005

**NIME** Nijmegen Institute of Media and Education

**NIME glad**

**Sofia** Sofia Open Educational Resources

**and more...**

10

**OpenCourseWare コンソーシアム JOCW**

**OPEN COURSEWARE** JOURNAL OF OPEN COURSEWARE

**USE** Find Course Materials

**SHARE** Share Your University's Courses

**SUPPORT** Support the OCV Movement

**OPEN SHARING, GLOBAL BENEFITS**

**JOIN NOW**

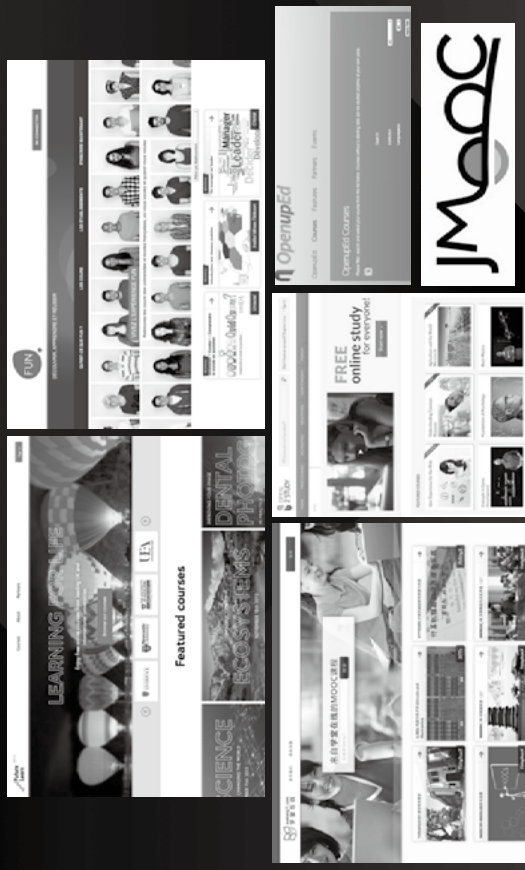
世界各国の100以上の大学・機関が参加し、既に数千もの講義教材が公開されている。

12





## 世界中の地域や国で急速に広がるMOOC



18

## 修了証 (Certificate)



20

## MOOC Wars? Coursera vs. edX

スター教師たちが参戦する  
「教えのバトル・ロワイヤル」



大学 (組織) → 教員 (個人)  
というシフト

17

## オープンな学習の成果認定のための修了証やオープン・バッジ



19



# 参加? 日本初のedXへの参加

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

RETHINK YOUR WORLD. edX is the world's largest open source platform for higher education. edX is the world's largest open source platform for higher education. edX is the world's largest open source platform for higher education.

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

Kyoto University was founded in 1869 and is one of the oldest universities in Japan. Kyoto University was founded in 1869 and is one of the oldest universities in Japan. Kyoto University was founded in 1869 and is one of the oldest universities in Japan.

Kyoto University is a member of the edX consortium. Kyoto University is a member of the edX consortium. Kyoto University is a member of the edX consortium.

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education. edX is a consortium of leading universities, Harvard and MIT, that is working to create a new kind of online education.

[illegible]

**coursera**


**Supported by**  
**BILL & MELINDA**  
*GATES foundation*



## American Council on Education to Evaluate Credit Equivalency for Coursera's Online Courses


We are pleased to have recently announced that we have begun working with the American Council on Education (ACE) to initiate a credit-equivalence evaluation of a select few of the courses offered on Coursera.

This new third party evaluation, conducted through ACE's College Credit Recommendation Service (ACE CREDIT®), has the potential to make these select courses completed on Coursera eligible for college transfer credit at institutions choosing to accept the ACE recommendations.

ACE CREDIT® is a recognized authority in assessing non-traditional education experiences and helping students gain credit for courses and exams taken outside traditional degree programs. ACE CREDIT®'s review process enlists a team of academic faculty to assess courses and exams for the purpose of making college credit recommendations. These recommendations are generally accepted by more than 2000 colleges and universities in the US, opening the possibility for students enrolled at one of these institutions to transfer credit into their degree programs. The decision to accept ACE CREDIT recommendations is fully subject to the policies of the school and degree program a student wishes to apply it towards.





News Article

Dr. Anant Agarwal, edX President

Meta Universityへの足掛かり？

## KyotoUx 001：3つの特典

- KyotoUx 001の国外の受講者から成績上位の者を、意欲等も考慮して1名選び、京都大学大学院への国費留学生として推薦する（年齢は問わない）。総長賞授与（選考には、総長本人も参加）。
- 講義期間中に、国内外の受講者から成績優秀者を5名程度選抜し、京都大学に1週間ほど招待する（バーチャルからリアルへ）。
- 受講生の中で、優秀なバーチャルTAを「Best TA」として表彰する。

（以上、2013年11月1日の記者会見にて発表）

25



ラトビア



セルビア



アメリカ



フィリピン



ベトナム



ペルー

27



26

msn west 最新ニュース 速報 できごと スポーツ ライフ ニュース 写真 トピックス 読者投稿 ミニコラム 経済 地域 ランキング ページ 17 Recommend 12

### 京都大のネット無料配信授業 1万9千人のうち上位6人招待

2014.7.8 12:35

京都大は8日、世界トップレベルの大学がインターネットで講義を無料配信するオンライン教育機関「edX（エドックス）」を通じて4月から配選していた授業で、成績が上位だった国外の6人が来日したと発表した。来日が招待していた。

6人はベトナム、ラトビア、セルビア、ペルー、米国、フィリピン出身の10～20代の大学生や社会人で、エドックスで上杉成教授の授業「生命の化学」を英語で受講。ミニテストや宿題の評価が、世界中の受講者約1万9千人の中でトップクラスだった。

6人は京都に1週間ほど滞在する。経済的な理由で大学を途中でやめたというフィリピンのエース・スベンサー・アポロニオさん（17）は記者会見で「もともと化学が好きではなかったけど、この授業のおかげで興味が湧いた」と話した。

京都大が招待したオンライン教育機関「edX（エドックス）」の受講者

28

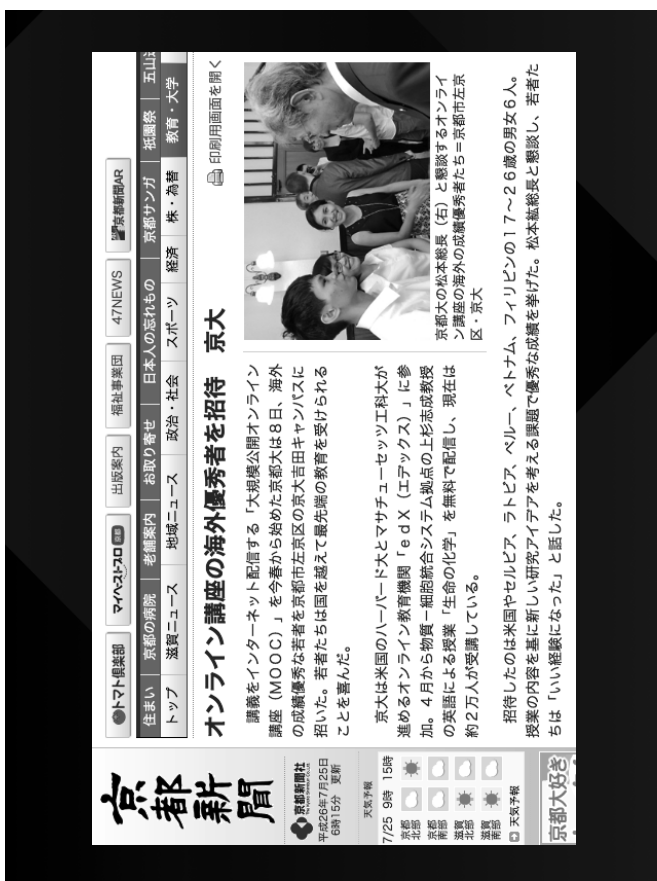


「ネット社会になり、情報はどこでも入手できる。そうなる、大学の使命は、学問を通じての師弟関係に収斂されていくのではないか」

- ピーター・ドラッカー -

だが、その「師弟関係」すらもネットは変えつつある...

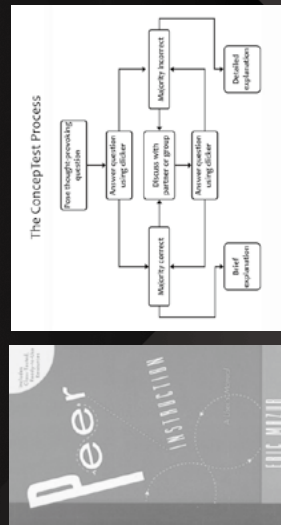
なまびくー





## Peer Instruction

基本的な概念や手法に対して学生の注意を集中させながら、講義中の学生同士のインタラクションを通じ深い理解を促す教授・学習方法

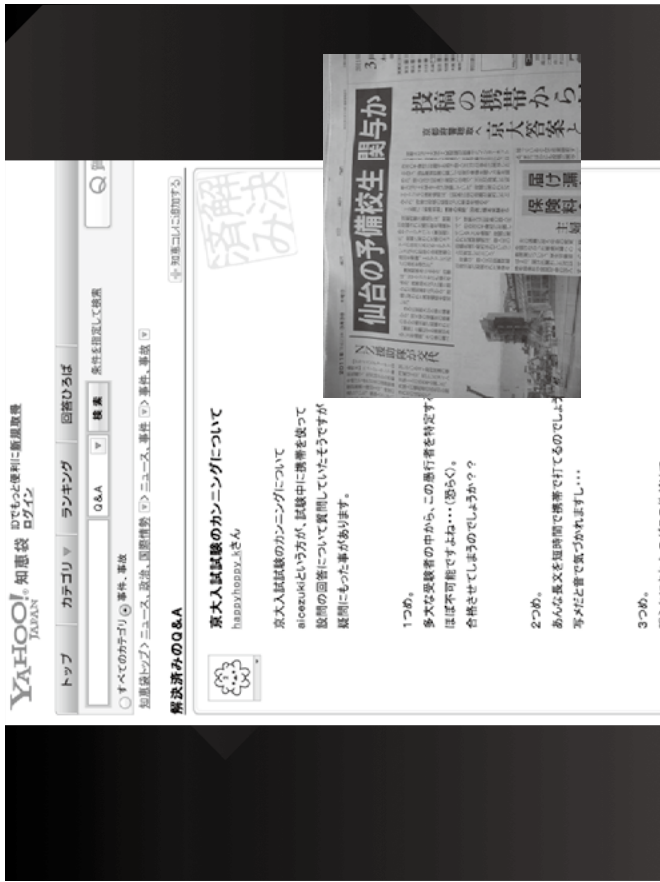


## 学習情報分析を利用しアクティブな協調学習を最適化



「互いに学び教え合うこと」、「学ぶために教え、教えるために学ぶこと」の大切さ。

「学びたい」「学んでもらいたい」と切望し、希求しているか？ そのような人たちは、どこで出会えるのか？



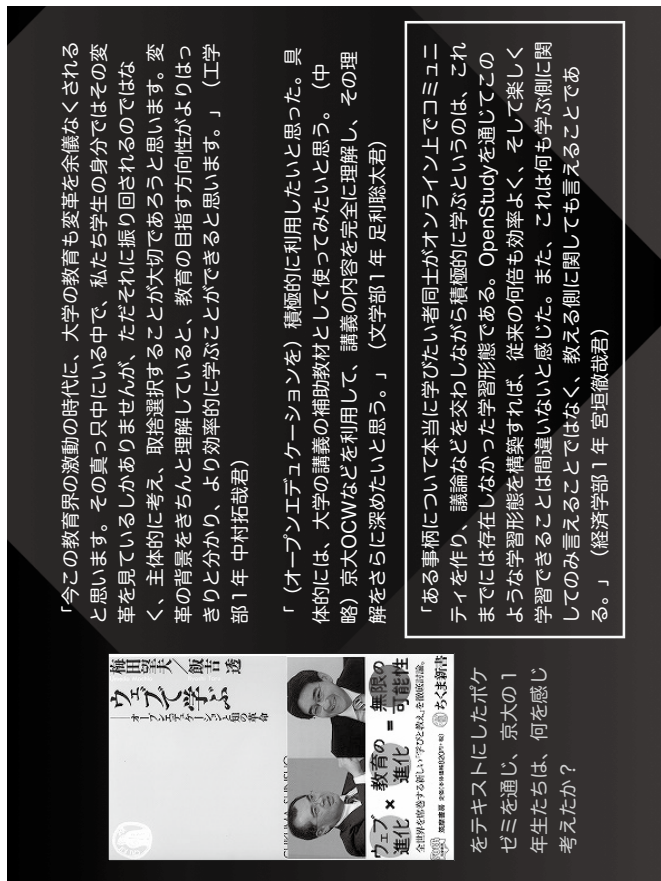
38



40



37



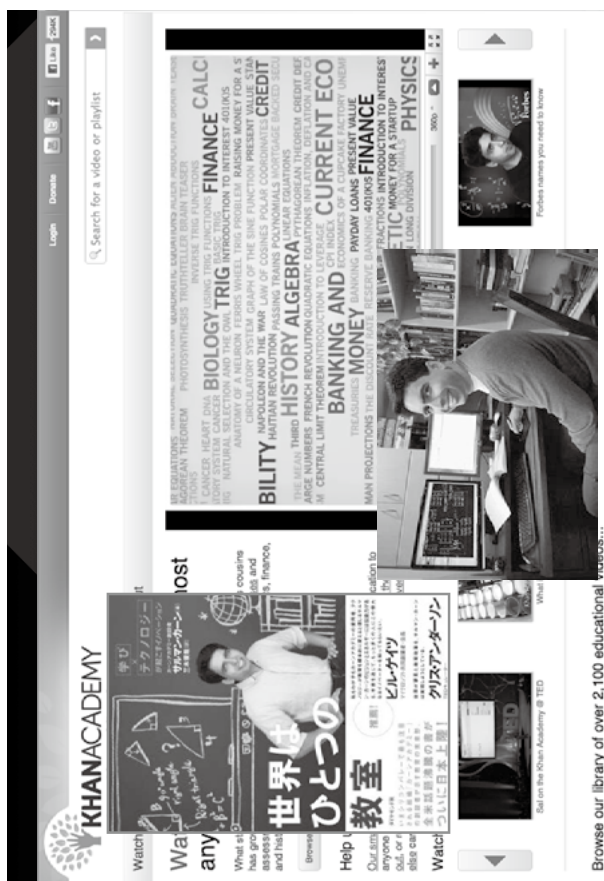
39



Flipped Classroom: 自宅で授業・教室で復習



「反轉授業」



Browse our library of over 2,100 educational

(熱意と創意工夫に溢れた)学生アマチュア教師たちの台頭



## 教育を草の根で変えていく若き学生・社会人たち

The screenshot shows the Japanese version of the MOOC.org website. It features a main video player with a woman speaking, a navigation bar with tabs like 'Home', 'About', 'Sign Up', and 'Log In', and a sidebar with various educational resources and a 'Sign Up' button. The text is in Japanese, highlighting the platform's mission to provide free education to all.

45

誰でも無料でMOOCが提供できる！（まるで  ）

The screenshot shows the English version of the MOOC.org website. It features the 'mooc.org' logo and a form to sign up for a course. The text is in English, highlighting the platform's mission to provide free education to all.

46

## Western Governors University

The screenshot shows the Western Governors University website. It features a graduation cap, a navigation bar with tabs like 'Home', 'About', 'Admissions', and 'Contact', and a list of programs. The text is in English, highlighting the university's mission to provide free education to all.

47

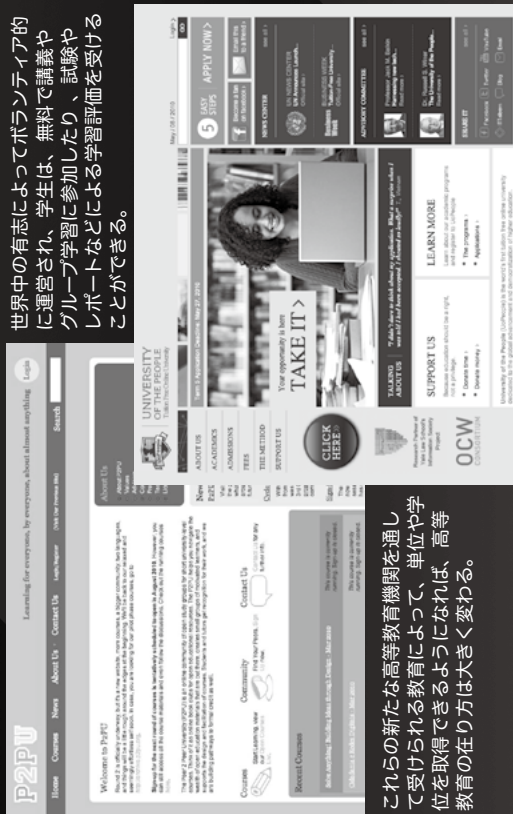
## Western Governors University

- アメリカの19州の協力によって創設されたオンライン公立大学
- 通常の大学のように自前の履修課程に合わせた講義を提供していない
- 学生が十分な知識や技能を持ち合わせていることが試験やレポートで確認されれば、「学生が、どのような教材を使って、どのように学んだか」に関係なく、評価基準に従って単位を認定し、必要な単位数が揃えば学位を授与する」という制度を採用（学生は、オープンエデュケーションをフル活用できる）
- 学位取得にかかるコストは、普通の私立大学の六分の一程度
- 学士課程を最短二年間で修了可能なので、学生（特に社会人学生）が経済的・時間的に得られるメリットも大きい
- 学生のための24/7オンライン学習支援（教員やチューターによるカウンセリングなど）やオンライン図書館などの学習リソースなどの提供

48

## Peer-To-Peer U & U of The People

世界中の有志によってボランティア的に運営され、学生は、無料で講義やグループ学習に参加したり、試験やレポートなどによる学習評価を受けることができる。



これらの新たな高等教育機関を通して受けられる教育によって、単位や学位を取得できるようになれば、高等教育の在り方は大きく変わる。

49

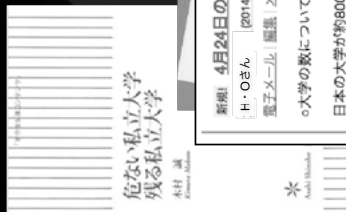
一方、日本では？



51



50



新刊 4月24日のゼミの感想  
 H・Oさん | 2014年04月29日 午後 11時28分 | 既読者:2 | 返信  
 電子メール | 編集 | ヌツセージを削除  
 o大学の数について (それ以外にも含みますが)  
 日本の大学が約800個、オーストラリアは約40個  
 日本の人口が約1億3千万、オーストラリアは約2千3百万  
 オーストラリアの大学でうまくやっていて、  
 人口構成も日本とオーストラリアでそれほど変わらないと考えると、  
 日本は人口規模だけから考えれば大学は約226個で済むはず。  
 じゃ、300個位まで減らしちゃえば？と思ってしまうところもあります  
 が、  
 大量の失業者が出る等の問題もあるだろうし、そう簡単なものでもない  
 んだらうなと思いました。

52



「オープンエデュケーションが大学をつぶしにかり、それが良い方向に向かって、絶妙な融合が生まれればいい。」

その意見には、私も大いに共感します。

この間、「水族館の大水槽の大量のイワシが、天敵のマグロなどがいないために、迫力のある動きができていなかったの、マグロを何匹か投入して命の危険にさらし、動きが改善されるように仕向けた」というニュースを見ました。

今の大学はこの大量のイワシ、オープンエデュケーションは数匹のマグロみたいなものだと思います。数匹のマグロがいるだけでイワシの質が改善される... それほどの、変革への近道は他にないと思います。」（経済学部1年 M・Tさん）

53



55



54



56

## 高等教育のグローバル化

- 国境の希薄化
- 激しさを増す学生や教員の流動性
- 国境を越えた研究協力の普遍化
- 大学国際ランキングの横溢

*The Great Brain Race: How Global Universities Are Reshaping the World*  
(Ben Wildavsky, 2010)

57

## 日本の大学が「生き残る」とは、どういうことか？

- 「大学全入時代」は、日本の国内問題にしか過ぎず、世界の高等教育における問題ではない。
- 世界のグローバル化が進む中で、そもそも日本人の学生数の減少だけを問題とすること自体が間違っているのではないか？
- 日本から海外に留学する学生の数が、大幅な減少傾向にあることをどう考えるか？（特に、世界的な「知識の交流」や「教育鎖国化」という点から）
- 政官主導の国策として、「生き残る大学」が決められていくのか？
- それとも、各大学が互いに切磋琢磨しながら、「共存共栄」の道を進むのか？
- 日本国内で生き残れても、世界の高等教育で生き残れるのか？

58

## オープンエデュケーションが可能にする 来たるべき社会のビジョン

「『仕事』と『学び』がシームレスに融合し、  
その両者の間を、誰もがいつでもどこでも自由  
に行き来しながら自己成長し続けられる社会」

60

## 今、日本の大学が「生き残る」ために実行していること

### これら各々の功罪は何か？相乗効果や相殺効果は？

- ブランド力などを利用した学生・教員・教員・外部資金集め
- 大学や学部レベルでの合併や統合
- より効率的な経営・教職員の削減
- 社会人の大学院・大学への呼び戻し
- 教育・研究環境の改善（少なくとも重点的な努力目標）
- 留学生の誘致
- 大学の「レジャーランド化」による「集客力」の向上
- （既成事実としての）「審査なし」入学・卒業、等々

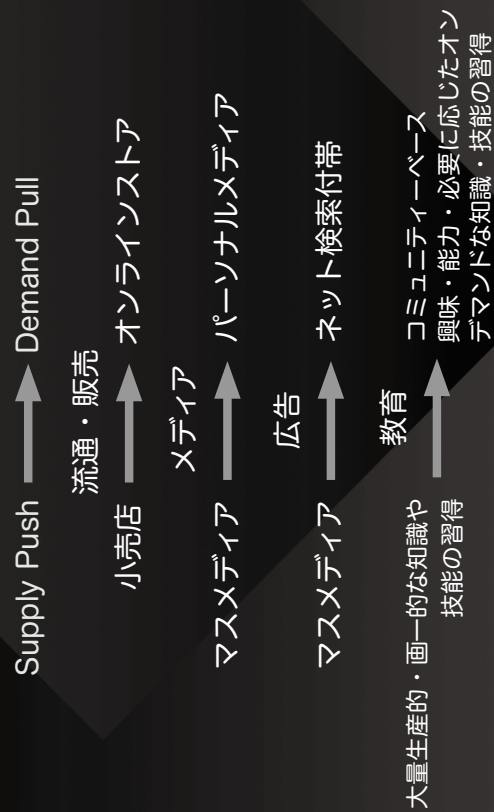
59

## グローバル人材とは？

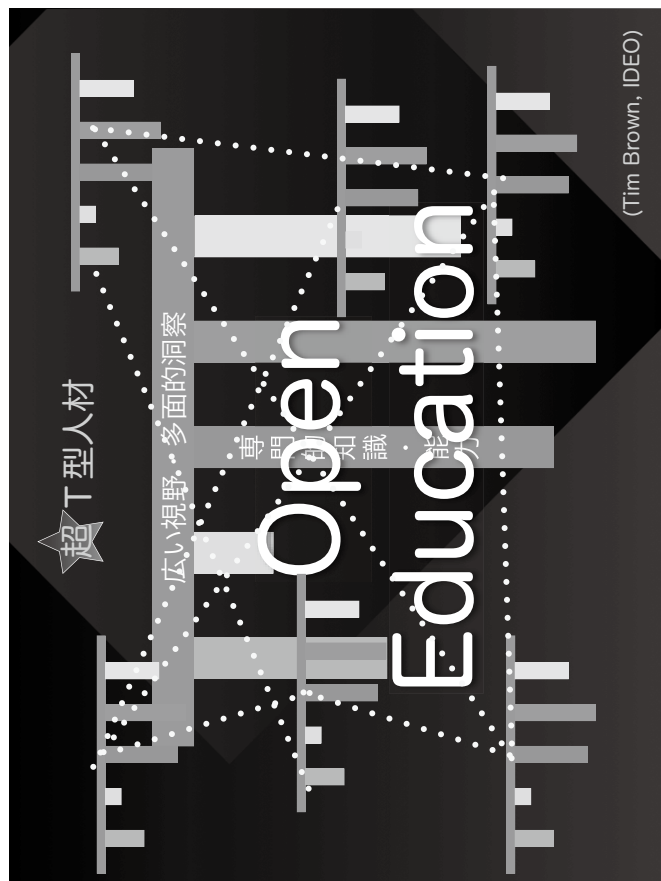
- (時に狂おしいほど) 情熱的である。
- 「生き方のモード」であって、そのような「人材としての完成形」がある訳ではない。
- 自分を拡張し成長させ、新しいことに挑戦し続ける。
- より楽しく前向きに学び続け、働き続けることができる。
- 自ら探求し、問題解決し、そのプロセスや結果を発信しながら、自分のネットワークを国内外に広げられる。
- 自立的・自助的であると同時に協調的・互助的でもある。

61

## 「グローバル化・フラット化する世界」において求められる 21世紀の教育におけるパラダイム転換



63



62

## 21世紀の教育におけるパラダイム転換



現代社会において、個々人が、知識的・技能的・職業的基盤を確保するために、十歳代後半から二十歳代前半までの四年間を「壁に囲まれた」大学で過ごせば「高等教育は修了」というモデルは、機能しなくなっている。「高等教育のロングテール化」が不可避。

オープンエデュケーションを活用した新たな高等教育モデルの模索

64



## 高等教育の未来

- 「高等教育システム」の構造的見直し：  
パイプライン型 → ネットワーク型（知識と人）
- 「物理的空間としての大学」という概念の見直し
- 「運営組織・経営体としての大学」の在り方の見直し
- 「大学教員」という職業の見直し
- 「教える人＝教員 vs. 学ぶ人＝学生」という役割の見直し
- 「高等教育＝学位」という固定観念の見直し
- 「社会 vs. 大学」という対立軸の見直し

65

*“If we teach today as we taught yesterday,  
we rob our children of tomorrow.”*

- John Dewey (1916)

67

## ＜ゼミ学生の声＞

しかし、インターネットによる無償教育を活用できる可能性が提示されている今、これに対して静観を貫いてニヒリスティックな態度をとったり、明らかにになった問題を見て見ぬふりをすることは、少なくとも教育を考える者にとっては許されないことだと思います。

オープンエデュケーションの誕生は、この時代において「学校」はどうあるべきか、そもそも「教育」とは何か、ということに関して我々に喫緊の問題を投げかけ、首根っここにナイフを突きつけて「教育」或いは「学校」に対して抱く思想の根本的な再考を要請しているのだ、と思わずにはいられません。

(経済学部1年 T・J君)

66

*“If we learn today as we learned yesterday,  
we rob ourselves of tomorrow.”*

68

## 大学授業の現場から見たプレFD

大阪体育大学  
吉沢 一也

### 概要

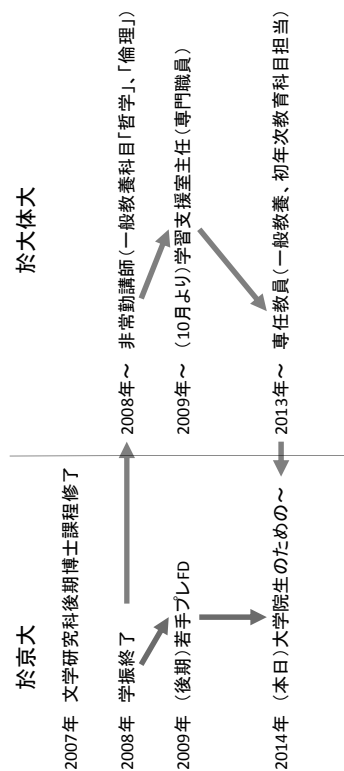
#### 話のフロー

1. 話者の立場。育成される側から育成する側へ。
2. 大学の機能別分化への対応――京大プレFDはどこまで対応できるのか。
3. 大学の機能に応じた、求められる教員像。
4. 特定の機能を持つ大学における、教員の使命と可能性

#### 目的

大学教員を目指す京大院生、PD、研修員が、ファカルティ(大学教員)に向けて自己形成していくための、きっかけとなる場の提供。

### 話者の背景



### 大学の機能別分化と京大プレFD

#### ※大学の機能別分化への経緯

・理念・目標にもとづいた各大学の多様化・個性化(大学審議会H10)

・諸機能の配分と重点を置き方による大学の特色化(中教審H17)

- 世界的研究・教育拠点。
- 高度専門職業人養成。
- 幅広い職業人養成。
- 総合的教養教育。
- 特定の専門的分野(芸術、体育等)の教育・研究。
- 特定の生涯学習機会の拠点。
- 社会貢献(地域貢献、産学官連携、国際交流等)。

・大学としての役割・機能のうち、自らの“強み”となるものの重点化。使命の明確化と機能別分化に関する支援策の検討(文科省の依頼H23)

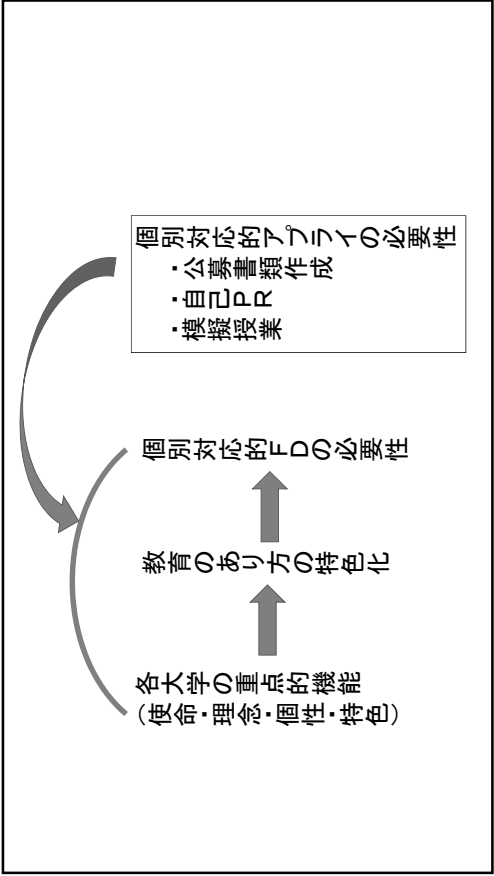
上記の分化は、教育の分化、FDの分化をもたらすのでは？

※京大ブレFD

【概要】

- ・文学研究科のODが分担して、各自の専門に基づいた2～3回の授業をリレー形式で実施。
- ・このすべてを録画保存するとともに学内に公開し、毎回の授業終了後、授業分担者同士で授業検討会を行う。
- ・これらの授業実施を受けて、前期1回、後期1回の計2回、研修会を開催し、授業分担と研修会受講を条件として、参加者には総長名の修了証が授与される。

(授業担当者にとっての)メリットと、残された課題は？



ODの時間的制約に対して

研究と教育の内容的乖離

他大学の特色に合わせた内容の授業を構想することができない。

研究と教育の方法論的乖離

他大学の学生の気質にあった授業方法は独自に研究しがたい。

◎とにかく教えることになった大学の空気をすばやく読むしかない！

研究時間の最大化という観点から辛抱する！！

## 二つのエピソード

タレスが天文研究しようとして、ねえテオドロスさん、上を見ていて井戸に落ちたとき、機転のきく愉快なトランプ出の下女が彼をからかって「あなたは大空のことをお知りにならうと夢中になつていらつしやいます、ご自分の目の前のことや足元のことにはお気づきではないのですね」と言つたという話があるが、ちよつとそんなものだね。そしておなじくらいが、知を要求して生きていく人々全てにあてはまるというわけだ。

(プラトン『テアイテトス』174a-b)

タレスが貧乏であることから、人びとが彼に向かって、哲学は無益だと言わんばかりに非難したところ、彼は天文学によつてオリウスの出来具合を見通し、いまだ冬の間にわずかな金子(きんす)を工面して、ミレトスとキオス島中のすべてのオリウぎ穀り機の手付けを打ったが、競り合う相手がいないため、それらを安価に賃借することができた。というのがその話である。やがて美りの時期が到来すると、大勢が突如として一斉に機械を探し求めたので、彼はいかようにも自分と自分が望むままの条件で買出し、多額の金銭をかき集めることができた。そして彼は、「哲学者にとつて、もしその氣になれば、裕福になることは容易であるが、ただし、それは本気で取り組みべき事柄ではない」ということを示してみせた、というのである。

(アリストテレス『政治学』A 11. 1259a)

大学院生のための教育実践講座2014  
ー大学で教えるということー

京都大学 Center for the Advancement of Learning  
Higher Education Research Promotion Center

BASIC セッション8 ラップアップ  
大学で教えるということ

田口 真奈  
京都大学高等教育研究開発推進センター  
Taguchi.mana.3z@kyoto-u.ac.jp

1

## なぜプレFDか

- ・ アメリカの事情
- ・ 日本の事情

2

## アメリカにおける 段階的若手教育者養成制度の概要

業務の難易度

時間

(吉良,2011)

3

## 日本におけるプレFDの契機

- ・ 2008年答申『学士課程教育の構築に向けて』
- ・ 教育研究上の目的に応じて、大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る。  
ー 教職員の職能開発の具体的な改善方策として

4

## 高等教育の段階移行

	エリート段階	マス段階	ユニバーサル段階
大学進学率	～15%	15～50%	50%～
高等教育機会	少数者の特権	多数者の権利	万人の義務
特 色	同質性 (共通の高い基準)	多様性 (多様なレベル)	極度の多様化 (共通の水準の喪失)
	(マーチン・トロウによる)		

5

## 大学教育の「質保証」

ー 「入口」の質保証から、「出口」の質保

ユニバーサル化 → 大学 → グローバル化する知識基盤社会

入口 出口

学力・学習意欲の水準低下と格差拡大

これまで以上に高い質への要求

日本だけでなく、先進国共通の傾向

6

## 大学初任教員の不安

- ・ 初任者の不安調査
  - － 大学教員初任者に対して「何に不安を抱き、どのようなサポートを必要としているのか」に関する質問紙調査を実施
    - ・ 田口真奈,西森年寿,神藤貴昭,中村晃,中原淳(2006) 高等教育機関における初任者を対象としたFDの現状と課題,『日本教育工学会論文誌』, 30(1), 19-28

7

## 不安調査

- ・ 不安得点の高い項目
  - － 研究活動との両立に関する不安
  - － 授業内容に関する知識を自分が十分もっているかどうかに関する不安
  - － 他の授業に劣らないような授業ができているかに関する不安
- ・ 因子分析の結果
  - － 「教育方法に関する不安」
  - － 「学生に関する不安」
  - － 「教育システムに関する不安」

8

## 「教育方法に関する不安」

- － (12)授業中の話術に対する不安
- － (3)他の授業に劣らないような授業ができているかに関する不安
- － (10)授業内容に関する知識を自分が十分もっているかどうかに関する不安
- － (35)一時間半しゃべり続けることに関する不安
- － (18)授業の流れや指導計画に対する不安

9

## 「学生に関する不安」

- ・ (36)学生からの暴力・暴言に対する不安
- ・ (23)学生の意欲の度合いがわからない不安
- ・ (11)自分の授業の目標とするレベルまで学生がついていけるかどうかに関する不安
- ・ (31)授業に出てこない学生への対応に関する不安
- ・ (22)学生間の噂やインターネットなどで誹謗・中傷を受ける不安

10

## 「教育システムに関する不安」

- ・ (27)学部・学科のカリキュラムの目的や意義が分からないという不安
- ・ (5)具体的に何をどのように教えてよいのか分からない科目を担当する不安
- ・ (41)他の授業とのつながりがわからないことに関する不安
- ・ (28)大学の教育方針と自分の授業の方針が合致しているかに対する不安
- ・ (32)大学側から講義に関する決まりについて説明がないことへの不安

11

## 初任者の不安

表11 研修の実施率と初任者と機関の必要性の比較

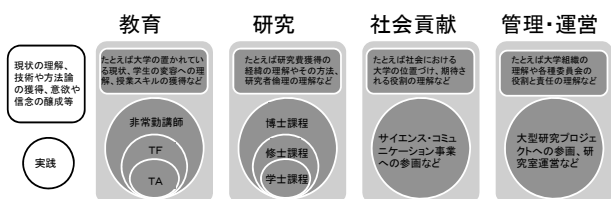
項目	回答率	研修の実施	おおいに必要		
			初任	機関	差
02. 事務手続き		32.7	72.8	43.0	29.8
07. カリキュラム		18.4	60.2	43.3	16.9
06. 成績評価		15.7	56.3	40.0	16.3
04. 大学の経営戦略		17.1	36.9	27.9	9.0
11. ネットワーク等		12.2	41.7	36.2	5.5
08. 授業設計		13.4	33.0	35.1	-2.1
10. IT スキル		11.1	16.5	19.8	-3.3
05. 学生の実態等		16.6	35.0	39.1	-4.2
03. 職務倫理		27.3	42.7	48.1	-5.4
09. 授業方法		15.1	29.1	35.3	-6.1
01. 機関や部局の概要		34.3	29.1	39.1	-10.0



12



## ファカルティの4つの職務から



田口真奈・出口康夫・赤嶺宏介・半澤礼之・松下佳代(2010)「未来のファカルティをどう育てるか—京都大学文学研究科プレFDプロジェクトの試みを通じて—」高等教育研究第16号p.95より

13

## 京都大学のプレFD関連事業

1994年 高等教育教授システム開発センター設立  
2003年高等教育研究開発推進センターに改組

2005年 大学院生のための教育実践講座

2006年 FD研究検討委員会設置  
2009年 サイエンス・コミュニケーター派遣事業 ～2011年

2008年 FDの法制的義務化  
2009年 文学研究科プレFDプロジェクト

2012年  
研究科横断型教育プログラム  
「大学で教えるということ」

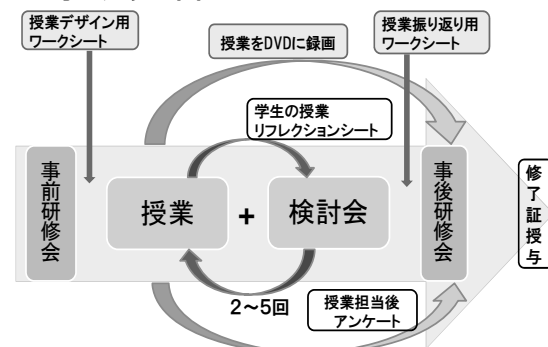
14

## 文学研究科プレFDプロジェクト

- 2014年度より6年目に突入
- 文学研究科のOD支援策として開始
- 年間を通じたプログラムを提供
- 総長名での修了証を発行
  - 学部向け授業の担当(2回以上)
  - 8回以上の授業参観+検討会への参加
  - 事後研修会への参加

15

## 文学研究科プレFDプロジェクト



16

## 研究科横断型教育プログラム 「大学で教えるということ」

- 単位を付与する正課の授業として提供
- 教育学研究科からの提供、全学の大学院生に
- 内容：講義+模擬授業&検討会

今年度もやります！

2014年2月9日(月)、10日(火)、12日(木)

ウェブをチェック！

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/cross/2014/a.htm>

(平成26年度 研究科横断型教育プログラム で検索)

もしくはtaguchi.mana.3z@kyoto-u.ac.jpまで

17

## 模擬授業・検討会の構成

- 模擬授業 (25分)  
5～10分 (90分の授業の説明) +  
20～15分 (実際の授業)
- 検討会 (20分)

18

## 問題解決のための様々な書籍



19

## 問題は授業だけではない

FD ... 教育技術を磨きましょう？

### Faculty Development

教える集団としての自己組織化

現状を多面的にとらえ、問題の在り処とその要因を追及し、解決策を提案し、実行する。  
研究者である私たちにはできるはず。

20

## 大学院生はどうすればよい？

- ・「心の準備」は必要。情報収集。
  - －リアリティ・ショックを避ける。
  - －「飛び込もうとしている」世界の現状を、知ったうえでキャリアを考える。

教育は重要。

~~研究は不要。~~

むしろ研究業績のハードルは上がる一方

21

## 大学淘汰の時代？

- ・こんなに大学は必要ないという議論もある。
- ・学生も入学する大学を選んでいる。大学院生にも「未来の職場と未来の同僚」を選ぶ権利がある。
- ・なんでも若手に押し付け、既得権益にあぐらをかいている組織はいずれ見放される。

22

## 参考になる文献

- ・池田輝政 他著 (2001)『[高等教育シリーズ] 成長するティップス先生』玉川大学出版部
- ・杉江修治 他編著(2004)『高等教育シリーズ125 大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部
- ・ケン・ベイン著(2008)『ベストプロフェッサー』玉川大学出版部
- ・中井 俊樹編(2008)『英語で授業シリーズ① 大学教員のための教室英語表現300』株式会社アルク
- ・夏目達也 他著 (2010)『大学教員準備講座』玉川大学出版部
- ・田口真奈・出口康夫・京都大学高等教育研究開発推進センター編著(2013)『未来の大学教員を育てるー京大文学部・プレFDの挑戦』勁草書房。

23

## 参考になるWebサイト

- －教授・学習サポートツール(名古屋大学高等教育研究センター)
  - ・ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/>
- －高等教育用語集(愛媛大学教育企画室)
  - ・ <http://web.opar.ehime-u.ac.jp/vocabrary.htm>
- －あっとおどろく大学授業NG集(山形大学高等教育研究企画センター)
  - ・ <http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/video.htm>
- －教授技術学習システム『匠の技』(岩手大学大学教育総合センター)
  - ・ <https://takumi.iwate-u.ac.jp/>
- －京都大学オープンコースウェア(京都大学)
  - ・ <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>
- －MOST(京都大学高等教育研究開発推進センター)
  - ・ <https://online-tl.org/portal>

24

# 「大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—」

## 事前アンケート（Basic コース）

京都大学 FD 研究検討委員会  
高等教育研究開発推進センター

このアンケートは、本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：\_\_\_\_\_

ご所属：\_\_\_\_\_

\*京大以外の方は、大学名もお書き下さい。

あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい。

ご身分：

### ■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士 [ ]

学年 ① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年以上 [ ]

### ■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他 ( ) [ ]

問1 この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるすべての番号を選び、⑥・⑨の場合は詳細を（ ）内にご記入下さい）

- ① 指導教員から ② その他の教員から ③ 友人から ④ 大学の HP で  
⑤ センターの HP で ⑥ ポスターで（掲示場所： ）  
⑦ ビラで ⑧ Eメール、郵便による案内で ⑨ その他（ ）

問2 大学での教育経験はありますか？ある方は行っている年数もお答え下さい。（あてはまる番号すべてを選び、②・③の場合は年数を（ ）内にご記入下さい）

- ① なし ② TA（約 年） ③ 非常勤講師（約 年）  
④ その他の教育経験（ ）：約 年

Ⅱ-3. 資料3

問3 大学教員になることをどの程度希望していますか。

- ① 全く希望していない    ② あまり希望していない    ③ どちらともいえない  
④ やや希望している    ⑤ 非常に希望している

問4 あなたが大学教員として働くことを想定した場合、以下の文章は、あなたの普段の考え、意識にどの程度あてはまりますか。1~5のうちもっともあてはまるものを1つ選んで下さい。なお、ここでの社会貢献とは、大学教員が学外の人たちとのコミュニケーションを通じて大学にある知を共有していく活動（アウトリーチ活動など）を、管理・運営とは大学組織のマネジメント業務（研究室運営、教授会、各種委員会など）の活動を指します。

項 目		あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
1	大学教員は研究に注力する必要がある	1	2	3	4	5
2	大学教員は教育に注力する必要がある	1	2	3	4	5
3	大学教員は社会貢献に注力する必要がある	1	2	3	4	5
4	大学教員は管理・運営に注力する必要がある	1	2	3	4	5
5	私は研究者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
6	私は教育者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
7	私は社会貢献を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
8	私は管理・運営を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
9	授業を行う際の自分の未熟な点について理解している	1	2	3	4	5
10	学生のニーズやその多様性を理解している	1	2	3	4	5
11	授業における学生とのコミュニケーションを重視している	1	2	3	4	5
12	自分に合った授業のスタイルを理解している	1	2	3	4	5
13	他者の視点を自分の授業に活かそうとしている	1	2	3	4	5
14	自分の専門分野を初学者にわかりやすく伝えることができる	1	2	3	4	5
15	自らの教育内容や教授方法を客観的に見ることができる	1	2	3	4	5
16	現代において大学教育の状況が変化していることを理解している	1	2	3	4	5
17	一斉講義以外の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
18	学生参加型の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
19	学生のモチベーションを高める方法を知っている	1	2	3	4	5
20	教育は自分の研究にも役に立つ	1	2	3	4	5
21	授業を行うことは研究上の発見にもつながる	1	2	3	4	5
22	教育に注力することは研究者としての成長の妨げになる	1	2	3	4	5
23	授業内容の水準・到達目標を下げて、学生の理解度に合わせる必要だ	1	2	3	4	5

24	様々な講義スタイルを学んでいきたい	1	2	3	4	5
25	自分の講義スタイルを改善していきたい	1	2	3	4	5
26	教育の改善には、他の教員と交流することが重要である	1	2	3	4	5

問5 どうして、この講座を受講しようと思いましたか？（あてはまる番号 1 つを選択して下さい）

問5－1.大学での教育活動に関心があるから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－2.大学で教えるための知識・技術を身につけたいから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－3.大学教育について考える機会が欲しかったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－4.実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－5.他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－6.他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－7.他の大学院生と人間関係をつくりたかったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－8.今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

Ⅱ-3. 資料3

問 5－9.その他の受講動機がある方は、欄内に自由にご記述下さい。

問 6 あなたが考える大学教育における問題点について、自由にご記述下さい。

問 7 研修会当日に議論したいテーマについて、自由にご記述下さい。

ご協力どうもありがとうございました。

# 「大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—」

## 事前アンケート（Advanced コース）

京都大学 FD 研究検討委員会  
高等教育研究開発推進センター

このアンケートは、本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前： \_\_\_\_\_

ご所属： \_\_\_\_\_

\*京大以外の方は、大学名もお書き下さい。

あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい。

ご身分：

### ■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士 [ ]

学年 ① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年以上 [ ]

### ■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他 ( ) [ ]

問1 この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるすべての番号を選び、⑥・⑨の場合は詳細を（ ）内にご記入下さい）

- ① 指導教員から ② その他の教員から ③ 友人から ④ 大学のHPで  
⑤ センターのHPで ⑥ ポスターで（掲示場所： ）  
⑦ ビラで ⑧ Eメール、郵便による案内で ⑨ その他（ ）

問2 大学での教育経験はありますか？ある方は行っている年数もお答え下さい。（あてはまる番号すべてを選び、②・③の場合は年数を（ ）内にご記入下さい）

- ① なし ② TA（約 年） ③ 非常勤講師（約 年）  
④ その他の教育経験（ ）：約 年

Ⅱ-3. 資料4

問3 大学教員になることをどの程度希望していますか。

- ① 全く希望していない    ② あまり希望していない    ③ どちらともいえない  
④ やや希望している    ⑤ 非常に希望している

問4 あなたが大学教員として働くことを想定した場合、以下の文章は、あなたの普段の考え、意識にどの程度あてはまりますか。1~5のうちもっともあてはまるものを1つ選んで下さい。なお、ここでの社会貢献とは、大学教員が学外の人たちとのコミュニケーションを通じて大学にある知を共有していく活動（アウトリーチ活動など）を、管理・運営とは大学組織のマネジメント業務（研究室運営、教授会、各種委員会など）の活動を指します。

項 目		あてはまらない	どちらかといえ あてはまらない	どちらとも いえない	どちらかといえ あてはまる	あてはまる
1	大学教員は研究に注力する必要がある	1	2	3	4	5
2	大学教員は教育に注力する必要がある	1	2	3	4	5
3	大学教員は社会貢献に注力する必要がある	1	2	3	4	5
4	大学教員は管理・運営に注力する必要がある	1	2	3	4	5
5	私は研究者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
6	私は教育者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
7	私は社会貢献を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
8	私は管理・運営を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
9	授業を行う際の自分の未熟な点について理解している	1	2	3	4	5
10	学生のニーズやその多様性を理解している	1	2	3	4	5
11	授業における学生とのコミュニケーションを重視している	1	2	3	4	5
12	自分に合った授業のスタイルを理解している	1	2	3	4	5
13	他者の視点を自分の授業に活かそうとしている	1	2	3	4	5
14	自分の専門分野を初学者にわかりやすく伝えることができる	1	2	3	4	5
15	自らの教育内容や教授方法を客観的に見ることができる	1	2	3	4	5
16	現代において大学教育の状況が変化していることを理解している	1	2	3	4	5
17	一斉講義以外の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
18	学生参加型の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
19	学生のモチベーションを高める方法を知っている	1	2	3	4	5
20	教育は自分の研究にも役に立つ	1	2	3	4	5
21	授業を行うことは研究上の発見にもつながる	1	2	3	4	5
22	教育に注力することは研究者としての成長の妨げになる	1	2	3	4	5
23	授業内容の水準・到達目標を下げて、学生の理解度に合わせる ことが重要だ	1	2	3	4	5



24	様々な講義スタイルを学んでいきたい	1	2	3	4	5
25	自分の講義スタイルを改善していきたい	1	2	3	4	5
26	教育の改善には、他の教員と交流することが重要である	1	2	3	4	5

問5 どうして、この講座を受講しようと思いましたか？（あてはまる番号 1 つを選択して下さい）

問5－1.大学での教育活動に関心があるから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－2.大学で教えるための知識・技術を身につけたいから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－3.大学教育について考える機会が欲しかったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－4.実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－5.他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－6.他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－7.他の大学院生と人間関係をつくりたかったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問5－8.今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから。

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない  
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

Ⅱ-3. 資料4

問 5－9.その他の受講動機がある方は、欄内に自由にご記述下さい。

問 6 授業を行う上で抱えている問題があれば、自由にご記述下さい。

問 7 「模擬公開授業・検討会」では、参加者のうちどなたかに実際に模擬授業を行っていただく予定です（1 授業につき概要説明 10 分＋実演 20 分程度）。あなたがその授業者となり、模擬授業を行っていただくことは可能ですか？（あてはまる番号 1 つ選び、②の場合は、懸案事項を（ ）内にご記入下さい）

- ① 行うことは可能
- ② 条件によっては可能（懸案事項： ）
- ③ 行うことは不可能

問 8 いずれかの教員免許をお持ちですか？（あてはまる番号すべてを選び、④の場合は詳細を（ ）内にご記入下さい）

- ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他（ ） ⑤なし

問 9 小・中・高等学校での指導経験はありますか？（あてはまる番号すべてを選んで下さい）

- ①小学校であり ②中学校であり ③高等学校であり ④なし

問10 塾・家庭教師などでの指導経験はありますか？

- ①あり ②なし

問11 学部生時代に受けた授業はどの程度満足なものでしたか？

- ①まったく満足していない ②あまり満足していない ③どちらともいえない  
④まあまあ満足している ⑤非常に満足している

問12 あなたが考える大学教育における問題点について、自由にご記述下さい。

問13 研修会当日に議論したいテーマについて、自由にご記述下さい。

ご協力どうもありがとうございました。

# 「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

## 事後アンケート（Basic コース）

京都大学 FD 研究検討委員会  
高等教育研究開発推進センター

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：\_\_\_\_\_

ご所属：\_\_\_\_\_

あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他（ ）

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述して下さい。

問1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

1. まったく満足していない    2. あまり満足していない    3. どちらとも言えない  
4. まあまあ満足している    5. 非常に満足している

その理由をお書き下さい。

問2 下記の（1）～（3）についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

1. まったく有意義ではなかった 2. あまり有意義ではなかった  
3. どちらとも言えない 4. まあまあ有意義だった 5. 非常に有意義だった

- (1) グループ討論・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 2 3 4 5  
(2) ミニ講義・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 2 3 4 5  
(3) コミュニケーションデザイン・・・・・・ 1 2 3 4 5

問3 本講座のような大学院生を対象とした取り組みの必要性についてどう思いますか。  
ご意見をお聞かせ下さい。

問4 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

問5 本講座では、Basic コース経験者や大学授業経験者を対象とした Advanced コースを設けています。来年度、Advanced コースが開講されるならば、参加したいと思いますか。

1. まったくそう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらとも言えない  
4. そう思う 5. 強くそう思う

問6 あなたが大学教員として働くことを想定した場合、以下の文章はあなたの普段の考え、意識にどの程度あてはまりますか。1~5のうちもっともあてはまるものを1つ選んで下さい。なお、ここでの社会貢献とは、大学教員が学外の人たちとのコミュニケーションを通じて大学にある知を共有していく活動（アウトリーチ活動など）を、管理・運営とは大学組織のマネジメント業務（研究室運営、教授会、各種委員会など）の活動を指します。

Ⅱ-3. 資料5

項 目		あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
1	大学教員は研究に注力する必要がある	1	2	3	4	5
2	大学教員は教育に注力する必要がある	1	2	3	4	5
3	大学教員は社会貢献に注力する必要がある	1	2	3	4	5
4	大学教員は管理・運営に注力する必要がある	1	2	3	4	5
5	私は研究者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
6	私は教育者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
7	私は社会貢献を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
8	私は管理・運営を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
9	授業を行う際の自分の未熟な点について理解している	1	2	3	4	5
10	学生のニーズやその多様性を理解している	1	2	3	4	5
11	授業における学生とのコミュニケーションを重視している	1	2	3	4	5
12	自分に合った授業のスタイルを理解している	1	2	3	4	5
13	他者の視点を自分の授業に活かそうとしている	1	2	3	4	5
14	自分の専門分野を初学者にわかりやすく伝えることができる	1	2	3	4	5
15	自らの教育内容や教授方法を客観的に見ることができる	1	2	3	4	5
16	現代において大学教育の状況が変化していることを理解している	1	2	3	4	5
17	一斉講義以外の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
18	学生参加型の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
19	学生のモチベーションを高める方法を知っている	1	2	3	4	5
20	教育は自分の研究にも役に立つ	1	2	3	4	5
21	授業を行うことは研究上の発見にもつながる	1	2	3	4	5
22	教育に注力することは研究者としての成長の妨げになる	1	2	3	4	5
23	授業内容の水準・到達目標を下げても、学生の理解度に合わせることが重要だ	1	2	3	4	5
24	様々な講義スタイルを学んでいきたい	1	2	3	4	5
25	自分の講義スタイルを改善していきたい	1	2	3	4	5
26	教育の改善には、他の教員と交流することが重要である	1	2	3	4	5

■ 高等教育研究開発推進センターでは教員を目指す大学院生、また OD や PD の方々を対象とした教育実践のためのワークショップや、高等教育に関わるシンポジウムを今後も開催していく予定です。年に数回程度、お知らせを送らせていただいてもよろしいですか。

1 送って欲しい（本講座登録時と同じアドレス）

2 送らないで欲しい

3 次のアドレスに送って欲しい\_\_\_\_\_

# 「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

## 事後アンケート（Advanced コース）

京都大学 FD 研究検討委員会  
高等教育研究開発推進センター

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：\_\_\_\_\_

ご所属：\_\_\_\_\_

あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他（ ）

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述して下さい。

問1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

1. まったく満足していない    2. あまり満足していない    3. どちらとも言えない  
4. まあまあ満足している    5. 非常に満足している

その理由をお書き下さい。

問2 下記の（1）～（3）についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

Ⅱ-3. 資料6

1. まったく有意義ではなかった 2. あまり有意義ではなかった  
3. どちらとも言えない 4. まあまあ有意義だった 5. 非常に有意義だった

- (1) ミニ講義・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5      4      3      2      1  
(2) コミュニケーションデザイン・・・・・・・・・・ 5      4      3      2      1  
(3) 模擬公開授業・検討会・・・・・・・・・・ 5      4      3      2      1  
(4) 全体討論・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5      4      3      2      1

問3 本講座のような大学院生を対象とした取り組みの必要性についてどう思いますか。  
ご意見をお聞かせ下さい。

問4 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

問5 あなたが大学教員として働くことを想定した場合、以下の文章は、あなたの普段の考え、意識にどの程度あてはまりますか。1~5のうちもっともあてはまるものを1つ選んで下さい。なお、ここでの社会貢献とは、大学教員が学外の人たちとのコミュニケーションを通じて大学にある知を共有していく活動（アウトリーチ活動など）を、管理・運営とは大学組織のマネジメント業務（研究室運営、教授会、各種委員会など）の活動を指します。



項 目		あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
1	大学教員は研究に注力する必要がある	1	2	3	4	5
2	大学教員は教育に注力する必要がある	1	2	3	4	5
3	大学教員は社会貢献に注力する必要がある	1	2	3	4	5
4	大学教員は管理・運営に注力する必要がある	1	2	3	4	5
5	私は研究者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
6	私は教育者としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
7	私は社会貢献を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
8	私は管理・運営を行う存在としてやっていく自信がある	1	2	3	4	5
9	授業を行う際の自分の未熟な点について理解している	1	2	3	4	5
10	学生のニーズやその多様性を理解している	1	2	3	4	5
11	授業における学生とのコミュニケーションを重視している	1	2	3	4	5
12	自分に合った授業のスタイルを理解している	1	2	3	4	5
13	他者の視点を自分の授業に活かそうとしている	1	2	3	4	5
14	自分の専門分野を初学者にわかりやすく伝えることができる	1	2	3	4	5
15	自らの教育内容や教授方法を客観的に見ることができる	1	2	3	4	5
16	現代において大学教育の状況が変化していることを理解している	1	2	3	4	5
17	一斉講義以外の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
18	学生参加型の授業の進め方を知っている	1	2	3	4	5
19	学生のモチベーションを高める方法を知っている	1	2	3	4	5
20	教育は自分の研究にも役に立つ	1	2	3	4	5
21	授業を行うことは研究上の発見にもつながる	1	2	3	4	5
22	教育に注力することは研究者としての成長の妨げになる	1	2	3	4	5
23	授業内容の水準・到達目標を下げても、学生の理解度に合わせることが重要だ	1	2	3	4	5
24	様々な講義スタイルを学んでいきたい	1	2	3	4	5
25	自分の講義スタイルを改善していきたい	1	2	3	4	5
26	教育の改善には、他の教員と交流することが重要である	1	2	3	4	5

■ 高等教育研究開発推進センターでは教員を目指す大学院生、また OD や PD の方々を対象とした教育実践のためのワークショップや、高等教育に関わるシンポジウムを今後も開催していく予定です。年に数回程度、お知らせを送らせていただいてもよろしいですか。

1 送って欲しい（本講座登録時と同じアドレス）

2 送らないで欲しい

3 次のアドレスに送って欲しい \_\_\_\_\_

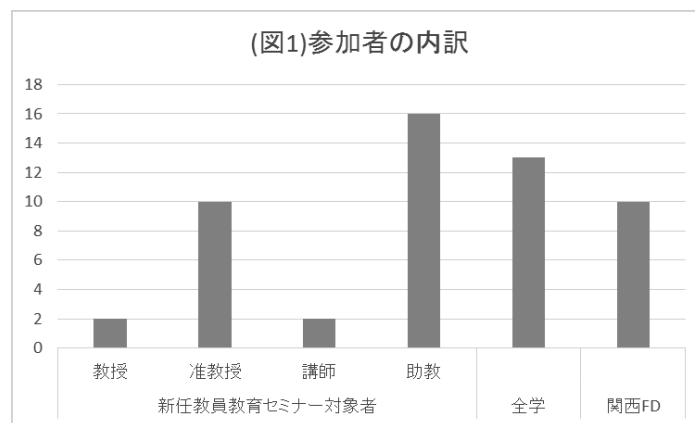
## II-4. 新任教員教育セミナー

### II-4-1. プレワークショップ

#### 「学生に届く声—授業におけるコミュニケーションスキルのためのワークショップ—」

##### 1. プログラムの概要

京都大学では、全学的なFD活動として平成23年度より「新任教員教育セミナー」を実施しており、高等教育研究開発推進センターは学務部教務企画課の支援を受けながら企画・運営にあたっている。さらに本年度は初めての試みとして、「新任教員教育セミナー・プレワークショップ」として、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師の蓮行氏を招き、「学生に届く声—授業におけるコミュニケーションスキルのためのワークショップ—」を9月25日10:00~11:30（「新任教員教育セミナー」の同日午前）、京都大学時計台百周年記念館・国際交流ホールⅢにおいて開催した。京都大学における初任者を対象とした「新任教員教育セミナー」とは異なり、プレワークショップは非常勤講師を含む本学教職員全体を対象とし、また関西地区FD連絡協議会「初任教員向けプログラム（カンジュニ）」として会員校に公開した。参加者の内訳は、「新任教員教育セミナー」の対象者が30名（教授2名、准教授10名、講師2名、助教16名）、全学からの申込みが13名（うち職員2名）、関西FD会員校から10名、合計53名であった（図1）。



講師の蓮行氏は、プロの劇団を主宰し、舞台演出家として活躍する一方、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師として大学や企業における研修プログラムを開発し、多数のワークショップを手がけている。ハーバード大学やスタンフォード大学をはじめ、アメリカの大学では、教員のコミュニケーションスキルの養成が職能開発プログラムの中で重要なものの一つとされており、演劇の手法を利用した研修が多く開催されている。本ワークショップでは、演出家、俳優、ワークショップ講師として経験豊富な蓮行氏を迎え、授業で活用できる基本的なコミュニケーションスキルとはどのようなものか、参加者に体験してもらうことを目的とした。

## 2. ワークショップ

本ワークショップで蓮行氏は、「不親切グラフ」という独自の図解を用いて、学生に対する「親切度」について講義した。その内容は、親切に教えることは、必ずしも学習者の高い目標の達成につながらず、むしろ不親切な方が、学習者はより高い能力を獲得することがある。したがって、学習の目標に即してどれだけ親切にコミュニケーションを取るべきか、考慮する必要がある、というものである。

次いで蓮行氏は、参加者に「泡沫裁判」という即興劇を演じさせた。参加者たちは配布された裁判のあらすじにもとづいて、それぞれ被告人・大学教員・センター長・弁護団・裁判員・裁判長・市民・マスコミなどの役割を与えられる。そうした役割を与えられることで、普段演劇に縁の無い参加者たちが、自然と適切なコミュニケーションを取り演技をするようになる。このように、コミュニケーションは十分な動機と仕掛けがあれば自然と生まれるのであり、授業で学生を巻き込んでいくためには、そうした状況をデザインすることが重要なのである。蓮行氏は、口頭などで直接的に知識・スキルを教授するのではなく、様々なワークなどを通じて間接的に知識・技能を植え付けることを「バイパス効果」と呼び、とりわけ演劇はこの「バイパス効果」を引き起こすのに有用であるとした。

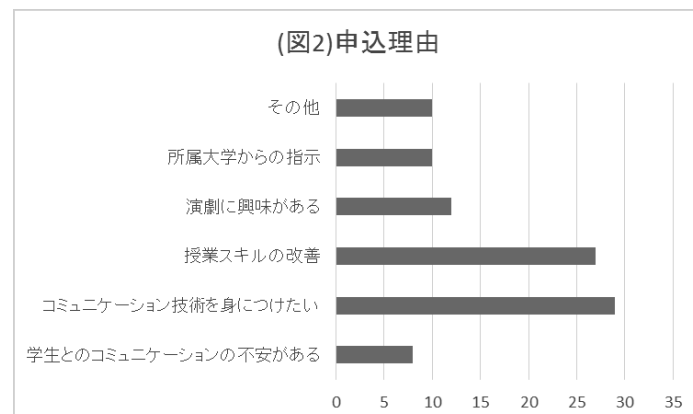
なお、演技の少ない市民の役割を与えられた参加者は、同時並行でアイスブレイクに役立つコミュニケーションゲームを行った。

蓮行氏の軽妙な語り口とユーモアによって、ワークショップは終止和やかな雰囲気で行われた。当日の様子については、京都大学 OCW にて Web 公開されている (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/center-for-the-promotion-of-excellence-in-higher-jp/pe0vck/jj1rxi>)。

## 3. 事後アンケート

### 3-1. 申し込み理由

ワークショップ終了後、参加者にアンケートを実施したところ、53 名中 52 名の回答が得られた。このワークショップに申込みをした理由を尋ねたところ(複数回答可)「学生とのコミュニケーションの不安がある」が 8 名、「コミュニケーション技術を身につけたい」が 29 名、「授業スキルの改善」が 27 名、「演劇に興味がある」が 12 名、「所属大学からの指示」が 10 名、「その他」が 10 名であった(図 2)。この結果から、ワークショップ参加の動機は主に、実践的かつ即応用可能なスキルの獲得であったことがうかがわれる。「その他」の理由として具体的に、「教育劇の研究をしている」「面白そうだった」「興味があった」の記述があった。



### 3-2. 有意義度

参加者にこのワークショップが全体として有意義であったかどうか、「とても有意義であった」～「全く有意義でなかった」の5件法で尋ねたところ、平均4.26でありおおむね高い評価であった。

### 3-3. 具体的にどの点が有意義であったか（有意義でなかったか）

自由記述をカテゴリ分けし、多いものから並べた。特に多かったのは、「面白い・楽しかった」という率直な感想であり、演劇というワークショップの形態が目新しく、参加者の興味をひいたのだと思われる。実際、「演劇・ロールプレイ形式」というワークショップ形態を直接挙げた参加者が多い。ついで、「授業をデザインするための参考になった」という実際の授業に学んだ成果を応用したいという意見が多かった。

#### 【面白い・楽しかった】

- ・話し方がおもしろかった。具体的な教訓は普通ですね。場を与えるべきってのには賛成です。
- ・単純に面白かった（被告人役）ただこれを授業にどうかすかは・・・。
- ・不親切グラフから始まった演劇傾式のワークショップがとてもごんしんでおもしろかった。
- ・楽しかったです。
- ・気分転換になった。能力の個人差というものを再確認した。
- ・より実践的な講義かと思いましたが、ディベート式の講義を勉強させて楽しませていただきました。
- ・楽しく学べるところが有意義でした。チームでの話し合いの進め方が難しかったです。
- ・よく練られていて楽しかったです。

#### 【授業をデザインするための参考になった】

- ・冒頭の達成度と不親切のグラフは、ハッとした。自分の講義をイメージしながら今回のこのWSをどう活かすか考えていた。
- ・自分が担当している授業に取り入れられる内容だったので。また各役割にわかれて話し合っている時に押しの強い人がいるとそっちに流される・・・という授業で経験しているディスカッションのむずかしさを再体験し、教員であっても議論するのは難しいこともあるものだ、と認識できた。
- ・講義を考える上でワークショップのやり方の具体例を知ることができ、参考になった。
- ・ワークショップ授業法の手順ポイントなど。
- ・考えるきっかけを頂いた。場の設定（提供）の大事さを再確認できました。ありがとうございます。

#### 【演劇・ロールプレイ形式で役割を演じたこと】

- ・様々なグループに分かれてそれぞれの立場から発言を考えるとところ。
- ・皆さんが役になりきることができるのにおどろきました。
- ・roleplayが大変役に立ちました。
- ・ロールプレイング形式。
- ・演劇という手法を使った参加型研修を初めて体験できた点。
- ・演劇は初めての体験でしたのでとても興味深かったです。

#### 【ワークショップのやり方を学んだ】

- ・ワークショップの実施方法を学べた。
- ・多数参加のWSにおいて全体を動かす（全体が動いていく）スキルに新たな知見を得ることができた。
- ・自分の立場と様々な視野での議論ができて、単に技能を教えるだけが講習ではないと感じました。
- ・参加者の主体性を引き出す点。

#### 【（学生に）ディスカッションを促すための参考になった】

- ・講義で利害の異なるグループに分けて議論してもらおうと思っていたので、今日のワークショップの進め方はすごく勉強になりました。

- ・15人ほどの初年次教育で後期ディベートをするつもりだったが、泡沫裁判所の発展バージョンにしようかな。具体的なアイデアを頂きました。
- ・役割と場を与えることの重要性を感じることができました。各グループでリーダーシップをどのようにとって限られた時間で議論をまとめていたのか、気になった。（センター長とか裁判長が指名されていたのでしょうか）。

【不親切グラフの講義が良かった】

- ・最初の不親切グラフの知識は理解しやすかった。
- ・不親切グラフ、日頃思っていたことをハッキリ言っていたように思いました。面白かったです。
- ・不満足感を残して主体的に学んでもらうきっかけづくりにするという逆転の発想が興味深かったです。医療人材育成の話題に関して深く聞かせていただきたかったです。

【バイパス効果の解説がためになった】

- ・急がば回れ（バイパス効果）の重要性が確認できたこと。
- ・バイパスを探すという見方をしなかったもので、これから考えてみたい。
- ・バイパス効果を通して、役割が与えられることと、動機づけについて考えることが出来たから。体験できるのは楽しい。

【コミュニケーションゲーム】

- ・コミュニケーションゲーム。お話しもためになりました。
- ・ゲームが思っていた以上にハードでした。でも楽しかったです。学生とのコミュニケーションでどう活かされるかは不明ですが。
- ・市民だったので、アイスブレイクの方法。

【よくわからなかった・消化できなかった】

- ・今すぐには何が身についたかは実感できていない。
- ・まったく想像していない内容で興味深く、考える機会が欲しかった。
- ・楽しかったがどのように授業等にいかしていくのかがまだわからない。

【コミュニケーションの仕方を実感したこと】

- ・役割と場が与えられればこんなにうまくコミュニケーションできるのだと楽しく感じた。
- ・あっという間の時間でした。参加者との関わり方などとても勉強になりました。市民の人たちとやっていた遊びを体験したかったです。次回に期待しています。また開催してください。

【有益ではなかった】

- ・実際の授業には（そのまま）使えなさそうだった。
- ・面白い試みではあったが、論点の深まりがなかった。

【その他】

- ・教習所に近い部分があったのでそれを見直すきっかけとなった。
- ・ロールプレイとは違う臨場感があり、いろいろな立場を考える幅が広がった。
- ・コミュニケーションが必要とされる場で、与えられたミッションを遂行するためにどのようなやり取りが必要なのかを瞬時に考えることができた。

### 3-4. 今回のワークショップについての感想や今後の要望

今回のワークショップの感想や、今後のセンターのイベントに関する要望などを求めたところ、様々な意見の中で、今回と同じ形式のワークショップの開催を求める声が最も多かった。蓮行氏は今回のようなワークショップを通常1日がかかりで実施するそうである。実際に参加者から「もっと時間を長くすべき」という意見があり、再度開催する場合は90分よりももっと長いタイムテーブルを組むことは可能か、検討する必要があるだろう。

【同じ形式のワークショップを希望】

- ・再度時間を増やして同じセミナーを希望する。
- ・蓮行先生のワークショップ、またやってください。
- ・演劇を活用したワークショップには関心があります。またの機会があればさまざまなスキルを身に着けたいと思います。
- ・間をあけてまた参加したいです。

【もっと時間を長くすべき】

- ・もっと長時間やりたかった。
- ・もっと長い時間が良いと思いました。→演劇形式の場合。

【他の様々なワークショップを希望】

- ・いろいろなワークショップをしてほしいです。（どういふのがあるか、わからないのですが・・・）
- ・作業効率の上げ方などの話も知りたい。

【引き続きセンターの今後の活動に期待】

- ・是非今後も続けてください。
- ・時間と興味がなかなか合わないですが、どんどん発信して頂けるととてもありがたいです。

【同種のワークショップを希望】

- ・堅固しいWSではなく、楽しめるもの。本日はありがとうございました。

【時期変更の要望】

- ・この時期は科研費等で忙しいので次回からは少しずらしてほしい。

#### 4. 終わりに

本ワークショップは「新任教員教育セミナー」に合わせて、本年度から実施されたものであるが、告知の早い段階で応募が多数寄せられ、申込み受付を途中で締め切ることになった。有意義度が4.26と高かったことから、参加者の期待に十分に応えたものであったと言える。

事後アンケートにおいて見られたように、参加者たちの動機は実践的な授業スキル・コミュニケーションスキルの獲得などであり、本学においてこうしたテーマを掲げたワークショップが開かれることは少ない。おそらく今後も同種のワークショップに対する需要は高く、センターはそうした声に応えるべく、企画・実施をする必要があるだろう。



(田中 一孝、田口 真奈、松下 佳代)

## II-4-2. 新任教員教育セミナー 2014

### 1. プログラムの目的と経緯

#### 1-1. 全学的な取組として

京都大学では、全学的なFD活動として、毎年9月に「全学教育シンポジウム」が開催されている。このシンポジウムには、総長・理事をはじめ200名あまりの教職員が参加し、主に教養・共通教育に関するテーマについて情報提供や意見交換が行われている。だが、教育経験別教育研修としては、大学院生対象の「大学院生のための教育実践講座」（II-3参照）が実施されているのみで、全学的な教員向けの研修は平成21年度まで行われていなかった。

一方、京都大学の第2期中期目標・中期計画では、学内の取組事項として下記の項目があげられている。

- ・FD研究検討委員会においてFDの現状分析を行い、情報の共有化を促進する。
- ・在学生、卒業生による授業評価の実施について検討する。
- ・部局FDへの支援を行う。
- ・院生・OD等を対象としたプレFDの普及を行う。
- ・初任者研修を実施する。
- ・ワークショップ等による情報の共有化を図る。

工程では「初任者研修」は平成23年度から実施することとなっていたが、平成22年度より試行的に開始し、以降、センターが京都大学FD研究検討委員会との連携の下、学務部教務企画課の支援を受けながら企画・運営にあたってきた。本年度は5回目である。

#### 1-2. 目的と名称

「初任者」とは、ふつう「採用の日から1年間」以内の教員を指し、初等・中等教育では、初任者研修が法律で義務づけられている（教育公務員特例法第23条）。大学では初任者研修は義務づけられてはいないものの、近年、初任者研修を実施する大学は増えている（関西地区FD連絡協議会の「FD共同実施ワーキンググループ」は初任者研修の共同実施を行っている。III-3参照）。

しかし、初等・中等教育の「初任者」が教育実習以外にはほとんど教壇に立った経験がない教員であるのに対して、大学教員の場合は、その大学で採用されて1年間以内であっても、他の大学での教育経験をもっている場合が少なくない。したがって、初等・中等教育の教員と大学教員とでは、自ずと初任者研修の目的も異なってくる。とりわけ、本学の場合は、新規採用教員の中に、長い教育経験を有する教員も少なくないことが予想された。そこで、私たちは、「初任者」に代えて「新任教員」という呼称を用いることにし、その研修の目的を、＜京都大学らしい教育とはどのような教育か＞を考え、＜そうした教育を行うためにどのような教育サポートがあるのか＞、＜大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか＞を知ること、とした。これは、「本学の理念や目的に呼応したファカルティ・ディベロップメント（FD）」という中期目標の内容にも合致している。

本年度のプログラムは、現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革の紹介（セッション1）、京大生の学習の実態の報告（セッション2）、京大の教育的取組の紹介（セッション3）、京大の授業実践の紹介（セッション4）、京大の教員が授業や指導で直面しやすい問題とそれにつ

いての事例紹介およびグループ討論（セッション5）、グループ討論の全体での共有（セッション6）、という6つのセッションで構成した（2-1「開催日時とタイムテーブル」参照）。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図したものである。前期終了後の9月に実施することで、前期の教育経験をふまえてそのふり返りの機会となることもめざした。

### 1-3. 対象者と参加者

新任教員といっても、職階、雇用形態などきわめて多様である。また、この研修は教育目的に限定されているので、研究を目的に雇用された教員については除外する必要がある。そこで、本研修の対象となる新任教員を、「平成25年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、学務部教務企画課経由で、各部局に対して該当者のリストをあげてもらったよう依頼した。

その結果得られた対象者（計396名）の分布を、当日の参加者（計80名）の分布と並べて、(1) 職階別、(2) 新採・昇進別、に表すと以下のようになる。職階別では助教の人数が最も多い。また、新採・昇進別では新採の方が多かった。昇進については、それまでの職階では教育活動に従事していなかったが、昇進によって従事するようになった者が含まれていると考えられる。

#### (1) 職階別

##### ■内訳

##### □対象者（計396名）

助教：214名（助教4名、特定助教91名、特定拠点助教8名、特定病院助教15名、大学院担当助教96名）

講師：43名（講師2名、特定講師24名、特定外国語担当講師2名、特定拠点講師1名、大学院担当講師14名）

准教授：100名（准教授11名、特定准教授36名、特定外国語担当准教授1名、大学院担当准教授52名）

教授：39名（教授2名、特定教授14名、大学院担当教授23名）

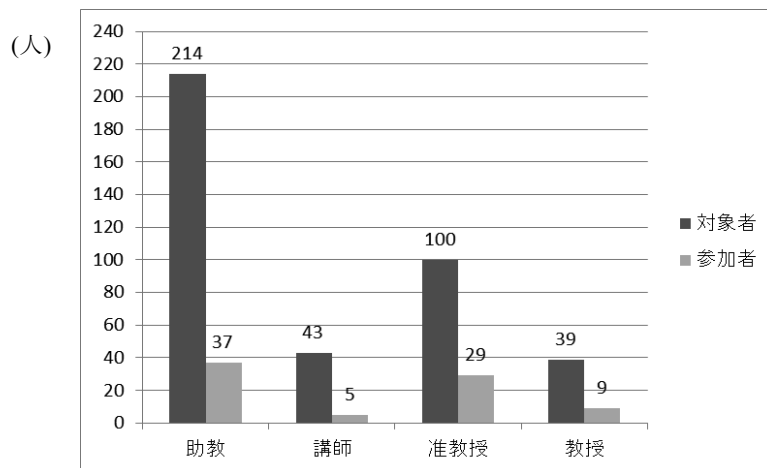
##### □参加者（計80名）

助教：37名（助教2名、特定助教12名、大学院担当助教23名）

講師：5名（特定講師3名、大学院担当講師2名）

准教授：29名（准教授7名、特定准教授3名、大学院担当准教授19名）

教授：9名（大学院担当教授9名）





## (2) 新採・昇進別

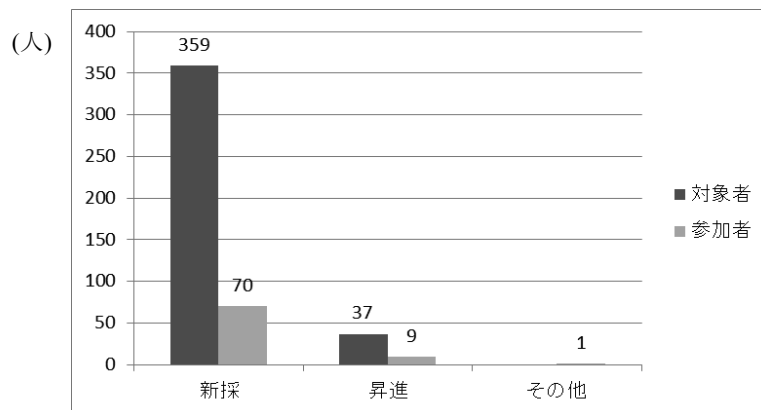
### ■内訳

□対象者（計 396 名）

新採：359 名、昇進：37 名

□参加者（計 80 名）

新採：70 名、昇進：9 名、その他：1 名



## 2. プログラムの実際

### 2-1. 開催日時とタイムテーブル

開催日時：2014 年 9 月 25 日（木）13:00 ～ 18:00

開催場所：京都大学時計台百周年記念館 国際交流ホール

参加人数：80 名

#### タイムテーブル

13:00	<b>開会式</b> （司会・進行：高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈） 開会挨拶：京都大学教育担当理事 淡路 敏之
13:10	<b>セッション 1：ミニ講義 1「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」</b> FD 研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透
13:25	<b>セッション 2：ミニ講義 2「京大生の学習の実態」</b> 高等教育研究開発推進センター教授 溝上 慎一
13:45	<b>セッション 3：ミニ講義 3「京大の教育的取組」</b> 「教養・共通教育（PandA の紹介を含む）」国際高等教育院副教育院長 喜多 一 「困難を抱えた学生に向き合うには」健康科学センター助教 上床 輝久 「京都大学の教育サポートリソース」高等教育研究開発推進センター助教 田中 一孝

14:40	<p><b>セッション4: ミニ講義4「私の授業」</b>  国際高等教育院（人間・環境学研究科）  教授 高橋 由典</p> 
15:10	休憩
15:25	<p><b>セッション5: グループ討論</b>  「京大でどう教え、指導するか」</p> 
16:55	休憩
17:10	<p><b>セッション6: ラップアップ</b></p> 
17:45	<p><b>閉会式</b>  閉会挨拶：FD 研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透</p>

## 2-2. セッション5 グループ討論のテーマ

セッション5では、新任教員が本学の授業や指導で直面しやすい問題として、以下の6つのテーマを掲げた。参加者は、事前にこの中から自分の希望するものを選択し、テーマごとに分かれてグループ討論を行った。各グループとも、そのテーマについて経験を有する学内の教員から事例紹介・情報提供が行われ、ファシリテーターの司会進行によって自由に議論が展開された。

テーマ	事例紹介・情報提供	テーマの説明
1 科学者倫理教育	平竹 潤 教授 (化学研究所)	体験的かつインタラクティブに科学者倫理を学ばせ、科学者倫理を自分の問題として考えさせるには、科学者倫理教育をどうデザインすればよいだろうか。
2 ICTを使った教育 —MOOCを中心に—	土佐 尚子 教授 (情報環境機構)	【反転授業型研修】世界的に広まりつつある大規模オープンオンライン講座(MOOC)を実際に体験し、教育効果を高めるためのICTの効果的利用について議論する。 *「反転授業」とは、教室外で講義内容を映像等で視聴し、教室では応用的な課題に取り組む授業形態です。 *このセッションを希望された方は、セミナーまでにMOOCを体験して頂きます(資料は後日お送りします)。
3 英語による授業をどう行うか?	金 哲佑 教授 (工学研究科)	留学生を含む英語による授業では、日本人学生に対する日本語による授業とは異なる工夫が必要になる。それはどんな工夫か。
4 学生の思考力を鍛える	伊勢田 哲治 准教授 (文学研究科)	学生が4年間で身につけるものは、専門分野の知識・スキルだけではない。批判的思考や分析的推論、問題解決などの思考力を鍛えることも、大学教育の目標である。全学共通科目や専門科目を通じて、どのように思考力を鍛えることができるだろうか。
5 研究室運営	宮野 公樹 准教授 (学際融合教育研究推進センター)	教員にとっての研究推進の場、そして高度な人材育成の場である研究室。研究室を、研究と教育の原動力として機能させるには?
6 博士課程院生のキャリア形成支援	奥村 正悟 教授 (学生総合支援センター キャリアサポートルーム)	欧米と同様、わが国でも文系・理系を問わず、博士課程修了者が社会で広く活躍することが求められつつある。博士課程院生に対して、アカデミック・ポスト以外のキャリアも含む多様なキャリア形成を支援していくにはどうすればよいだろうか。

## 2-3. セッション6 ラップアップ (各グループではどのような議論が行われたのか)

セッション5のグループ討論の内容は、セッション6で報告され、全体で共有された。以下に、各グループからの報告を紹介する。

### ■テーマ1「科学者倫理教育」

事例紹介：化学研究所 教授 平竹 潤

ファシリテーター：高等教育研究開発推進センター 教授 松下 佳代

テーマ1では、最初に各参加者が自己紹介をかねて科学者倫理や科学者倫理教育について感じている問題を話した後、平竹先生がポケゼミで取り組んでおられる科学者倫理教育の授業について、お話を伺いました。授業の内容としては、学生にまず、モーツァルトの音楽を聴かせると化学反応が進むという「モーツァルト効果」についての偽実験をしてもらいます。学生はすんなりとだまされてしまうのですが、その次の週に種明かしをして、だまされる側にもだます側にも立つ危険性があるということから、科学者倫理について学ぶというものでした。実際に参加したら非常に面白そうなものだと感じました。これについては京都大学のOCWでも見られるそうです。

その後、グループディスカッションに移ったのですが、科学者倫理教育の行い方よりも科学者倫理とは何かを中心に議論が展開していったように思います。最初に、グレーゾーンはどのあたりかということが話題に上りました。特にコピペと盗用の違い、自分の論文からの引用はどの程度であれば「自己剽窃」にならないのかといったことが議論になりました。それから倫理と法の違い。犯罪行為の場合は「疑わしきは罰せず」だが、研究不正行為の場合は「疑わしきは罰する」になるのだということも、平竹先生からお話がありました。

後半は、研究室のチェック体制の問題について議論しました。不正が生まれるような状況がどうしてつくられるのかについては、特に教授が忙しくて十分な指導や管理できないという問題が出されました。

最後に、レビュアーを育てることや、ギフトオーサiershipをなくすことなども、不正行為を減らす上で重要なのではないかという話で終わりました。

(報告者：薬学研究科 講師 塚野 千尋)

## ■テーマ2「ICTを使った教育—MOOCを中心に—」

事例紹介：情報環境機構 教授 土佐 尚子

ファシリテーター：高等教育研究開発推進センター 准教授 酒井 博之

第2グループでは、土佐先生から京大でのICTを使ったさまざまな試みの紹介をしていただき、それに関して議論をするという形で進めました。

MOOCとは、オンラインで講義を行い、それを全世界に発信して、インタラクティブにさまざまな活動を行いながら、みんなで学ぼうという試みです。これに関して京大では、この4月から生命化学の講義を新しく始め、その講義の中でこれまでになかった新しい試みをたくさんやりましたという話を主にしていただきました。

議論の中では、そういう新しい試みをしていく中で、そもそもMOOCのようなオンラインで発信する講義というものは、一体誰に届けようと思ってやっているのかということが話題になりました。それには幾つかあって、当然、利用者は大学生ぐらいの年代が一番多いということだったのですが、教育機会に恵まれない国や環境にいる人たちが、そういったオンラインの講義に、無料で、いつでも、どこでも、教育に参加できるということもあります。そういう方がメーンターゲットだろうということが恐らく一つの共通理解です。

それに向けた問題点として、やられた経験のある方は分かると思うのですが、今現在、そういうオンラインでの講座は、いろいろ手続きが面倒だったりします。ネット上でカチカチしながらやるよりも、実際にリアルに講義を受けた方が当然楽で、分かりやすいということがあります。しかし、僕たちのように教育機会に恵まれている者にとってはそれほど魅力がなく、それほど関わっていない人も多い一方で、いろいろな障害があつて、やはり教育機会に恵まれない

い人にとっては、そういった困難などは関係なく、少しくらい面倒でも、少しくらいアクセスが大変でも、何としてもその知識にたどり着きたいという思いは、世界中にたくさんあるはずです。

その点を考えると、いろいろごちゃごちゃと考えすぎてやらないよりは、どんどんやってみて、未完成の形でいいのでとにかく発信していき、発信していく中で、みんなにそういったシステムに慣れてもらい、またより良い方向にバージョンアップしていくという形で、今後進めていくことがいいだろうということになりました。

結論としては、ここにいらっしゃる皆さんもぜひ京大の OCW などに積極的に参加して、自分の講義をどんどん発信していつてもらえればいいな、僕もぜひやっていきたいなと考えています。

(報告者：理学研究科 助教 佐々木 貴教)

### ■テーマ3「英語による授業をどう行うか？」

事例紹介：工学研究科 教授 金 哲佑

ファシリテーター：高等教育研究開発推進センター 教授 飯吉 透

第3グループでは、工学部地球工学科の国際コースという、英語で全て授業を行っている、京大でも珍しい部署でご経験を積まれている金先生のお話を、まず伺わせていただきました。人数的にメジャーが留学生の方で、マイナーが日本人となっていて、「イングリッシュスキルが全然違う中で教えるときにどうしたらいいか。また、カルチャーが違い、日本人は自己主張をあまりしないので、留学生なども、面白いと思っているのか、その人の能力なのかも含めて判断しかねるといった事情がある」というお話をされました。

その後の皆のディスカッションの中でも、日本人がメジャーで留学生がマイナーという環境の中において、教える側として多くの先生方が同じ問題を感じておられるようでした。それに対してどのように対応していけばいいか、かなり盛り上がりました。大きなイングリッシュスキルの違いにどう対応するかという問題もあるけれども、「語学の問題を超えて、学生たちがレポートを書くときに、構造的なレポートをどう書けばいいかを知らない、教授に対するメールの仕方を知らないなど、基本的なしつけのような部分が、実は高校教育などでも全くされていないことが問題だ」ということで、専門を教える各授業でそれぞればらばらにするのはあまりにも効率が悪いので、こういったことに関しては、「ぜひ全学で対応していただけることが一番望ましいのではないかな。まとめて対応していただく時間を取って、授業として1回生などの若い学年をターゲットに対応していただく形が、今後望ましいのではないかな」ということが、一つ、まとめとして挙がりました。

その他には、私の疑問でディスカッションしていただいたところが大きいのですが、メジャーが日本人で大多数を占める中で、数名の留学生に対してどういったフォローができるかというところでは、「授業の中でグループワークをしたり、留学生の方をプリビレッジドとしてリーダーの役に当てることもあるかもしれない」という意見がありました。また、「オンライングループディスカッションで、なかなか発言しない日本人の意見を吸い上げたりする」こともありますが、「留学生に対しては授業の外のオフィスアワーの時間を取って別で対応したり、フリップトクラスルームでドロップアウトしそうな日本人に対応するなど、授業の外で両方の対応が可能かもしれない」ということが、もう一つ、まとめのポイントとして挙がりました。

最後には、どうすれば理想的な授業の準備態勢が取れるかというときに、貴重なご意見とし

て、「若い先生にサバティカル制度なども含めて時間をしっかりと与えて、海外的な視点を持っていただく。海外からの視点、日本で授業だけでなく、いろいろな教育の在り方があることを経験していただくことで、同じような議論が毎年続くことを避けられるのではないか」ということで、締めくくりになりました。

(報告者：医学研究科 助教 佐々木 典子)

#### ■テーマ4「学生の思考力を鍛える」

事例紹介：文学研究科 准教授 伊勢田 哲治

ファシリテーター：高等教育研究開発推進センター 教授 溝上 慎一

第4グループは、授業や研究室でいかにして思考力を鍛えるかというモチベーションを持ったメンバーが集まりました。最初に、皆さんからどういうモチベーションでこのグループに参加したのかという自己紹介があり、それぞれの問題意識を発表しました。その後、伊勢田先生から、クリティカルシンキングについての分かりやすい講義がありました。その話の骨子は何かということ、クリティカルシンキングをするときには、思考のスキルと思考のベースになる知識、物事を疑う態度が重要であるということでした。特に思考を進めていくスキルについては、論証図を紹介していただきました。何か主張があったときに、それを支えていく根拠は何か、さらにそれを支えていく根拠は何かというように、主張を完全に論理だけにして見せる図を書いてみると、思考をクリアにできるという話でした。疑う態度を養うにはどうすればいいかというと、一番いい、お勧めだと言われていたのが、現状では答えが分かっていない問題について思考を働かせ、自分の意見をまとめるということでした。これは非常に面白いと思います。

僕はもともと理系の学問を教えているわけですが、結構、知識伝達系の授業が多いのでそういうことは難しいと思っていたのですが、知識伝達系の授業でも、一部、置き換えることでこういうこともできるということでファシリテーターの先生が実例として一つ挙げられたのは、彼の物理の先生が、授業で確立した知識を教えた後に、実生活で見られている不思議、社会の不思議など、答えがはっきりしていないものについて考える時間を設けていたということでした。そういう具体的な方法を紹介していただいて、非常に僕にとって参考になりました。

最後に、グループの全員でディスカッションしたのですが、特にグループディスカッションを具体的に進める際の実際の問題について語り合いました。重要なこととして1人の方が言われたのは、建設的な批判に慣れさせることが大事だということです。建設的に批判することに慣れてもらうということです。一つ、こういう授業の欠点というか難しいところとして、多人数でやるのが難しいという点があるという話があったのですが、TAを上手に使うとできないことはない。ただし、これまでのようなTAではなく、権限をある程度与えられたようなTAが必要だろうという意見が出ました。そんなところです。

(報告者：福井謙一記念研究センター 准教授 池田 昌司)

#### ■テーマ5「研究室運営」

事例紹介：学際融合教育研究推進センター 准教授 宮野 公樹

ファシリテーター：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口 真奈

グループ5は「研究室運営」ということで、宮野先生に学際総合教育研究推進センターの事例紹介を受けて、ディスカッションを行いました。

この新任教員教育セミナーは、先ほどの前半のグループもそうですが、どちらかというと学生全体の教育ということで、教育FDに関するお話が多かったのですが、ここのグループでは研究室ということで、宮野先生のお言葉を借りるとラボラトリーディベロプメント（LD）という新しい言葉を頂き、研究室が、これからの大学の中では非常に大事だというお話がありました。そもそも大学には研究・教育・社会貢献という三つの大きな役割があるのですが、これを担っているのは実は研究室で、大学の実質を担っているという意味で、われわれがいる研究室が非常に大事だということで、ここがこれからの大学の中で大きく変わっていかなければ、大学も変わっていかないというお話でした。

研究室運営がなぜ大事かというと、今までは、カリスマだったり、力もお金も持っていた教授がぐいぐい引っ張っていくというような研究室が多かったのですが、これからは、時代も変わってきて、それでは学生もついていけないし、研究室の運営もうまくいかない。研究室自体が担っている役割も、研究をぐいぐいやっていくことももちろん大事なのですが、それだけではなくて研究室を通じて学生をどうやって育てていくか、人材をどうやって育てていくかというところが非常に大事である。研究室に求められる役割として、研究室はこれから「育人」というキーワードでやっていかなければいけないということでした。

研究室として成果を上げていくためにこれからどういうふうにやっていくかということでは、今までは行動で、実験をさせたり研究をさせたりして、結果の質、成果を上げていくというやり方だったわけですが、実際はその裏側にある、実際の行動、結果を変えるために、どういうふうに研究室がやっていくかというときに、その裏には、なぜそのようなことをやるのか、そして、それをやるためにはどういう人間関係をつくっていかなければならないのかというような、行動と結果の関係の裏側にある関係と思考、人間関係と研究に対する思考を変えていかなければいけないというお話がありました。そして、関係を変えるためには、コミュニケーションをしっかり行っていかなければいけないのですが、何のためにコミュニケーションをするのか。研究室には、学生、教授など、いろいろな人が関わるわけですが、何のためにこの研究室があるのか、自分たちは何を目的とするのかをお互いにはっきりと共有して運営していくことが重要です。そのためには、お互いにうまくディスカッションしたり、それぞれがどういう人なのかをよく見るのが大事だということです。一つ、唯一絶対の解があるわけではありません。こうすれば研究室運営はうまくいくという話ではなく、それぞれ、どういうタイプの人なのか、どうやって全員が目的に向かっていくように研究室をうまく動かしていくのかを考えていくことが、非常に重要であるということをお話されました。

そういったことを宮野先生からご紹介いただいた後、グループに参加した先生方で、それぞれ個別に抱えている問題などを話し合いました。特に話題になったのが、これは私が提案した質問なのですが、研究室の特に上の先生方、教授の先生方とどう付き合うか。それから、研究室に入ってくる学生さん。先ほどの最初の話にもありましたが、学生の質もいろいろ変わってきていて、意識が高い学生をどうするか、何もしない学生をどうするのかといったことも一つ一つ、人のタイプをよく見てコミュニケーションのスタイルを変えていくことで、結果的に大学の質を変えていけるのではないかということでした。研究室運営に対するいろいろなディスカッションができて、非常に良い時間を頂けたと思います。ありがとうございました。

（報告者：国際高等研究院 准教授 金丸 敏幸）

## ■テーマ6「博士課程院生のキャリア形成支援」

事例紹介：学生総合支援センター キャリアサポートルーム 教授 奥村 正悟

ファシリテーター：高等教育研究開発推進センター 助教 田中 一孝

われわれのグループでは、ドクターの学生、ポスドクも含めた学生のキャリア支援について、学生総合支援センターの奥村先生にご指導いただきながらディスカッションしました。教員になられた方はあまり苦勞されていない方も多いと思うのですが、最近ではドクターを取った後、なかなか仕事がない方もいるということで、そういう方をどうサポートしていくかを中心に議論しました。

一つの方策としては、どのように他の道を勧めるかということが挙げられます。他の道というのは、もちろん分野が違うということもありますし、研究以外の可能性もあります。そういう可能性をどのように勧めるか。教員の立場では、やはり自分の主流の、つまり自分の専門の研究分野以外を勧めることは難しいだろうということが、一つ問題として挙がりました。その中で、アメリカの例などをいろいろ挙げて議論したのですが、アメリカでは物理学から医学の分野に替わる人もいるし、ドクターを取った後に弁理士になる方もいます。それ以外に、皆さんがよく読まれているジャーナルの出版社に就職される方も、メーカーに就職される方もいます。そういう多様なキャリアパスがあるわけです。

では、日本ではどうでしょうか。日本の企業とは違って外資系の企業などでは、もちろんPh.D. を非常に高く評価してくれているそうです。京大の方にも実際にコンタクトがあって、マッチングが成功して就職した例があるということです。そのマッチングに寄与してくださったのが、本学のキャリアサポートルームです。本学のキャリアサポート体制は非常に充実しているのに、少なくとも今回このディスカッションに参加した方々の大半があまり知りませんでした。せっかく充実しているのに、周知されていないのではないのでしょうか。ドクターの方も含めて、特に研究室に就職案内のビラが回ってくると思うのですが、そういう外部の就職斡旋企業と学内のサポートセンターのチラシが、どちらがどちらか分からず、ほとんど見ずにスルーしてしまうということがあって、なかなか周知されていません。

実際に、教員自ら自身の研究分野以外の分野、研究以外のところにドクターの学生を就職させようとするのは敷居が高いというか、皆さんの方から提案するのは難しいかと思います。その中で、本学のキャリアサポートルームは、第三者的な立場でサポートやアドバイスをしてくださるので、教員としては使いやすい体制があることを、今回あらためて知ったわけです。そういうものを積極的に使っていったって、教員だけではクリアしにくいところがありますので、キャリアサポートを積極的に皆さんにも利用していただければいいのではないかと思います。

いずれにしても、教員は、どうしたら学生が幸せになれるかというスタンスを絶対に忘れないでサポートしなければいけないというのが共通の認識です。私は本学のキャリアサポートの回し者ではないのですが、一応、宣伝しますと、来年の2月11日に、ドクターの方、ポスドクの方を対象に、本学キャリアサポートルーム主催のジョブフェアが開かれます。私も、今日、サポート体制を聞いて非常に驚いて、ぜひ使わせようと思ったものがたくさんありましたので、先生方の学生にも、ぜひ紹介してあげてください。以上がテーマ6の「博士課程院生ためのキャリア形成支援」のまとめになります。

(報告者：工学研究科 准教授 深見 一弘)



## 2-4. 参加者からの意見・感想—事後アンケート結果より—

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行った。その結果、72名から回答が得られた。各質問に対する回答を以下に示す（質問によっては欠損値がある）。

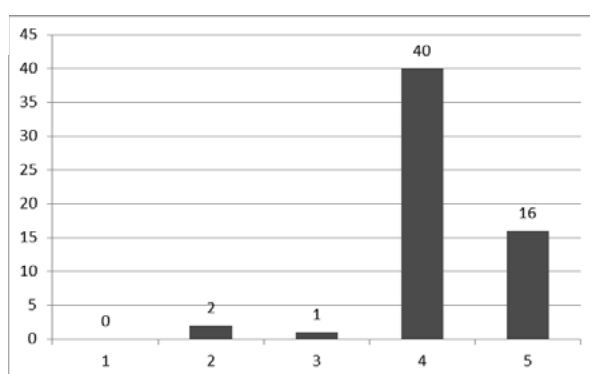
### (1) 各セッションの有意義度

各セッションの有意義度を「1. まったく有意義ではなかった」～「5. 非常に有意義だった」の5件法で尋ねた。平均で3.70～4.50、総合評価で4.19となり、全体としてかなり高い評価を得ることができた。特にセッション4「私の授業」が4.00、セッション5「グループ討論：京大でどう教え、指導するか」が4.50と高い値を示した。

#### ① 全体の総合評価

平均値：4.19

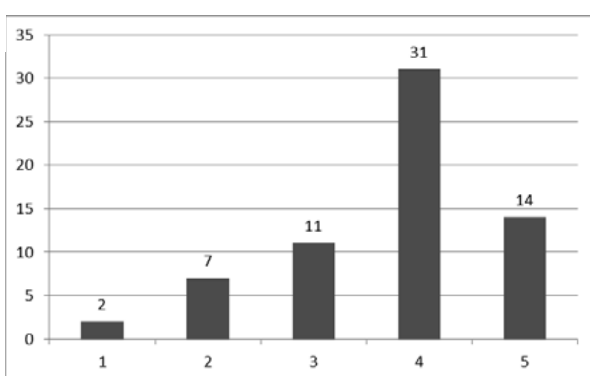
(人)



#### ② セッション1「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」

平均値：3.74

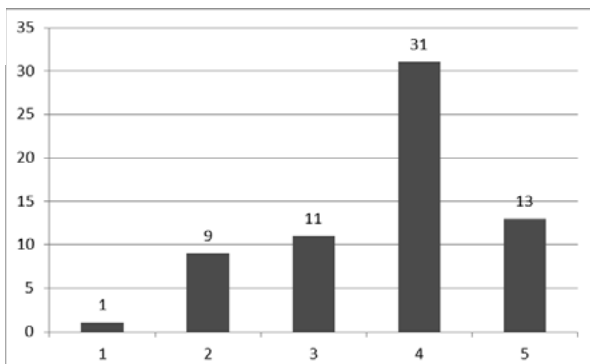
(人)



#### ③ セッション2「京大生の学習の実態」

平均値：3.72

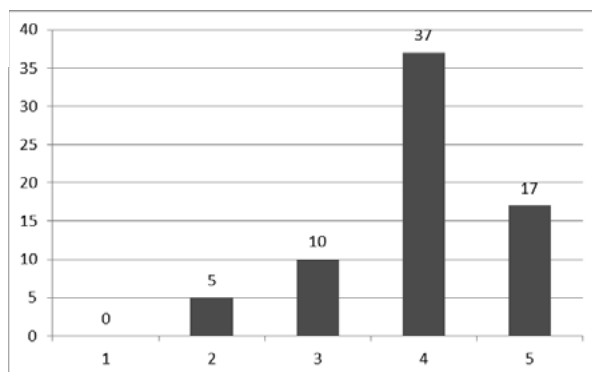
(人)



④ セッション3「京大の教育的取組」

平均値 3.93

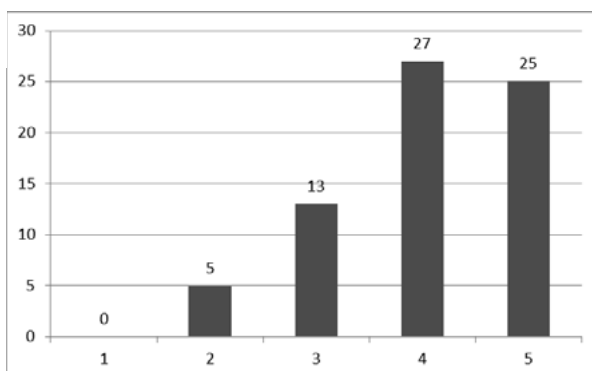
(A)



⑤ セッション4「私の授業」

平均値：4.00

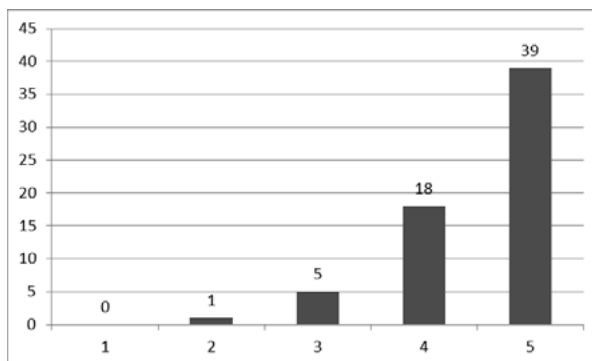
(A)



⑥ セッション5「グループ討論」

平均値：4.50

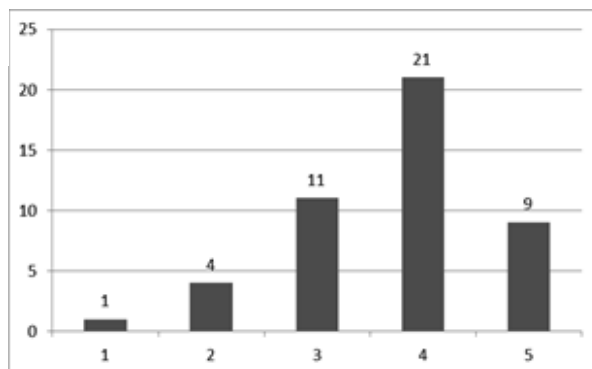
(A)



⑦ セッション6「ラップアップ」

平均値：3.70

(A)



## (2) セミナーの開催時期について

セミナーの開催時期について「適切であった」「どちらともいえない」「適切ではなかった」のいずれかを選択してもらい、その理由を自由記述で尋ねた。その結果、「適切であった」が43名、「どちらともいえない」が18名、「適切ではなかった」が5名であった。適切ではなかったとする理由としては、学会シーズン、科研費申請時期、もっと早い時期に知りたい内容だった等の記述がみられた。ただし、全体的には肯定的な意見が多かったこと、年度当初に実施するのと比べればメリットも多いと思われることから、来年度もこの時期に実施する予定である。

## (3) セミナープログラムに追加するとよいと思われる内容

自由記述をカテゴライズし、多いものから並べた。特に目立ったのは、セッション5のテーマとなっている内容をもっと多く知りたいという意見である。昨年度も、「困難を抱えた学生に向き合うには」は全体で共有した方がよいという意見があり、今年度から全体セッション(セッション3)にあげたが、「英語による授業」など今後の本学の課題として重要性の高いテーマについては、同様の対応をとった方がよいかもしれない。また、参加者に理系の助教が多いことを考慮して、今年度から「研究室運営」というテーマを設定したが、参加者も多く、内容的にも好評であった。

### 【セッション5の拡充】

- ・セッション5について、短い時間で良いのでミニ講義に基本的な取り組みを紹介して欲しい。
- ・セッション5の他のグループにも興味があるので、対話形式を保ちつつ、同じ内容で2回やってほしい。
- ・宮野先生のお話をじっくり聴きたかった。
- ・英語による授業の考え方やスタイルを全体で聞きたかったです。(グループごとでなく全体で扱ってもらえればありがたいです)
- ・セッション5は10人以下程度にすべきかと思います。24人は多すぎました。

### 【全学的な組織・制度・改革の方向性など】

- ・大学の組織の説明(理事が何人いて、どんな組織があつて、どこでいくらぐらいのお金を使っているか。どこに何人いるか)
- ・京大の教養教育の歴史、東大と比較しながら(東大の方が理想に近いので、そことのギャップを明らかにする)
- ・本学の改革の方向性について、より詳しく説明があれば良いかと思いました。(共通教育の授業提供数は精選されていく、など)
- ・教員制度ルールを作っている人に話を聞きたい。

### 【インタラクション】

- ・京都大学以外の出身の教員もいますし(今後も増えると思われるので)京都大学の教育のミッション、あり方について、このプログラム(セミナー)を企画した人たちと議論する機会があってもいいと思います。
- ・セッション毎の質疑応答。(全体の時間が足りないのであれば、セッション数をもう少し絞り込んだ方がよいのでは。)
- ・参加者どうしのコミュニケーションを促進するしくみがあるとよいと思いました。

### 【授業の具体例】

- ・授業やリソースのICT化について重点が置かれていましたが、「対話を根幹として」とある教育理念への対応とICT化との関連などについてご意見を聞きたかったです。
- ・第一回目の授業にどのような準備をするか、事例を交えて。
- ・授業において工夫している点がある先生の経験談

### 【学生・院生の声】

- ・学生側からの意見など聞いてみたい。
- ・教員と学生の間で、人間関係などの問題があった場合の対処法、事例をもっと知れたらよい。

### 【その他】

- ・ A session on how to use Panda
- ・研究の質をどのようにcheck評価できるのか。
- ・FDセミナーをシリーズ化して、京大からcertificateが出たらいいと思います。新任の任期付なので、次のことを考えます。回数が増えてもう少しターゲットがしぼられたり実践的なものが増えたら参加したいです。
- ・大学院教育をマジメに考える
- ・発達障害のあると思われる学生への対応について
- ・特になし。新しい情報が多く、刺激的でとても楽しめました。
- ・参考図書等の追加情報。
- ・MOOCの情報などよかったので、効率的な教育法etcなど自学自習できるものがあれば短い時間を補えることになると思う。
- ・むしろ短くしてほしいです……。この時期だと……。 (立場が変わると言うことも変わってしまう……。)

### (4)「セッション5：グループ討論」に追加するとよいと思われるテーマ

ここで一番多かったのは、(3)でもあがっていた授業の具体的な方法や事例であった。ここでも、セッション5の進め方についての提案があった。セッション5については、内容と方法、両方の面から拡充・改善を図る必要がありそうである。

### 【授業の技法】

- ・落第しそうな学生に対して、どのようにアプローチしていくか（具体的な成功事例の共有ができればいいな）と思います。あまり需要はないかもしれませんが……。
- ・日本語ライティングの訓練（米国の大学のEnglishライティングセンターのようなしくみ）
- ・よりテクニカルな議論ができたらと思いますので、場面設定などをしてより具体的に効率的な授業の方法について考えたい。結局、100人規模、10人規模の授業では、やり方、やり易さが異なってくるということになったので。
- ・教員～学生間のコミュニケーション&TIPS、スキル

### 【セッション5の進め方】

- ・テーマではないですが、現在これまで、どういった状況で何をどうやっているか、問題と自分なりの解決を共有し、他の解決案や予想された問題などをディスカッションする形の様なものが良いと思いました。楽しい時間でしたが、ほわーんと終わりました。
- ・2テーマくらい参加できても良いと思う。

### 【教育と研究の両立について】

- ・研究と教育活動の調和・両立・相乗効果

### 【学部・研究科間の交流】

- ・3回生向け学生実験の他学部の状況を知りたい。

### 【その他】

- ・セッション4の「落差」について。
- ・京大教員の使命とは？
- ・メンタルヘルス

- ・外国人教員100人計画、英語授業など国際化への取り組み。分野横断的な学術連携について。
- ・TAの養成と活用について

### (5) セミナーの改善点

セミナーの改善点として相対的に多かった意見は、「前半の短縮」と「後半の進め方の改善」、「対話やインタラクションの増加」と「対面で行うこととオンライン等で行うことの区別」であり、これらは互いに関連している。前半の講演の数をしぼり質疑応答の時間を入れる、学習状況のデータ等については、「京都大学の教育サポートリソース」のように資料を配付し、説明は簡単にすませる、といった工夫が必要だろう。

一方、「セミナー全体の時間短縮」と「時間の拡大」は相反する要求である。両方を勘案すれば、現状の時間枠のまま中身の充実で対処することが望ましいだろう。

セッション6については、事例提供者やファシリテーターによる報告が提案されているが、参加者による報告には、積極的な参加を促すという意味もあるので、現在の形式を維持しつつ、そのグループに参加していない人にも理解しやすい方法を考えたい。

「教育経験の違いへの対処」についても、3番目の意見にあるように、経験によってグループ分けするというより、むしろ経験の違いを活かして教え合う仕組みをつくっていききたい。

#### 【前半（セッション1～3）の短縮】

- ・A bit long-especially the セッション3. Perhaps have some other teachers explain their classroom like Professor Takahashi (that was very useful) inセッション4.
- ・前半のセッション1～4が少し長い
- ・セッション1と2はあまり必要ないのでは。

#### 【後半（セッション5：グループ討論、セッション6：ラップアップ）の進め方の改善】

- ・グループ討論については、時間を半分にわけて2つのテーマについて参加したかった。
- ・セッション3やセッション5の内容は個別でも良いので、かけ足ではなく時間をかけたセミナーを準備すべきではと思います。
- ・ラップアップで各グループから発表者が内容をプレゼンしたが、やっぱり参加していないので、理解しがたく、興味が持てなかった。9/6・7に大学コンソーシアムであったFD研修の場合は、グループが違って共通のテーマなので、理解しやすかった。参加者の発表よりは、事例紹介担当者もしくはファシリテーターの方が、他グループ参加者への情報提供という意味では理解しやすいかつ効率的ではないかと思いました。

#### 【セミナー全体の時間短縮】

- ・全体の時間をもう少し縮めた方が良いと思います。
- ・長いことと、内容が多い事でした。
- ・長い。
- ・2時間程度が適当ではないかと思っています。

#### 【時間の拡大】

- ・内容が多いため、講演時間を十分に取れない講演者がいた点。
- ・もう少し時間に余裕があれば理解しやすかったかもしれない。

#### 【授業や指導の具体例の提示】

- ・本学が進めている「自主学習」をどのようにうながしたら良いのか、方法・事例についてももう少し多く話を聞きたかった。
- ・セッション4：大変面白かった。ただ「落差を活用した」授業の一断面を一例でよいのでしてほしかった。
- ・具体的な授業スキルの教授があると良いと思いました。

### 【設備・空間の改善】

- ・セッション5のとき、となりのセッションの拍手で声が聞きとりにくかった。
- ・セッション5は別個の部屋に分かれて独立したスペースで行った方がよい。大部屋で行う場合には、隔壁を設けて声が漏れないようにする配慮が必要。
- ・もう少しプロジェクターが明るい良かったです。

### 【対話やインタラクションの増加】

- ・セッション1-4には対話がない（質問時間も下からの意見を反映させるところがない）。
- ・話を聞くばかりでDiscussionなど、自分で考える時間が少ない

### 【対面で行うこととオンライン等で行うことの区別】

- ・データ等は後で配信するだけでも良いと思った。
- ・OCWで受講できるのは省略すべき。国際競争力、教育力（授業のあり方）に特化して行う方が良いのでは。

### 【教育経験の違いへの対処】

- ・教歴のない新人からベテランの転入者まで同じメニューだと意義が薄れる。
- ・大学を卒業したり、学位を取得したばかりの20代の方には本セミナーは良いかもしれませんが、京大教員になる、しかもある程度の年齢ポジションであるようなおさら、それなりの学生指導、研究室運営にて成果をあげた方が多いのではないのでしょうか。もちろん、概論が必要なのはわかりますが、分野、現場などその教育理論や理念は千差万別であり、このような概論セミナーを5時間もやることにあまり意味は感じません。中には自己哲学を見せたいだけの自己満足型講師もいらっしゃるようで、私はもう参加したくありません。ありがとうございました。
- ・「改善すべき」というより気になった点ですが……。グループ討論で、教育経験がかなりある先生とそうでない先生が、対等に議論するのは難しいように思いました。どうしても前者が経験を教え（披露し？）がちに。でも、これは悪い事ではなく、活かすようなやり方もあるのかなあと思いました。

### 【その他】

- ・文科省が求める改革の必然性や道筋については力説されるが、その改革の枠組みに対する批判的な視点が全く欠けている。
- ・全体的に興味深いこと、おもしろいことが多かったが、刺激になったり何か考えが進むきっかけになったということはほとんどなかった。具体的に何がどうよくなかったのか、どうすればよいのかわからず、建設的なコメントができず申し訳ないです。受け手側の問題かもしれません。
- ・参加が任意なのか義務なのか分かりづらかった。4月から各部署で様々なオリエンテーション・セミナー等（京大職員向け、教員向け、事務、安全、情報環境など）がバラバラに開催されており、重なりも多いので、整理したり、スケジュールをまとめて提示していただければ良いように思いました。（バラバラに告知がくるので、スケジュール管理が煩わしく感じられます。）
- ・缶コーヒーが飲めることが事前に知りたかった（1コマが長いので）

### (6) セミナーのよかった点

個別のセッションでいえば、よかったとする意見で最も多かったのがセッション5の「グループ討論」である。これについては、グループ討論という形態とテーマの内容の両方について支持があった。今年度初めて行ったプレワークショップ（Ⅱ－4－2参照）の参加者の多さ、支持の高さもあわせて考えると、教員の側でもアクティブ・ラーニングが求められていることがわかる。

他分野の教員と交流できた点をあげる意見も多かった。

なお、(5)では「前半の短縮」という改善点が出されていたが、一方で、前半のミニ講義でさまざまな情報が得られたこと、特に京大の全学教育科目や京大生の実態などが参考になったという声も複数あり、決してセッション1～3が不要というわけではないことがわかる。

### 【セッション5（グループ討論）が参考になった】

- ・グループ討論では、現在の自分の講義における課題について、助言をうけることができ、非常に良かったです。
- ・グループ討論では、具体的なレベルで突っ込んだ内容の話が聞けたので、大変参考になった。
- ・グループ討論で英語での授業についてdiscussionできた点が非常に良かった。システムとして改善すべき点が明らかにあるが、それは容易には変わらないであろうこと、その中で教員がどう工夫して問題を解決するかという点について考えるチャンスになった。
- ・グループワーク等のインタラクティブな事業の設計をしなければならない立場なので、セッション5で「学生の思考力を鍛える」ための具体例を色々と学ぶことができ非常に参考になった。
- ・ディスカッションの時間が良かったと思います。積極的に参加できるので。
- ・セッション5で有用な情報を得ることができた。
- ・グループ討論では、話しやすい雰囲気をファシリテーターや話題提供の先生が作ってくださって、楽しく参加できました。各研究室の様子等が聞けて、視点が相対化されました。
- ・グループ討論で、自分自身には経験がないことを知ることができた点。
- ・グループ討論と午前中のワークショップは参考になりました（考えさせられました）。講義形式より充実度が違う。
- ・セッションが少人数で率直な意見が聞けて非常に勉強になった。教員個人で解決できないことにどう取り組む方法があるか示された。

### 【教員間で交流し、問題を共有できた】

- ・他の学部の方と普段お会いすることはほとんどないので、そういった先生方と意見交換できたのがよかった。（同じような悩みあるいは、興味深い工夫を知ることができた）
- ・他部門の方の意見や考えを知ることができ、今日一日でもずいぶん自身の考え方が変わりました。貴重な経験と知識を得られました。
- ・現場での悩みや異なる分野の先生が抱える問題や悩みを広く知ることができる。
- ・多分野の先生がたの考え方、ご意見を拝聴できた点。
- ・普段交流することのめったにない他学部の先生方のいろいろなご経験を伺うことができ、大変貴重な機会となりました。
- ・京大での様々なとりくみについてよく知ることができた。他分野の先生方と交流するよい機会になった。研究室の中だけでなく、外ともつながって発信できるようになりたいと思った。
- ・同期に出会えた。色々な人の意見を聞いた。

### 【京大の教育に関するいろいろな情報を得ることができ、認識が広がった】

- ・ Good overview of what the university is doing/thinking. Group discussion was also useful to see how others deal with similar problems.
- ・ミニ講義のテンポが大変よくあきることなく聴くことができました。参加時間に対して得られた情報が大変多く、非常に有意義だったと思います。
- ・全学教育以外の専門的な話（授業以外）を聞いたり、ディスカッションできたので、自身の幅を広げることができた点。
- ・研究室運営について研究されている先生の話が聞けたことがとても有意義だった。
- ・人材育成やそれに関わるコミュニケーションについてその大切さを知り、興味を持てた
- ・全学的な取り組みについて、全く知らなかった取り組み（キャリアサポートなど）を知るきっかけになった。
- ・高等教育院のことがある程度わかった。しかしもっと知りたい。
- ・全学共通科目及びゼミナールの存在を知った→教えたいがどうすればentryできるのか？
- ・制度上の授業時間数（学習時間）については知ることができ良かった。
- ・多様な学生への対応について、理解が深まりました。ありがとうございました。
- ・京大の学生の学習の実態はおもしろかった
- ・メンタルヘルスケアの知識、社会学の実際の講義例が聞けたこと。
- ・文化の違いが感じられた
- ・京大特有の話がたくさん聞けたこと。



### 【その他】

- ・高橋先生のお話がとても刺激的でした。「学術の地と一般学識に落差があるのは当然。その落差を経験する。」
- ・特にセッション3「困難を抱えた学生に向き合うには」とセッション5「研究室運営」がためになりました。ありがとうございました。
- ・教員の立場から学生との接し方を考える良い機会になりました。
- ・プレワークショップもよかったです。
- ・漠然とやってるつもりで不足していること、自信を持って良いことなどが実感できて良かった。
- ・教育指導について、考える時間が普段あまり取れないので、あらためて考える機会となった点。

### 3. 終わりに

参加者からのフィードバック（有意義度や自由記述）をみる限り、＜京都大学らしい教育とはどのような教育か＞を考え、＜そうした教育を行うためにどのような教育サポートがあるのか＞、＜大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか＞を知る、という本セミナーの目的は概ね達成されたといえるだろう。

全体的に多かったのは、具体的な授業の方法について事例を通して学びたい、「セッション5の各テーマについて一つだけ選択するのではなく他のテーマも知りたい」「対話やインタラクティブを増やしてほしい」という意見である。その一方で、「全学的な組織・制度・改革の方向性などについて知りたい」という声もある。

限られた時間枠の中で、これらを両立させるには、資料やオンラインによる情報提供ですませる部分と、授業や指導の方法について具体例をまじえながら議論したり体験したりしてみる部分とを、切り分ける必要があるだろう。

本稿であげた課題や改善策をふまえながら、来年度は、参加者が京都大学の教育について考え、自分の授業や指導の改善のヒントを得られるようなよりよい機会にしていきたい。

なお、本セミナーの内容および当日の様子については、京都大学 OCW および京都大学 FD 研究検討委員会において公開されている。

- ・京都大学 OCW

<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/center-for-the-promotion-of-excellence-in-higher-jp/pe0vck>

- ・京都大学 FD 研究検討委員会

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/seminor20140925.php>



(松下 佳代、田口 真奈、田中 一孝)

## II-5. 第10回工学部教育シンポジウム

京都大学高等教育研究開発推進センターは、本学工学部との学内連携の一環として、平成26年11月28日に開催された「第10回工学部教育シンポジウム」に参加した。当日は、本センターより、「ICT利用による授業改善と教育のオープン化」というタイトルで話題提供を行うと共に、ディスカッションに参加した。以下、同シンポジウムのプログラムとセンターによる話題提供の発表スライドを資料として添付することで活動報告に代える。

1. 日 時 平成26年11月28日（金）16時30分～19時30分

2. 場 所 京都大学桂キャンパスBクラスター事務管理棟1階 桂ホール  
(遠隔会場：吉田キャンパス工学部3号館北棟1階N1講義室)

### 3. プログラム

16:30～16:35 開会挨拶

工学部長 伊藤 紳三郎

16:35～17:05 話題提供

「発達障害への精神医療の歴史と大学における状況」

医学研究科教授 十一 元三

17:05～17:10 質疑応答

17:10～17:40 話題提供

「ICT利用による授業改善と教育のオープン化」

高等教育研究開発推進センター准教授 酒井 博之

17:40～17:50 休憩

17:50～18:50 「教育改善に向けて 私の授業アンケート結果を受けて」

①地球工学科 立川 康人

②物理工学科 琵琶 志朗

③電気電子工学科 和田 修己

18:50～19:00 「委員長総括」

新工学教育実施専門委員会委員長

木村 健二

19:00～19:30 ディスカッション

以下、酒井講演スライド。

(酒井 博之)



京都大学工学部教育シンポジウム  
2014.11.28

## ICT利用による授業改善と教育のオープン化

酒井 博之

京都大学 高等教育研究開発推進センター

## 本日のトピック

- オープンエデュケーションとは
  - OCW、教科書のオープン化、OER
- MOOC
  - edX、KyotoUx、MOOCの今後
- オンライン教育
  - 反転授業
- ICT活用教育の今後
  - ラーニングアナリティクス、パーソナライゼーション
- 教育実践知のオープン化へ



オープンエデュケーションとは

- ウェブを通じ、誰もが無償（または低コスト）で教育を受ける機会を得られる世界を実現する、という考え方やそれに向けた取り組みの総称
- OER (Open Educational Resources) の要素 (OECD 2007)
  - 学習コンテンツ：講義全体、コースウェア、コンテンツ・モジュール、学習オブジェクト、芸術作品、雑誌
  - ツール：学習コンテンツの開発・利用・再利用・配信を支援するためのソフトウェア、コンテンツの検索と体系化。コンテンツ管理システム、学習管理システム (LMS)、コンテンツ開発ツール、オンライン学習コミュニティなどを含む
  - 実装リソース：教材のオープンな出版、優れた実践のデザイン原理、コンテンツの翻訳を促進するための知的所有権のライセンス
- オープンエデュケーションの三要素 (Iivoshi & Kumar 2008)

ツール

コンテンツ

ナレッジ

オープンコースウェア (OCW) (2001-)

<http://ocw.mit.edu/>

- ・ 講義のオープン化 (MIT)
  - 学内で正規に開講されているすべての講義を無償公開
  - 講義ビデオ、講義ノート、シラバス、小テスト、試験、シミュレーションなど
  - これまでに2,000以上の講義を公開
  - 単位は出ない
- ・ OCWコンソーシアム
  - 米国内で20以上、全世界で250の高等教育機関が加盟
- ・ 企業によるプラットフォーム
  - iTunes U、YouTube EDUなど



京大OCW (2005-)  
<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>



- ・FD研究検討委員会の「おすすめ授
- ・英語リスニング教材への二次利用
- ・学外での講義の補助教材として



教材のオープン化：Connexions (2000-)

<http://cnx.org/>

- 自由に教材を作成、公開可
  - 22,498のモジュール、1,365のコレクション
- 教材の利用・再利用の促進
  - クリエイティブコモンズ
- 教科書の作成
  - オンライン、紙媒体
- 教材の質保証
  - 学協会、高等教育機関、個人による推薦 (Lenses)



- 背景
  - 米国の大学・カレッジにおける学費・教科書代の高騰

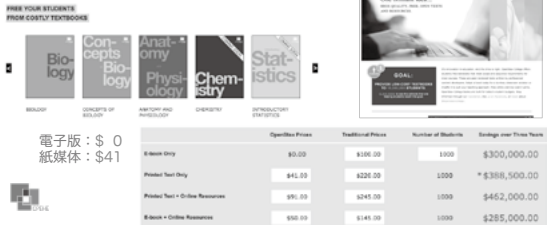


表示、改変禁止、非営利、継承を選択

教科書のオープン化：OpenStax College (2012-)  
<http://openstaxcollege.org/>

- 質の高い学習教材への学生のアクセスを向上させることを目的とする非営利組織
- 開発した教科書を無償で提供
  - 物理学、社会学入門、生物学、統計など
  - 大学教員によるピアレビュー

ダウンロード：100万件 +  
 (2014.10)

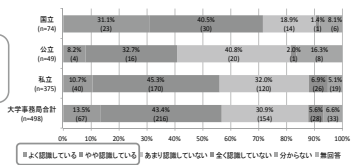


電子版：\$ 0  
 紙媒体：\$41

オープンな教育リソース（OER）について  
 (京都大学 2014)

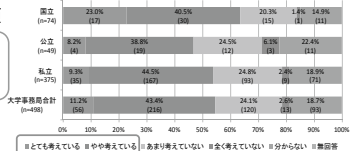
・ 認識の度合い

Q：OERに関する貴学の認識の度合いについてご回答下さい。



・ 将来的な価値

Q：OERは、今後、貴学にとって価値あるものになると考えていますか？



米国との比較

- OERについての認識 (Allen & Seaman, 2014)
  - 「とても認識・認識」：20.3% < 日本
- 電子書籍に対する認識 (Green 2013)
  - Q「今後5年間、電子書籍は指導教材のための重要な供給源となるか」
  - A「同意・強く同意」：公立大学：90%、私立大学：95%+
  - デジタルコンテンツに対するオープンライセンス (CC) 利用の奨励にも肯定的回答 (公立：45%、私立：40%)

MOOC

- 大規模公開オンライン講義 (Massive Open Online Courses)
  - 大学の1,000+のコースが提供済み
  - 授業をプラットフォームを通じて無償で提供
  - 数週間～数ヶ月の期間
  - 数万名の受講者
  - コース修了者には修了証を発行することも
- 『人工知能入門』（スタンフォード大学）
  - 約190カ国から約16万名が登録（2011秋学期）
  - 約2万名が修了
- 主なMOOCプラットフォーム（米国）
  - edX (<https://www.edx.org/>)
  - Coursera (<https://www.coursera.org/>)
  - Udacity (<https://www.udacity.com/>)



MOOCプラットフォームの世界的拡がり



edX

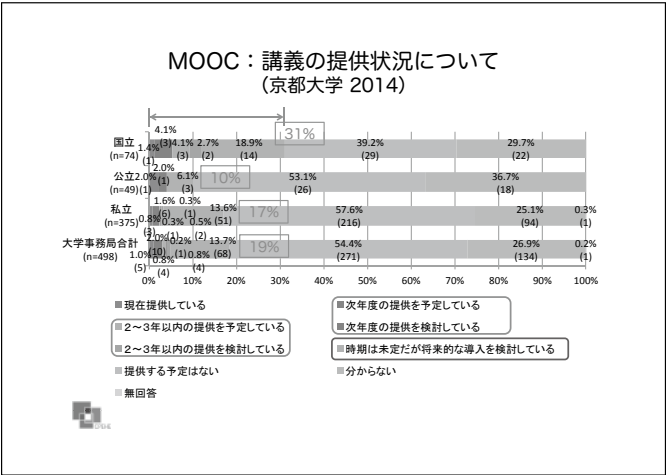
<https://www.edx.org/>

- MOOC プラットフォームのedXに参加
  - KyotoUx（2014年度4月より講義提供）



### The Chemistry of Life

- 上杉志成教授（物質－細胞統合システム拠点／化学研究所）
- 2014.4開講（15 weeks）



### MOOC：今後の講義提供について（京都大学 2014）

- 現時点で、近い将来の提供機関数の大幅な増加は見込めない
- 潜在的な講義提供機関の存在
  - 先行の提供機関の動向が鍵

	国立	公立	私立	合計
次年度の提供を予定している	3	1	6	10
次年度の提供を検討している	0	0	1	1
2～3年以内の提供を予定している	3	0	1	4
2～3年以内の提供を検討している	2	0	2	4
時期は未定だが将来的な導入を検討している	14	3	51	68

注：短大・高専を含めると若干増える

### MOOC：講義提供の目的について（京都大学 2014）

	国立 n = 23	私立 n = 64	合計 n = 92
高校生向けの広報	43.5%	56.3%	51.1%
留学生の獲得	65.2%	31.3%	38.0%
国内の大学生の獲得	47.8%	45.3%	44.6%
国内の大学院生の獲得	39.1%	20.3%	23.9%
社会人の転職の支援	0.0%	6.3%	4.3%
社会人のスキルアップの支援	30.4%	26.6%	26.1%
生涯教育の支援	39.1%	53.1%	47.8%
卒業生への教育サービス提供	8.7%	18.8%	15.2%
自学の学生の学習環境の向上	69.6%	56.3%	59.8%
多様な教育提供の選択肢の拡大	73.9%	57.8%	60.9%
教育情報の発信	65.2%	48.4%	53.3%
高等教育機関としての社会貢献	69.6%	56.3%	59.8%
教育の質の向上のための学習データ収集	30.4%	28.1%	28.3%
ファカルティ・ディベロップメント	17.4%	20.3%	18.5%
大学間教育連携（単位互換等）	34.8%	23.4%	27.2%

※公立は母数が小さい（n=4）ため除外

### 米国との比較（1）（Allen & Seaman, 2014）

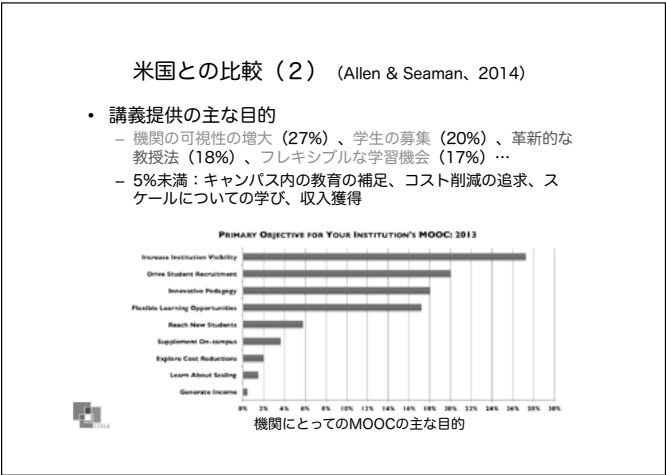
- 提供機関：2.6%→5.0%
  - 研究大学：20%
  - 大規模大学（15K+）：14%
- 提供未決定・計画なし：86%
  - 一部は「利用側」と見る事も

MOOCへのコース提供機関（2013）

### 米国との比較（2）（Allen & Seaman, 2014）

- 講義提供の主な目的
  - 機関の可視性の増大（27%）、学生の募集（20%）、革新的な教授法（18%）、フレキシブルな学習機会（17%）…
  - 5%未満：キャンパス内の教育の補足、コスト削減の追求、スケールについての学び、収入獲得

機関にとってのMOOCの主な目的



## MOOC がもたらす影響

- 大学から個人教員へ
  - 大学が存在意義が問われる時代
  - 既存の大学の階層構造の硬直化（エリート大学による独占）
- 生涯学習社会
  - グローバルレベルで高等教育へのアクセスを容易に
  - 社会人の学び直しの機会提供
- 優秀な人材の発掘、提供
  - 就職、転職を目的とした情報提供
- MITxのXseries
  - 関連する複数のコースに対して修了証を出す（2013秋学期-）
- 高校生向けコース
- 専門家養成コース



## 学内オンライン教育の可能性

- 学内向けMOOC？
  - MOOCと区別するため、SPOC（Small Private Online Courses）と呼ばれることも
  - 実態は既存のeラーニングと同じ
  - 学内の教育インフラと連動することで利用価値が高まる
- 考えられる用途
  - 通常授業の補助（予復習・欠席者対応）
  - リメディアル教育（例：行列問題等、未修項目への対応）
  - 反転授業
  - 留学生に対する受講機会提供の可能性 etc.



## 反転授業（Flipped Classroom）の広まり

- 知識習得は授業前にウェブで
  - 短時間の講義ビデオ（OERの活用）
  - 教材、確認テストの提供
  - セルフペース
- 対面の授業は小テストで開始



高等教育における事例（参考：バークマン・サムズ 2014）

- サンノゼ州立大学工学部
  - MITのMOOCを反転授業に利用
  - 落第率減少：40→10%
- スタンフォード大学医学部（2012）
  - 出席率向上（出席は任意）：30 → 80%
  - 授業評価向上



## 反転授業の2類型

- 完全習得学習型（例：サンノゼ州立大学工学部）
  - 早期に学習評価を行い、必要な支援を施す
  - 全員が一定以上の理解に至ることをめざす
- 高次能力学習型（例：スタンフォード大学医学部）
  - 授業の目標自体が変化（「高度な臨床に関する能力育成」へ）
  - 教員のファシリテーション能力が必要
- 教室内での教員の役割の変化
  - 学びのファシリテーター
- 日本では、授業外学習時間を確保する効果も？

京大生の授業外学習時間  
1回生：8割が5h/w未満  
3回生：6.5割が5h/w未満

※京都大学自学自習等学生の学習生活実態調査報告書（2013）より



## 山梨大学工学部の事例

図2 反転授業（FC）導入による成績向上の一例  
（「情報通信I」中間試験結果の幹葉表示）

平成24年度（FCなし）	得点	平成25年度（FCあり）
	0 — 9	
5	10 — 19	
	20 — 29	7
887	30 — 39	699
5432111	40 — 49	
9988755543210	50 — 59	1349
987766543210	60 — 69	458
96444310	70 — 79	111669
8765422100	80 — 89	012244667778
30	90 — 99	0011224455677788999
	100	00
N=56, 平均値63, 中央値63.5		N=50, 平均値80.4, 中央値86.5

低得点者大幅減  
(24 → 8)  
高得点者大幅増  
(12 → 33)

## ICT活用教育の今後

- どこに向かうのか
  - ラーニングアナリティクス
  - パーソナライゼーション

### パーソナライズ学習とは

- 学生の多様化
  - 適性、前知識、動機づけ、学習スタイル、興味・関心などが異なる
- “One-size-fits-all” アプローチからの脱却
  - “Seat time requirement” ?
  - スキル（コンピテンシー）ベースでの評価
  - テクノロジーにより支援可能な側面がある
- National Education Technology Plan 2010
  - “Transforming American Education: Learning Powered by Technology”（米国教育省教育テクノロジー局）
  - ネットワーク化された世界における学習者中心フレームワーク
  - パーソナライズ学習
  - アナリティクス



### Learning: Engage and Empower

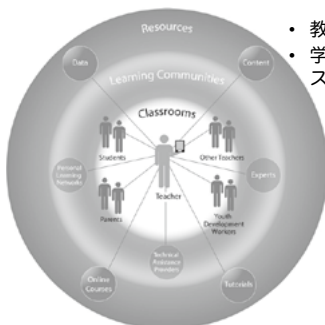


- 個人毎に学習のゴールを設定
- 21世紀スキルをベースにした評価
- “always-on” の環境
  - 学習リソース
  - 学習ツール
  - 学習履歴・データ
  - 学習コミュニティ
  - 教員 ...

Figure 1. A Model of Learning, Powered by Technology

<http://www.ed.gov/technology/netp-2010/learning-engage-and-empower>

### Teaching: Prepare and Connect



- 教員に対する支援環境
- 学習データなどのリソースに24hアクセス可

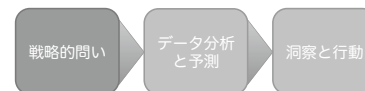
Figure 3. Connected Teaching Builds New Competencies

<http://www.ed.gov/technology/netp-2010/teaching-prepare-and-connect>

### ラーニングアナリティクスとは

- ラーニングアナリティクスの定義 (SoLAR\* Webサイトより)
  - 学習およびそれが起きる環境を理解し最適化することを目的とした、学習者やその文脈に関するデータの測定、収集、分析、報告

- アナリティクスのプロセス (ECAR 2012)



\*Society for Learning Analytics Research

### ラーニングアナリティクスがモデルを適用する際の問いの例

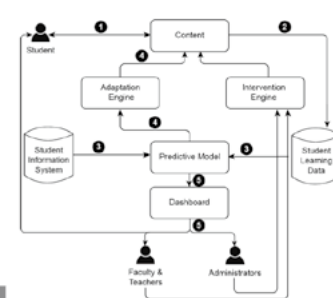
- 学生が次のトピックに進む準備ができるのはいつか？
- 学生は授業の中でいつ遅れを取るのか？
- 学生が授業の修了に対していつリスクとなるのか？
- 学生は介入なしにどの程度の成績を取りそうか？
- ある学生が次に履修する最善の授業は何か？
- 学生を助けるためにカウンセラーを紹介すべきか？



(U.S. Department of Education, 2012, p.14)

### Enhancing Teaching and Learning Through Educational Data Mining and Learning Analytics (U.S. Department of Education Office of Educational Technology, 2012)

Exhibit 1. The Components and Data Flow Through a Typical Adaptive Learning System



(U.S. Department of Education, 2012)



